松本市文化財調査報告No.23

松本市内田雨堀遺跡

——第2次緊急発掘調査報告書——

1982. 3

松本市教育委員会

松本市文化財調査報告No.23

松本市内田雨堀遺跡

——第2次緊急発掘調査報告書——

1982.3

松本市教育委員会

調査地全景（C、D地区、E地区の一部）

調査地全景（E、F、G地区）

序

雨堀遺跡は松本市の東南端にあり、崖の湯の登り口に位置します。この雨堀遺跡のある内田地区周辺の東山山麓は、古くは縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され、隣接する塩尻市片丘地区とともに、早くから識者の注目するところとなっていた場所でもあります。

今回の発掘調査は土地改良総合整備事業に伴う事前調査で、昨年度に続き調査を行ったものであります。

発掘調査団も昨年同様に、日本考古学協会員大久保知巳氏を団長にお願いし、調査員・調査補助員にも松本市在住の研究者・大学生を主体として編成して調査を行いました。

調査は炎天下の２ヶ月にわたり、団長をはじめ調査員・調査補助員の非常な熱意と地元整備委員会・寿史談会その他多くの皆様方のご協力により、無事終了し、数多くの土壙および出土遺物の検出がありました。その詳しい経過と結果については本書に記したとおりであります。

ここに紹介する資料が今後の文化財保護と、地域の人々の歴史を考えていく上で、何らかの参考になれば幸甚に存じます。

最後に今回の調査にあたりまして、多大なご理解・ご協力を下さいました関係各位に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和57年３月

松本市教育委員会

教育長　中　島　俊　彦

例　　言

1　本書は昭和56年７月18日より９月18日にわたって行われた、松本市内田・雨堀（あんぼり）遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2　本調査は松本市が内田雨堀遺跡調査団（団長大久保知巳）に委託して行ったものである。

3　本書の執筆は各調査員が分担して行い、文責は文末に記した。また一部執筆内容について次の方々の協力を得た。

高桑俊雄、島田哲男

4　報告書作成に当たっての遺物整理、遺構図整理の各段階に次の方々の協力を得た。

竹原　学、三村　泉、井口千佳、伊那史彦、藤森幾康、倉科由加理
滝沢智恵子、平林　彰、直井雅尚、高桑俊雄

5　掲載図類の縮尺はその都度示したが、遺物に関しては次の様に統一した。

縄文土器	（実測）	１：６
	（拓影）	１：３
石　　器	（小形品）	１：２
	（中、大形品）	１：４
土製品		１：２

6　本書の編集は事務局が行った。

7　調査地の航空写真撮影については、中部電力木村勝廣氏の協力を得た。記して謝意を表する。

8　出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目　　次

序
例言
目次
第１章　調査経過……1
　第１節　調査に至るまでの経過……1
　第２節　調査日誌……2
第２章　遺跡とその環境……7
　第１節　遺跡付近の自然環境……7
　　1　位置と地形……7
　　2　遺跡周辺の地質……8
　　3　遺跡の岩石と地層……11
　　4　地形の形成……12
　　5　まとめ……15
　第２節　周辺遺跡……16
第３章　調査結果……19
　第１節　調査の概要……19
　　1　概　要……19
　　2　各地区の概要と土層……20
　第２節　遺　構……33
　　1　小竪穴……33
　　2　集石状遺構……34
　　3　土器集中箇所……34
　第３節　遺　物……39
　　1　土　器……39
　　2　石　器……42
　　3　土製品……46
第４章　縄文時代中期における松本平……74
第５章　結語……92

図 目 次

第１図　遺跡の位置…… 6
第２図　遺跡の地層断面…… 9
第３図　雨堀両岸の地層断面……10
第４図　周辺遺跡図……17
第５図　調査地区及び周辺地形図……22
第６図　Ｃ・Ｄ地区全体図……23
第７図　Ｃ地区土層断面図……24
第８図　Ｄ地区土層断面図(1)……25
第９図　Ｄ地区土層断面図(2)……26
第10図　Ｅ・Ｆ地区全体図……27
第11図　Ｅ地区土層断面図(1)……28
第12図　Ｅ地区土層断面図(2)……29
第13図　Ｅ地区土層断面図(3)……30
第14図　Ｆ地区土層断面図(1)……31
第15図　Ｆ地区土層断面図(2)……32
第16図　集石状遺構実測図……34
第17図　Ｃ・Ｄ地区小竪穴実測図(1)……35
第18図　Ｃ・Ｄ地区小竪穴実測図(2)……36
第19図　Ｃ・Ｄ地区小竪穴実測図(3)……37
第20図　Ｃ・Ｄ地区小竪穴実測図(4)……38
第21図　出土土器(1)……48
第22図　出土土器(2)……49
第23図　出土土器(3)……50
第24図　出土土器(4)……51
第25図　出土土器(5)……52
第26図　出土土器(6)……53
第27図　出土土器(7)……54
第28図　出土土器(8)……55
第29図　出土土器(9)……56
第30図　出土土器(10)……57
第31図　出土土器(11)……58
第32図　出土土器(12)……59
第33図　出土石器(1)……60
第34図　出土石器(2)……61
第35図　出土石器(3)……62
第36図　出土石器(4)……63
第37図　出土石器(5)……64
第38図　出土石器(6)……65
第39図　出土石器(7)……66
第40図　出土石器(8)……67
第41図　出土石器(9)……68
第42図　出土石器(10)……69
第43図　出土石器(11)……70
第44図　出土石器(12)……71
第45図　出土土製品(1)……72
第46図　出土土製品(2)……73
第47図　松本平における縄文中期住居址の炉址の変遷…84
第48図　松本平Ⅱ期……85
第49図　松本平Ⅳ期……86
第50図　松本平Ⅴ期その１……87
第51図　松本平Ⅴ期その２……88
第52図　松本平Ⅵ期……89
第53図　松本平Ⅸ・Ⅹ期……90
第54図　松本平Ⅺ・Ⅻ期……91

表 目 次

第１表　鉢伏山地西ろくのたい積層と地形面…… 8
第２表　塩沢川・舟沢川複合扇状地地形面の対比……13
第３表　打製石斧の形態別個体数……44
第４表　小竪穴一覧表……94
第５表　実測土器一覧表……96
第６表　拓影土器一覧表……98
第７表　石器一覧表…… 102

図 版 目 次

図版１　Ｃ地区
図版２　Ｄ地区
図版３　Ｅ地区
図版４　Ｅ地区
図版５　Ｅ、Ｆ地区全景
図版６　Ｆ地区
図版７　Ｆ、Ｇ地区
図版８　小竪穴(1)
図版９　小竪穴(2)
図版10　小竪穴(3)
図版11　土器(1)
図版12　土器(2)
図版13　土器(3)
図版14　土器(4)
図版15　土器(5)
図版16　土器(6)
図版17　土器(7)
図版18　土器(8)
図版19　石器(1)
図版20　石器(2)
図版21　石器(3)
図版22　石器(4)
図版23　石器(5)
図版24　石器(6)
図版25　石器(7)
図版26　石器(8)
図版27　石器(9)
図版28　石器(10)
図版29　石器(11)、土製品
図版30　集石状遺構、調査スナップ

第１章　調査経過

第１節　調査に至るまでの経過

雨堀遺跡は松本市東南端の東山山腹・山麓に位置し、縄文時代中期を中心とする遺物を出土する埋蔵文化財包蔵地として以前から周知されている遺跡でもあった。

ところが、本遺跡を含む一帯に団体営によるほ場整備事業が計画され、昭和54～57年度にかけて工事が実施されることになった。この為、松本市教育委員会では事前に発掘調査を行い、記録保存をはかることとし、55年度は７月より９月にかけて発掘調査を行った。その調査結果の詳細は『松本市内田雨堀遺跡緊急発掘調査報告書』に記されたとおりであるが、当初の予想を大きく上回り、縄文時代中期の竪穴住居址19軒を検出するという、多大な成果をあげることができた。

今年度も周辺のほ場整備事業が継続されることが決定しており、前年度に引き続き事前に発掘調査を行い、記録保存をはかることとした。そのため松本市教育委員会では前年度同様、大久保知巳氏を団長とする調査団に調査を委託し、下記の通り調査団を編成して調査に臨むこととなった。

調査体制

調査団長　大久保知巳（松本市島内）
調　査　員　西沢　寿晃（松本市惣社）
　　太田　守夫（松本市芳川）
　　三村　　肇（松本市里山辺）
　　山越　正義（東筑摩郡明科町）
　　熊谷　康治（塩尻市洗馬）
　　降旗　俊行（南安曇郡三郷村）
　　横田　作重（松本市大村）
補助調査員　篠宮　　正（塩尻市片丘）
　　小口　妙子（松本市並柳）
　　瀬川　長広（松本市清水）
　　吉沢　酉己（松本市島内）
　　上野　正春（松本市女鳥羽）
　　大出　六郎（松本市中央）
協　力　者　高野健介、青木元衛、百瀬浩三、戸田大学、上条国雄、百瀬憲吾、古屋人兄、古屋梅男、清水千春、藤森敏雄、白川浩資、荘　秀也、甕　恵以子、市川ふみ、甕

隆博、百瀬郷子、千村公子、渡辺みな子、百瀬隆一、赤羽千鶴、百瀬修平、神澤しづよ、石井久子、百瀬涼三、前沢芳成、村井　章、酒井嘉道、酒井　聖、原田美幸、手塚州美礼、井口千佳、丸山千賀子、岡村康治、斉藤好子、酒井ゆかり、降旗勇一、百瀬浩子、藤森幾康、三村　泉、寺崎秀彦、丸山正一郎、中堀雅英、竹原　学、丸山　広、長瀬　真、小平　靖、中山玲子、小松純子、宮沢浩文、百瀬　敦、相野田透、上条美穂、村山一善、上条謙治、佃みか子、田中奈美。

事　務　局　田堂　　明　社会教育課長
神澤昌二郎　社会教育課文化係長
百瀬　　清　社会教育課文化係主事
古屋　晶敏　内田公民館主事

第2節　調査日誌

昭和56年7月18日　(土)　晴　棚谷工業によりブルドーザーにて表土除去。大久保団長立合。中部電力木村勝廣氏らと送電線鉄塔下工事の保安について打合せ。C地区では西側に黒色土の落ち込みを感じる。

7月20日　(月)　晴　ブルドーザー2台によりC地区の北隣、D地区の表土はぎおよび堀内側、E、F地区、堀寄り東側のG地区の表土はぎ完了。篠宮立合。C地区では石鏃と縄文土器片あり。特にE地区では縄文中期土器片多し。中部電力木村氏と打合せ。保安上、鉄塔下の発掘はしないこととする。夕方テント設営。夕立あり。

7月21日　(火)　晴　午後作業用具運搬。夕立あり。

7月23日　(木)　晴　本日より本格的作業開始。朝参加者全員により、C～G地区を実見し、後大久保団長より挨拶。事務局より経過説明。C地区表土除去後の落込みを中心として鋤簾により平削するも、堅くて作業ははかどらない。そのためユンボを入れて落込みを追求することとする。

7月24日　(金)　曇　継続作業。C地区西側中央に底径15cmの網代底部分出土。

7月25日　(土)　晴　C地区ユンボ入る。東側寄りに縄文土器底部出土。ベルトコンベヤーおよび発電機運び込む。帰路農道でトラックが落ちそうになり、ブルドーザーで引っぱる。ユンボでは平均10cmを掘り地山に至る。

7月26日　(日)　晴　C地区西側をユンボで掘る。他にC地区内の平削り。C地区の全体をみるとやや東北の線に二列の黒色土の落込みが計8ヶ所にみられ、これが中世の掘立柱の跡ではないかと推定される。また2ヶ所には縄文中期の土器がまとまって出土しており、これが黄褐色土の地山に僅かに黒色土をのせているので、あるいは住居址ではないかとも思われる。

7月27日　(月)　晴　定休日。作業休み。

7月28日 (火) 晴 ユンボによる除土作業はD地区に入る。D地区では12ヶ所に小竪穴検出。午後4時、ユンボ作業はG地区の除土を行うが、ここでは旧河川の淀みらしく、石を含まない粗い砂質土がローム層まで続いており、遺構、遺物はない。信毎飯田記者“暑さにいどむ„をテーマとした取材に来訪。

7月29日 (水) 晴 堀の中E地区の東側(F地区)をユンボで除土。他の班はC地区東壁、北壁、D地区東壁を出す。本日と明日の二日間、松本市立博物館の学芸員実習生として、日本大学、臼居直之、大坪維章君発掘実習として作業に参加する。

7月30日 (木) 晴 C地区東壁、南壁、D地区西壁、東壁出し。E地区ユンボによる除土作業。E地区よりは板状土偶他縄文中期土器片多量に検出。しかし遺構は不明。堀内中央の水路(葦の生えている位置)南側を除土しているが、そのうち中央部に黒色土が深い。本日山越正義先生引率により旭町中学校社会科考古クラブ生徒12名参加。4時すぎ小雨あり。早目に終了する。

7月31日 (金) 晴 基準点よりC、D地区に基点移動。D地区西壁面出しおよび断面図をとりはじめる。C地区小竪穴落込み掘る。午後1時日食あり60%欠ける。

8月1日 (土) 快晴 C地区西側およびD地区西壁、北壁断面図とる。C地区小竪穴にナンバーをつける。縄文土器片の検出ヶ所3、土師・灰釉陶器の検出ヶ所2、焼土・炭化物検出ヶ所1、他計27ヶ所。ほとんどが径60cm位の楕円又は四角形で、東寄りに小竪穴が9ヶ2列に並ぶ。小竪穴断面図とる。

8月2日 (日) 快晴 三村肇らによりC地区小竪穴掘りあげ。No.9より磨製石斧(長径5cm)出土。C地区東壁・南壁断面図をとる。D地区小竪穴をさがす。土が乾いて堅い。

8月3日 (月) 晴 定休日。

8月4日 (火) 晴 C地区小竪穴掘り込みおよび実測。D地区東壁、県陵生らにより断面図をとる。他班はD地区小竪穴検出作業。E地区も継続作業を行う。午後4時、夕立ちのため早目に終了。

8月5日 (水) 晴 肌寒いほど涼しい。C地区小竪穴平面図とる。他班はD地区小竪穴を断ち切る。D地区内小竪穴は計24箇所になり特にNo.36とNo.41内には土器がはいっている。

8月6日 (木) D地区測図。E地区継続作業。黒色土落込みの範囲は広く、遺構は出てこない。遺物の廃棄場所か、土器片はこわれているものが多い。

8月7日 (金) 薄曇、雨 肌寒し。D地区小竪穴平面・断面測図。他班はE地区北壁を出す。午後雨のためテント内にて土器洗いとネーミング。午後野尻湖考古学研究会麻生優先生他20人現場見学に来訪。

8月8日 (土) 曇、小雨 D地区小竪穴No.10の土器掘りあげ。午後雨のためテント内にて土器洗い。

8月9日 (日) 薄曇 一班は全体測量。他全員でE地区東壁、南壁出し、一部E地区東側部分掘り下げ。寿史談会応援に来る。

8月10日 (月) 晴 定休日

8月11日 (火) 曇 E地区東壁・南壁断面図とる。同地区西側へ拡張。縄文中期初頭土器多い。

8月12日 (水) 雨、晴 午前中雨のため土器洗い。午後E地区掘る。鼓形の小形土偶出土。

8月13日 (木) 曇 E地区継続。妊娠土偶出土。

8月14日 (金) 曇 夕立。E地区掘り下げ。遺物多し。C・D地区小竪穴計測一覧表づくり。

8月15日～17日 お盆休み。

8月18日 (火) 曇 E地区中央部分、住居址に似た落込みあり。C地区写真撮影。

8月19日 (水) 小雨、晴 土器洗い。E地区掘り込み。堀内全体をみると、堀内の旧水路（一番深くなっている）南側斜面を掘っているが、そのやや南側部分が黒色土が落込むというより、流れ入っている状態で、その層に遺物が多い。東西にみると、東寄りに遺物が多い。

8月20日 (木) 晴 全員E地区を掘る。寿史談会応援に来る。

8月21日 (金) 晴 C地区テント東に数ヶの敷石状の石を測図し、その下部たち切りを行う。E地区は拡張と北壁断面図をとる。

8月22日 (土) 小雨 E地区東寄りのベルトのセクション図とる。午後降雨のため土器洗い。

8月23日 (日) 小雨、晴 C地区東西ベルトのセクション図とる。

8月24日 (月) 晴 定休日。

8月25日 (火) 晴 E地区掘り込み継続。大学生等が去り、作業員が少なくなる。

8月26日 (水) 晴 E地区落ち込み内のベルトはずし、次第に遺物は少なくなる。NHK取材に来訪。

8月27日 (木) 晴 E地区円形落ち込み内上部土除去。

8月28日 (金) 雨 雨のため土器洗い。

8月29日 (土) 晴 樋沢遺跡シンポジウム出席のため休日。

8月30日 (日) 晴 E地区円形落ち込み内除土作業継続。

8月31日 (月) 晴 定休日。

9月1日 (火) 晴 E地区円形落ち込みは5×5m－30～40cmで住居址らしいが、壁・床など不明な点が多い。

9月2日 (水) 曇 E地区円形落ち込み北西寄りに中礫による列石がある。その周辺を掘り下げたところ、黒色土層より縄文中期土器片が少量検出される。住居址とは言い切れないので仮住居址No.1とする。

9月3日 (木) 晴 E地区円形落ち込みを仮住居址No.2として追求する。覆土上に遺物はあるがE地区東側出土の遺物量と比較すると僅少である。

9月4日 (金) 曇 雨 昨日の継続作業。午後雨のため土器洗い。

9月5日 (土) 曇 F地区周壁出し。西側壁黒色土層中より打製石斧、土器片出土。G地区も除土後、全体の壁を出す。東・南・北壁出し終る。中日新聞記者取材に来訪。

9月6日 (日) 曇　仮住居址No.1、No.2の掘り下げ。F地区断面図、四囲をとる。

9月7日 (月) 晴　定休日。

9月8日 (火) 晴　E地区仮住居址No.1東側土手はずし。No.2西側土手セクションどり。

9月9日 (水) 雨　降雨のため作業中止。

9月10日 (木) 曇　E地区火曜日よりの継続作業として、東西セクションベルトの層位図どりおよび、取りはずし作業。F地区1G(焼土残存部)掘り下げ後、十字のベルトを設ける。焼土は痕跡程度しかない。そばに90×70×18cmの大石出る。

9月11日 (金) 晴　E地区列石測図および周辺掘り下げ。F地区掘り下げ。

9月12日 (土) 雨　雨天中止。

9月13日 (日) 晴　G地区セクションどり。

9月14日 (月) 晴　定休日。

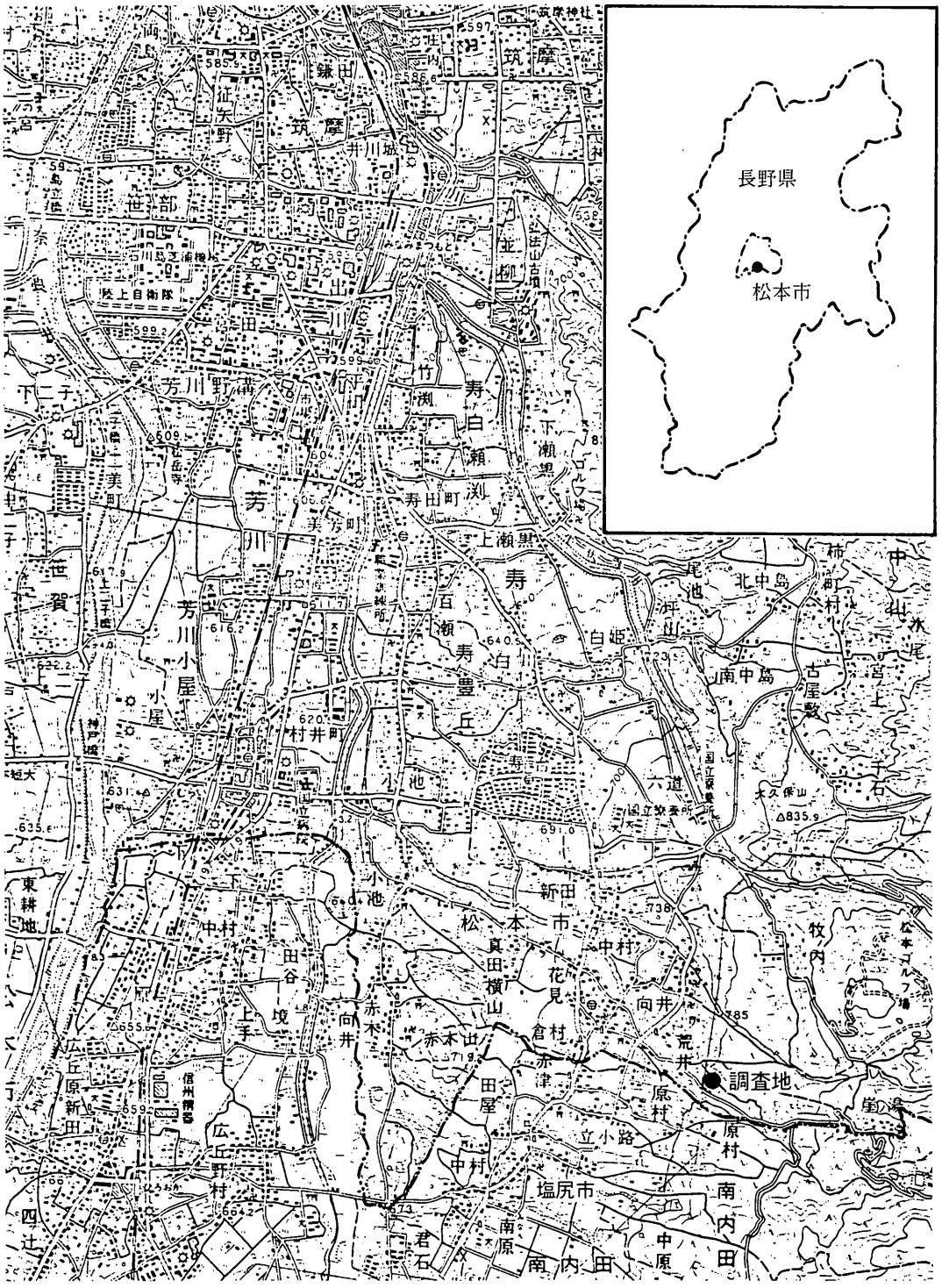
9月15日 (火) 晴　E地区列石たち切り、石の中に打製石斧が入っていたが、磁器片や罐・瓦片が出ているので最近つくられたものと判断する。

9月16日 (水) 晴　前日の作業の継続。

9月17日 (木) 晴　G地区セクションどり。CD地区小竪穴清掃、F地区写真とる。

9月18日 (金) 晴　発掘区域内写真とり、後片附け作業。

(事務局)



第1図　遺跡の位置（1：50000）

第2章　遺跡とその環境

第1節　遺跡付近の自然環境

1　位置と地形

雨堀遺跡は鉢伏山地（鉢伏山・横峯・高ボッチ）の西山麓に発達した、塩沢川の扇状地の扇央（海抜810～820ｍ）に位置し、欠の湯へ上るバス道路に沿った河岸段丘面上にある。

鉢伏山地の西山麓（寿・北内田・南内田・熊井等）は小河川による複合扇状地がよく発達し、急傾斜をもって盆地中央に接している。牛伏川・塩沢川による扇状地は、これらの中では規模の大きなものであるが、いずれも小河流と複合の形式をもっている。

塩沢川は舟沢川と複合し、左岸は南内田のとうね沢に、右岸は舟沢川をもって牛伏川扇状地に接する、広範囲の扇状地を展開している。舟沢川・とうね沢は、かつて塩沢川と複合扇状地を形成した河流であるが、現在舟沢川は牛伏川扇状地、とうね沢は小場沢川を主とする扇状地との縫合線上の凹地を流れている。またこれらの扇状地面は起伏に富み、氾濫原の形成に働いた旧河床や、乱流の跡を残している。塩沢川の扇状地でも、左岸の南唐沢・北唐沢はもともとかれ沢であり、右岸の雨堀と呼ばれるかれ谷は、規模の大きな旧河床である。雨堀の北の斜面にも、舟沢川による浅い谷が二つある。

遺跡の面は、この雨堀と浸食を復活した塩沢川の谷とに、はさまれた河岸段丘面として存在している。この段丘面は、塩沢川との比高６ｍ、雨堀の谷との比高３ｍで、傾斜1000分の100（扇頂付近海抜850～750ｍ）、1000分の60（750～690ｍ）、北西の方向（N40°W）を示す相当急な斜面形である。塩沢川・雨堀の傾斜・方向もほぼ同様である。

また塩沢川は浸食を復活するにあたり、流れを北から南へ移動させたため、右岸に数段にわたる階段状地形をつくった。この階段状地形（河岸段丘）は谷の浸食が進むにつれ出来上がったもので、上流の高所にあるもの程古く、中下流の谷沿いのものほど新しいといえる。なお特徴的なのは、流れを南へ移動するに当たり、旧河床の頭を切っていることが多く、雨堀などは明りょうな截（さい）頭河川である。

次に見落とせない地形面として、欠の湯の出口から海抜800ｍ付近の間、左右に明りょうな段丘状の地形が見られる。この稜（りょう）線は雨堀遺跡近くまで達していて、扇状地の地形面を深く刻み、谷地形をつくっている。一時河岸段丘と考えられたことがあったが、左右の稜（りょう）線が平行していて明りょうである、谷底が平坦なこと、この形成に働いたと考えられる営力の河流や堆（たい）積物がない、上流が不安な地層であることなどから、掃流による崖（がけ）と谷であろうとされている。谷の深さは、上流で６～８ｍ、下流で１ｍ程である。その形成の時期は、周辺

のローム層を切っていることや塩沢川の段丘地形に影響を与えていることなどから、新しいものと考えられる。土地の人は歴史時代の現象のようにいっている。(明治14年の山崩れと押出し)

2　遺跡周辺の地質

鉢伏山地西ろくの複合扇状地は、いずれも河床礫の堆(たい)積層に覆われているが、その下部については、露出が極めて少ないので、一部を除いてははっきりしない。現在、確認・推定等により考察できる堆(たい)積状況を、模式的に示すと第1表のようになる。

第1表　鉢伏山地西ろくのたい積層と地形面

たい積層	地形面
新扇状地れき層	新扇状地面
ローム層	ローム層面
山ろく旧扇状地れき層	山ろく旧扇状地面 (ロームに覆われている)
赤木層 (赤木山層)	大久保山、赤木山面
牛伏川高位段丘れき層	牛伏川高位段丘面
第三紀層 (守屋・内村累層)	ケイト山面 1,000～1,200m(海抜)面 高ボッチ面

第三紀層(守屋累層)

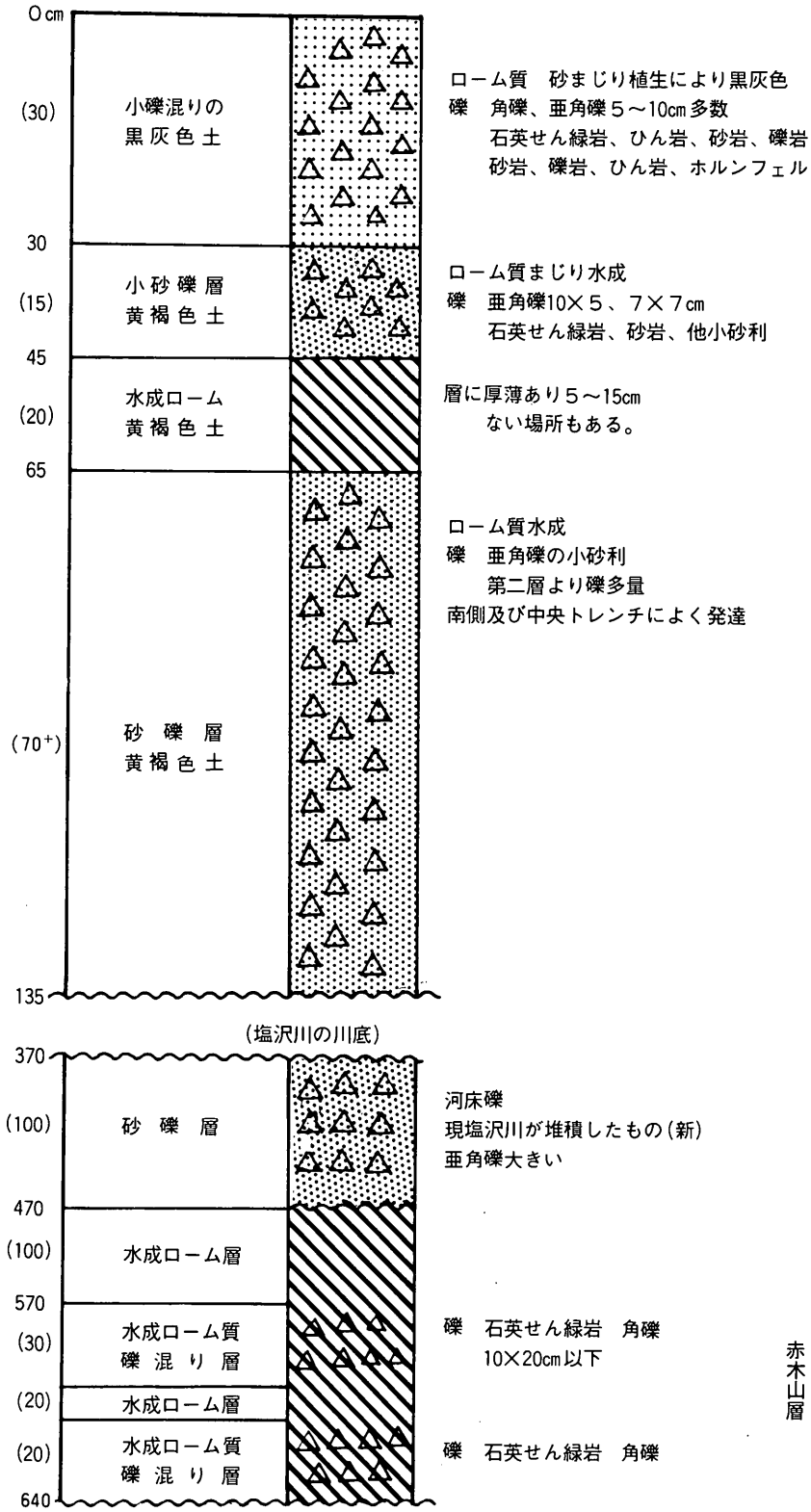
砂岩・れき岩・けつ岩(でい岩)・緑色凝灰岩(グリーンタフ)からなり、鉢伏山地の山頂部を取り巻いている。これに貫入または迸(へい)入したひん岩や石英閃(せん)緑岩が、1,500mから山脚までに及ぶ広い範囲に分布している。また石英閃(せん)緑岩の貫入に伴い、砂岩・れき岩が熱変質をうけ、砂岩・れき岩ホルンフェルスとなり、白っぽいもの、堅いもの、ち密なもの、黒褐色のもの等に変っている。ひん岩も同様にち密で堅い、ひん岩ホルンフェルスとなっているものがある。塩沢川はこれらのすべての岩石帯、舟沢川は流域が狭小なため石英閃(せん)緑岩帯を主として流下している。

牛伏川高位段丘面れき層

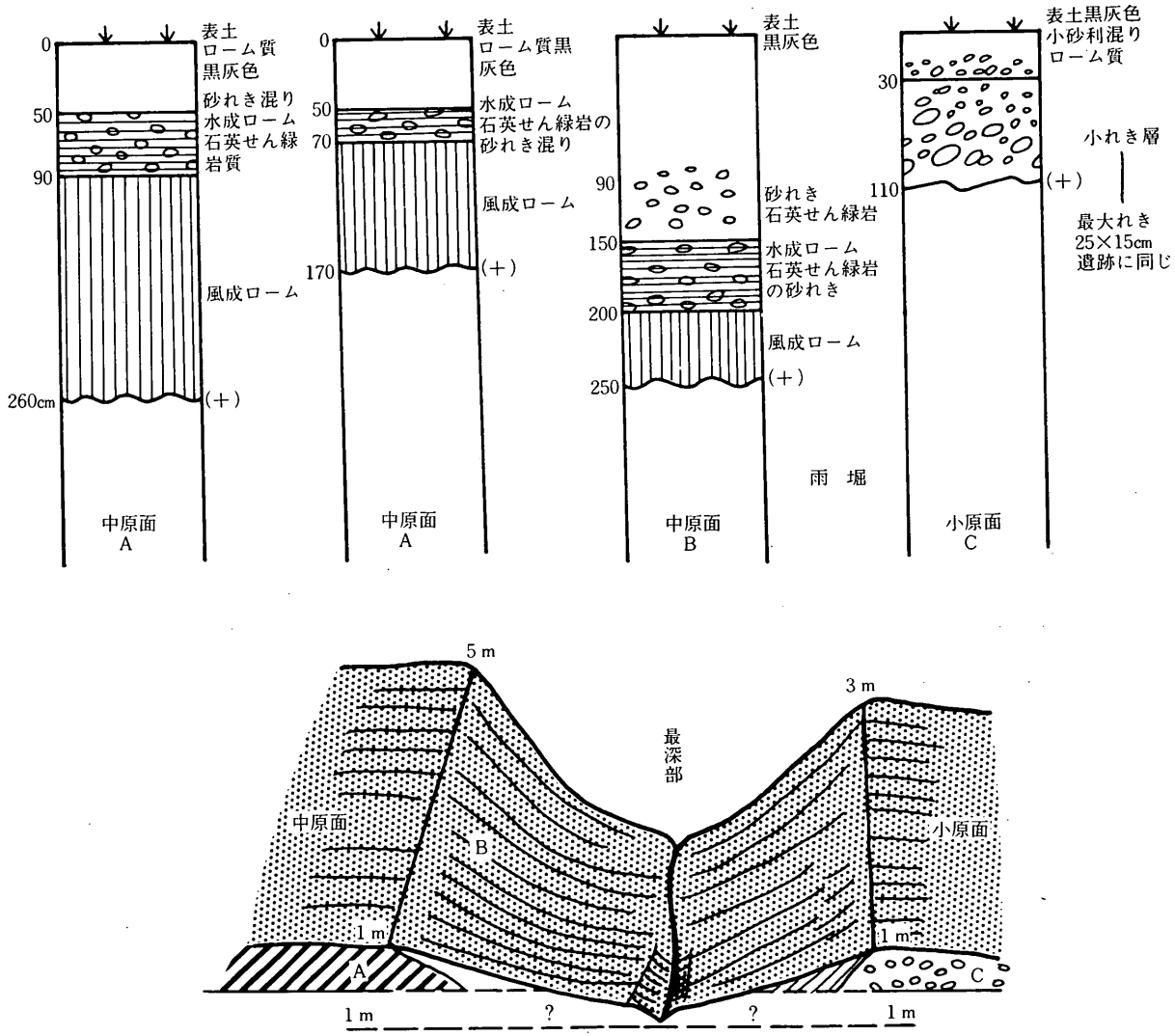
牛伏川左岸、右岸参道(900～1,000m)の高位にある段丘面で、角れきからなりロームに覆われている。恐らく現在の河川の浸食期に入る前に堆(たい)積された地層(盆地では埋没頂面)で、浸食の復活により高位段丘面となったものと考えられる。

赤木山層

赤木山の下部層に見られるもので、ローム質水成角れき層で、亜角れきを含んでいる。上部のローム層の間に浮石質を挟さむ水成ロームである。遺跡南の塩沢川の川底に露出する水成ローム


0cm
(30)
小礫混りの
黒灰色土
30
(15)
小砂礫層
黄褐色土
45
(20)
水成ローム
黄褐色土
65
(70+)
砂礫層
黄褐色土
135
ローム質　砂まじり植生により黒灰色
礫　角礫、亜角礫５～10cm多数
石英せん緑岩、ひん岩、砂岩、礫岩、緑色凝灰岩
砂岩、礫岩、ひん岩、ホルンフェルス
ローム質まじり水成
礫　亜角礫10×５、７×７cm
石英せん緑岩、砂岩、他小砂利
層に厚薄あり５～15cm
ない場所もある。
ローム質水成
礫　亜角礫の小砂利
第二層より礫多量
南側及び中央トレンチによく発達
(塩沢川の川底)
370
(100)
砂礫層
470
(100)
水成ローム層
570
(30)
水成ローム質
礫混り層
(20)
水成ローム層
(20)
水成ローム質
礫混り層
640
河床礫
現塩沢川が堆積したもの(新)
亜角礫大きい
礫　石英せん緑岩　角礫
10×20cm以下
礫　石英せん緑岩　角礫
赤木山層

第２図　遺跡の地層断面



第３図　雨堀両岸の地層断面

と角れき層は、地層の高度差から見て、これに当たるものと考えられる。(第2図)

山ろく旧扇状地れき層

現在の河流による堆(たい)積でない地層がローム層に覆われて分布している。山脚からその延長は海抜800m付近に及んでいる。ローム層の分布で追うと、小場沢川の両岸では720m付近に達する。

塩沢川の右岸では、ローム層に覆われた欠の湯の谷の両岸、雨堀左岸より舟沢川沿いに及ぶ。その延長は八幡社に達している。左岸でローム層に覆われている地域は山脚近くであるが、大宮八幡社のローム層などから考えて、やはり720m付近に達していると思われる。

このれき層は複合扇状地の原形を形成したもので、河流は上流に浸食面としての高位段丘面をつくるとともに、赤木山層を覆ったものである。従って現在の堆(たい)積物とは、ローム層を挟んで不整合に分布したり、あるいはローム層が浸食されたため、不整合に重っていることになる。

ローム層

いわゆる波田ロームと呼ばれる新期ロームである。山ろく旧扇状地れき層を広く覆っているものである。山脚近くに厚く(2m以上)、小場沢川の両岸では新扇状地れき層の間に、帯状に延び、大宮八幡社・八幡社では台地状に存在している。これは河流の浸食の復活により、段丘状、あるいは台地上に残されたか、新扇状地れき層が埋め尽されなかったかであろう。

塩沢川扇状地のローム層は前に述べたとおりであるが、特に遺跡のある右岸の地形形成にとって、大事な鍵層である。

新扇状地れき層

新期ローム降下後、浸食期に入った各河流は、上流部のローム層や旧扇状地れき層を浸食し、谷や堆(たい)積面をつくった。浸食が進むにつれて、両岸に次つぎに河岸段丘を形成した。表面にローム層をもたない河床れき層、ローム混りの砂れき層がこの堆(たい)積物である。

塩沢川右岸では、遺跡ののった河岸段丘面と現河床、下流の800m以下田川沿いまでの地域が新河床れき層である。

3　遺跡の岩石と地層

1)　トレンチ内の岩石

ほとんどが角れきか亜角礫であって、いずれも上流の山地の地層から運ばれたものである。

石英閃(せん)緑岩：最も数が多く、トレンチ内の岩石の3分の2以上を占めている。大きいものは、径65×38cm、45×35cmもある。小れきは風化しやすく、くずれて石英粒を主とする砂になっている。斜長石・角閃(せん)石・石英を主成分とする粗粒石英閃(せん)緑岩質である。黒雲母(も)をわずかに含む。黒雲母(も)・カリ長石が増大すると、花こう閃(せん)緑岩になる。岩石中に黄鉄鉱・黄銅鉱・モリブデンを含むので、岩石が分解されると砂の中で光って見える。

ひん岩・ひん岩ホルンフェルス：大小の角れき・亜角れきとして散在している。径65×45cm

のものから小片に至るまで堅硬な岩石である。斑(はん)晶として斜長石・輝石・角閃(せん)石が認められる。石基のち密な半深成岩である。この岩石のホルンフェルスは、黒味がかった青色をし、極めて硬いものである。トレンチ内にも、径60cm前後の金属音を出す石が見られる。欠いて石斧などに利用される。

れき岩：炉石に利用されているものもあり、焼かれている。径70×72cmの大きさのものもあるが、トレンチ内のじゃり層として存在する。長石や石英の目立つ花こう質れき岩、古生層起源のチャート・石英・硬砂岩・花こう岩の円れきを含む、れき岩が見られる。ホルンフェルス化されたれき岩は、ち密なもの、堅いもの、あるいは黒褐色、白っぽい色等に変化している。

砂岩：粗粒砂岩が多く、石英・長石が多い。トレンチ内ではれき岩と同じ径のものから、小れきまで存在する。やはり炉石に利用されている。粘板岩の破片や結晶片岩・緑色凝灰岩の亜円礫を含むものもある。ホルンフェルス化されて、ち密で堅い岩石になったり、黒褐色、白っぽい色等に変化している。石斧の材料になっている。

緑色凝灰岩(グリーンタフ)：全体が緑色をし、緑泥(でい)化作用を受けている。トレンチ内ではわずかに見られる。

以上の岩石はいずれも塩沢川・舟沢川の上流にあるもので河流によって運搬されたものである。

2) 遺跡の地層

遺跡の住居址は前に述べたように、1,000分の100の傾斜をもつ塩沢川の河岸段丘面を掘り下げたものである。従って東の部分の住居址と、西の部分の住居址の高度差は、見かけ上であって、地形面及び地層からは同じ深さにあるといえる。第2図は住居址の地層を模式的に示したものである。

これによると、明らかに全体が河床れき層で、堆(たい)積に働いた河流は現河床よりも緩やかであったと考えられる。このことは300m下った、海抜790m地点の雨堀構造改善事業の土層の、切り取り場の露頭からも考察できる。また各層ともローム質混りであることから、堆(たい)積時は浸食の復活の初頭で、上流のローム層をけずって運んだものか、あるいはロームの降下中の出来事かいずれかである。大れき(径50cm)は層内にも点在するので、河流によって運ばれた可能性もあるが、炉などに利用しているものは、他の場所(当時の河流など)から運び込まれたものであろう。北東隅のトレンチに並べられたようにある大れき(石英せん緑岩が多数)も、やはり運び込まれたと見るのが適当であろう。住居址はこうした状況のもとに、1～1.5m程度の深さに掘り下げてつくられた。

4 地形の形成

1) 地形面の対比

塩沢川・舟沢川の複合扇状地は、浸食の復活により開析され、多くの地形面をつくっている。特に塩沢川の右岸では、谷が側方浸食を受け、下流へ向って階段状に開析されている。遺跡付近

でも既に谷底が深く、遺跡の面、バス道路の面など段丘面が形成されている。舟沢川では、ゴルフ場下の左岸に段丘地形を残している。海抜800～850m間は5mに近い浸食谷となるが、その下流は塩沢川と同様、階段状に開析され段丘面を形成している。

これらの中流域の地形面を整理してみると、第2表のような対比が考えられる。もちろん現在、

第2表　塩沢川・舟沢川複合扇状地(上流)地形面の対比〔比高は現河床より〕

	塩沢川			舟沢川		
時階	左岸	比高	右岸	左岸	比高	ローム有無
1	海抜850～950m面（山ろく面）	10m	850～950m面（山ろく面）	850～950m面（山ろく面）	8m	有
2	海抜800～850m面（大口面）	8	800～850m面（中原面）	800～850m面（中原面）	8	有
3	大口下面	6	小原面	舟沢川沿い面	5	無
4	原村面	4～5	荒井面（バス道路面）	荒井面（荒井原）	2	無
5	現河床上面	1	現河床上面	現河床上面	1	無

ロームを除いては、その地質年代がはっきりしないので、勢い段丘を利用することになる。新期ローム の堆(たい)積状態からこの地形の堆(たい)積層や地形面は洪積世末期以後の形成と考えられる。その形成は時階1から5の順序で進んだものといえよう。

これに働いた営力は河流だけでなく、浸食の復活を起すために、当然地質上の構造運動も考えなければならない。しかし地層の露頭が乏しいため、断層崖・かれ谷・先行流路・地形異常等の地形上の特徴より判断するしかないが、フォッサ・マグナの糸魚川静岡構造線上にある地域であるから、構造運動があって当然である。

現在、中山・大久保山の地形上から、中山～欠の湯断層が指摘され(降旗和夫氏資料)、また赤木山の東側に地形異常が報告されている。(東筑摩郡・松本市誌第1巻自然篇地形・地質) いずれも地質年代を洪積世中期以後としている。

2) 遺跡周辺の地形面

さて遺跡と関係をもつ地形面は、小原面(遺跡のある面)・荒井面(バス道路の面)・中原面(800～850m)と雨堀の谷であり、河流は塩沢川と舟沢川であるが、地形面の形成を述べる前に、各地形面の状態を説明しておく。

中原面:山ろく面に当たる海抜850～900m面に続く、破壊されない厚いローム層をもつ地形面(800～850m面)で八幡社付近に及ぶ。塩沢川の右岸、舟沢川の左岸に当たるが、現在見るところでは舟沢川の影響が大きい。地形面上には、雨堀の下流と交差する二つの浅い谷が見られるが、ローム層に覆われているので、初生はローム堆(たい)積前の谷であろう。また地表面や層内 (風成ローム層上) に、石英閃(せん)緑岩の崩壊した砂や小れきが見られる部分があるが、これはローム堆(たい)積後の舟沢川の緩やかな影響であろう。雨堀遺跡の北の中原面の遺跡の地質は、この

石英閃(せん)緑岩の崩壊物である。

小原面：遺跡ののる面で、中原面との比高は2ｍ程低い。遺跡のトレンチの断面(第2図)や、第3図に見るように、ローム混りの砂礫層である。雨堀の側が高く荒井面へ傾斜している。また末端は、雨堀によって運ばれた堆(たい)積物につながる。ローム層に覆われたか不明である。

荒井面：バス道路の面で、小原面より1ｍ程低い。上流で欠の湯の掃流地形に連続し、小原面や雨堀を截(さい)頭している。下流では荒井地籍一帯へ合成扇状地状に広がっている。

雨堀：土地の人はこの谷を雨堀川と呼び、古い川の跡だといっている。しかし水源・水量については確かでない。現存する堀(旧河床)は、全長700ｍ、幅30ｍ程度、深さ(比高)は中原面より5ｍ、小原面より3ｍ、下流で1ｍである。現在の流路は上流部では既に耕地化し、最凹所とし認められるに過ぎない。中流部では幅50cm以下、深さ50cm前後である。下流部になると幅50～100cm、深さ50～70cmで左右に段丘面をつくっている。最下流部(海抜770ｍの線)は既に構造改善事業で埋められているが、中流部位の河流跡だったという。

川と呼んだが、特に流水を見ていないという。しかし中－下流部に「川よし」が群生している、湿地性の跡がある、小段丘をもつなどから雨水が流れたり、場所によっては滞留したと考えられる。

現在、中央を貫く流路の左は中原面のローム層の崩れ、右は小原面の表土の崩れによって覆われ、斜面形をつくっている。従ってまだ雨堀の地層の露出は発見できないし、中原面(層)と小原面(層)の接点も不明である。ただ最近構造改善事業により、海抜790ｍ付近の中原面－雨堀－小原面を切ったので、雨堀の両側の面の地層がわかって来た。(第3図)しかし両面の地層の接点や雨堀の川底の状態は依然不明である。

3) 地形面の形成

前に述べたように、資料が不十分のため推定の域を出ないが、以上の観察や考察により、地形面の形成と対比とを概観したい。

遺跡周辺の地形面形成地質年代は、中原面・大口面のローム層によって、洪積世末期以後と考えた。塩沢川は浸食の復活に当り、この二地形面の間を開析し、多くの地形面をつくった。従って遺跡周辺では中原面・大口面は、最も古い地形面で、以下小原面・荒井面・雨堀との相互関係を見れば、地形面形成の過程を知ることが出来る。また雨堀が先行河性の旧河床であることは、観察の上からも十分認められる。

しかし雨堀の地質資料が十分でないため、すべて仮定から出発せざるを得ない。

① 雨堀がローム層堆(たい)積前に形成され、上流を截(さい)頭されたとすれば、中原面・小原面は旧河床の両岸となり、ロームの堆(たい)積を受けた。従って雨堀の地層にもこのローム層があることになる。この場合、雨堀の地層や小原面の砂れき層の下に、ローム層が存在するか、また高度差のある小原面の砂れき層との関係を、どう考えるかの問題が残る。

② 雨堀が当時截(さい)頭されなかったとすれば河流の規模に関係をもつが、雨堀の地層はロー

ム混りの砂礫層と部分的なロームの堆(たい)積をみるはずである。この場合も、高度差のある小原面の砂れき層との関係を、どうみるかの問題が残る。

③ 雨堀がロームの降下中、塩沢川の乱流の影響により、小原面とともに形成された後、成長して、本流ともいえる下方浸食を受けた。やがて頭部浸食が上流部に及ばないうちに、截(さい)頭されかれ谷(旧河床)となり、河流は南へ移動した。従って中原面は塩沢川の最右岸となり、小原面との関係が説明出来る。また荒井原の堆(たい)積物がローム混りの砂礫であることは、浸食による堆(たい)積物が下流のここに広げられ、合成扇状地状の地形となったと考察される。しかし、雨堀の地層がローム混りの砂れきであることを前提とする。この場合部分的にローム層の存在の可能性が出てくる。

④ 雨堀がローム堆(たい)積後に形成されたとすれば、3と同様の経過をたどることになるが、時代が沖積世初頭に入る。考古学上では、雨堀内の遺跡・遺物の存在が意味をもって来る。いずれにしても、雨堀が旧河床で、中原面－小原面－雨堀の過程をもって、形成されて来たことには相違ない。ただ年代決定において、今後の資料に待つことが大きい。

5 まとめ

以上を総括すると、次のようにまとめることができよう。

1 雨堀遺跡は塩沢川・舟沢川の複合扇状地の扇央(海抜810～820m)に位置し、小原面と呼ぶ開析によって出来た河岸段丘上にある。

2 扇状地層は斜面の原形をつくった山ろく旧扇状地れき層と、これを覆うローム層、更に浸食の復活に伴い堆(たい)積した新扇状地れき層からなっている。

3 扇状地は合成扇状地状に開析され、下流では階段状の地形面となる。開析された地形面は、高度・段丘崖(がい)・段丘の比高・ロームの有無等により、5つの時階(第2表)に別けられる。

4 地層の露頭が乏しいため、ローム層(新期ローム)は対比、年代決定に、現在ただ一つの鍵(かぎ)層である。

5 遺跡に関係をもつ地形面は、現河床(塩沢川)・小原面(ローム混りの砂れき層)・雨堀(かれ谷)・中原面(厚いローム層をもつ)であり、その地形形成は、最も破壊の少ない中原面、砂れき層の小原面、かれ谷の雨堀の順である。形成の時期は、洪積世末期のロームの堆(たい)積中の出来事とするのが現在の知識である。

6 遺跡のトレンチ内の岩石は、角れきか亜角れきで、石英閃(せん)緑岩・ひん岩・ひん岩ホルンフェルスなどの火成岩と、第三紀層の砂岩・れき岩・砂岩やれき岩のホルンフェルス・緑色凝灰岩である。いずれも東の山地から運ばれたものである。

7 その量は石英閃(せん)緑岩が最も多く、次いでひん岩・れき岩・砂岩である。径は70×72cm・65×38cmの大きさから小れきに及ぶ。大れきば現河床のものとほとんど同じで、トレンチ内の地層から見て、外から運び込まれた可能性が強い。炉石には砂岩が利用されている。

8　遺跡の地層は、上記の岩石の角れき、亜角れきの小れきを含む砂れき層で、ローム混りである。水成ロームの薄い層を挟む。

9　遺跡の斜面は1,000分の100の急傾斜(西北方向N40°W) であるから、東部分のトレンチも西部分のトレンチも、地表面からの深さは同じであり、地層は連続すると考える。

10　中原面・小原面・雨堀は、縄文期には既に河流から離れ、遺跡としての可能性をもつ。

11　雨堀は、導水路の発見がない限りかれ谷で、現在の状況から雨水による流れ、滞留はあったと考えられる。

(太田守夫)

第2節　周辺遺跡

雨堀遺跡は松本市の東南端にあるため周辺遺跡としては隣接の塩尻市に所在するものが多い。

塩尻峠より高ボッチ、鉢伏山の西麓には西流する小河川にはさまれた段丘があり、それらには縄文期を中心とした遺跡が存在する。(第4図)

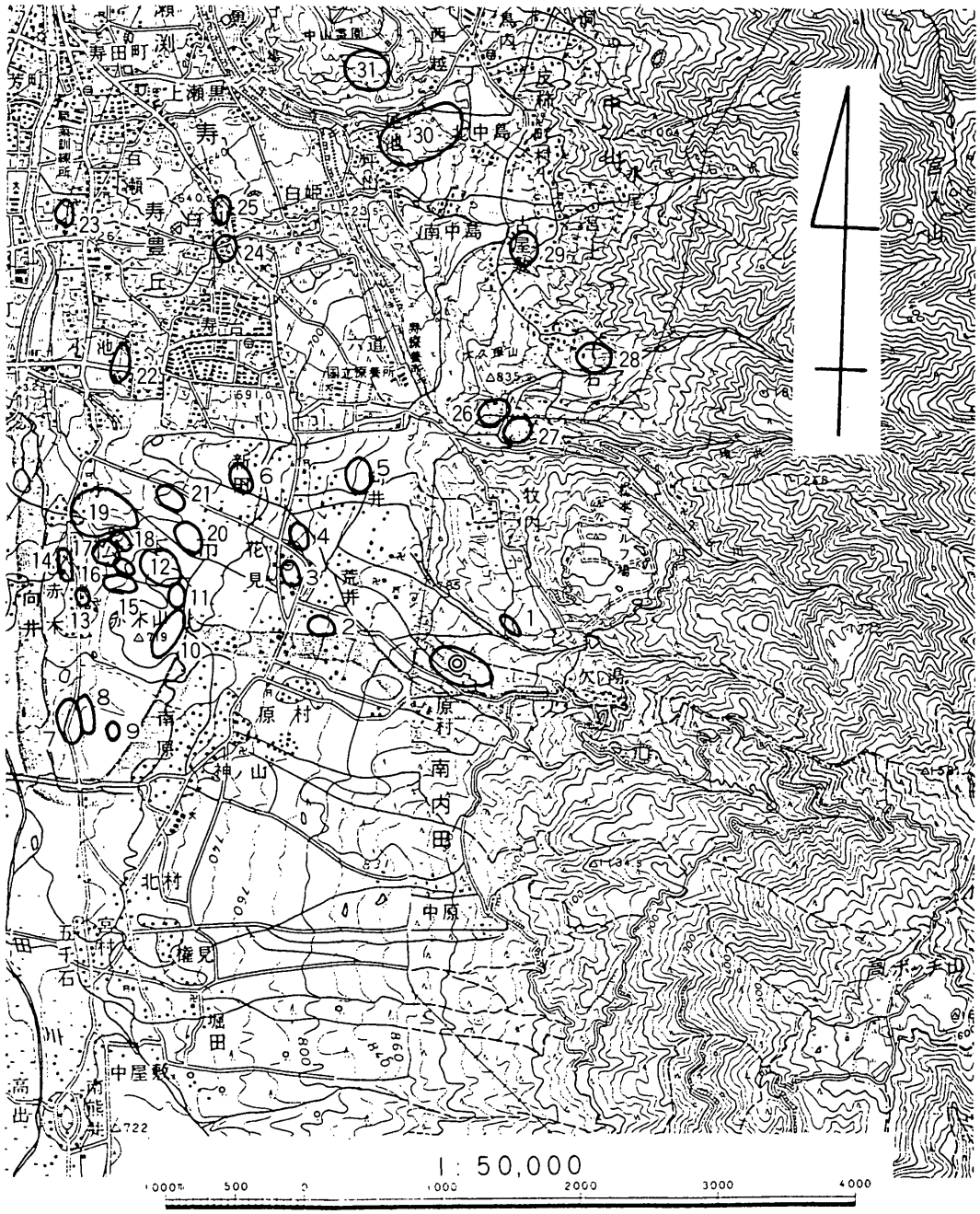
先土器時代は本遺跡より西方3kmあまりの寿・赤木山で有舌尖頭器が発見されており、その僅か西南の田川左岸台地の塩尻市広丘高出遺跡では尖頭器、ナイフ形石器、掻器、石刃、敲石、彫刻器・礫器等が発掘調査により出土している。

縄文時代早期では本遺跡より一つ北の舟沢川右岸に内田五斗林遺跡があり、押型文土器、局部磨製敲石、どんぐりなどが出土している。[(1)] 平地に下って内田運動場近くの釈迦堂遺跡でも楕円押型文土器が発見されている。

縄文前期では隣接の塩尻市内の山麓に多数の遺跡があり鼻屋敷、中原、俎原、竹ノ花、小丸山、八幡原、大林、富士塚、境沢遺跡などがあげられる。特に鼻屋敷遺跡では二度にわたる発掘調査で前期前半の神ノ木式の頃より末葉の下島式の時期まで継続して生活が営まれており有尾式の土器片も大量に出土している。

中期では中原遺跡、小丸山遺跡他があり、中原遺跡では中期中半から後半の住居址4軒を、小丸山遺跡からも同様時期の住居址7軒、土師期の住居址1軒を検出している。松本市内では内田地区で本址より1～1.5km西下した現在の集落内には、宮ノ下、長泉寺、くねの内等の遺跡があり、特にくねの内遺跡範囲内の内田保育園敷地では工事の際に縄文中期土器片と共に焼土を検出したというが、縄文期の炉址ではないかと思われる。集落の西側水田を隔てて直線距離で2.5km西方に独立丘陵の赤木山があり、ここには木下、前田、原度前など中期中半を主とする遺跡が連なっており、土器・石器類が多量に出土している。本遺跡北東3kmの中山南中島でも発掘調査によって中期後葉の埋甕をともなう住居址の検出をみている。

後・晩期になると遺跡は少なく、晩期では石冠を単独出土した原度前、その西方300mあまりの石行、塩沢川右岸のエリ穴遺跡程度である。原度前遺跡は前記のように縄文中期が主体であるが石行遺跡は夥しい量の晩期後半に属する土器片を出土しており、エリ穴遺跡は三次にわたる発掘



◎、雨堀遺跡
1、五斗林遺跡
2、宮ノ下遺跡
3、長泉寺遺跡
4、くねの内遺跡
5、釈迦堂遺跡
6、エリ穴遺跡
7、前田遺跡
8、木下遺跡
9、白神場遺跡
10、野石遺跡
11、赤木山遺跡
12、原度前遺跡
13、赤木遺跡
14、小赤遺跡
15、清水林遺跡
16、三経塚遺跡
17、石行遺跡
18、北洞遺跡
19、北原遺跡
20、横山城遺跡
21、松山遺跡
22、小池遺跡
23、百瀬遺跡
24、野口遺跡
25、白川遺跡
26、大久保遺跡
27、棚峯遺跡
28、千石牧遺跡
29、埴原牧遺跡
30、坪ノ内、向畑古墳群
31、鍬形ケ原古墳群

第4図　周辺遺跡図

調査によって晩期前半に属すると思われる竪穴住居址1軒と、多数の晩期前半に属する縄文土器、石鏃、土偶、耳輪などが検出されている。

弥生時代では原度前遺跡の谷一つ北側に横山城遺跡があり中期前半の土器片を出土している。他に高出第5地点では後期弥生土器を伴う竪穴住居址1軒が発見され、本遺跡より北西に直線距離4kmに中期後半に属する住居址と土器を検出した百瀬遺跡がある。

古墳時代に入ると、中山地区では後期の横穴式古墳が多数あるが、寿、内田地区では寿百瀬遺跡の僅か東に百瀬耳塚古墳がある。

奈良・平安時代に入ると、本遺跡の東方1kmほど登った崖ノ湯(標高約970m)で土師器片が出ており、赤木山でも東側の水田に接する山麓から南北1kmあまりにわたって土師器、須恵器片が採集されている。　　(神澤昌二郎)

(1) 藤沢宗平 「日本考古学年報」 12 1956 P86 この他 「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌」 第二巻を参照した。

第3章　調査結果

第1節　調査の概要

1　概　要

調査地は松本市大字内田3232番地に位置している。これは、遺跡の名称にもなっている「あんぼり」と呼ばれている水の流れていない谷状地形の南側、海抜800～810ｍ附近にあたる。Ｃ地区からＧ地区まで5箇の地区を設定したが、Ｃ・Ｄ地区は等高線に沿う様に南北に長く、Ｅ・Ｆ・Ｇ地区は谷の斜面に並列する様に東西に長く連なっている。各地区の面積は、Ｃ地区754.4㎡、Ｄ地区330.6㎡、Ｅ地区802.8㎡、Ｆ地区343.2㎡、Ｇ地区324.0㎡で、計255.5㎡に及ぶ。地区名がＣから始まるのは、前年度第1次調査のＡ・Ｂ地区に続く様に配慮したためである。

発見された遺構には、小竪穴、集石、列石があり、さらに遺構と呼んでよいか疑問であるが、土器集中箇所、不明瞭な竪穴状の黒色土の落ち込みもみられた。小竪穴はＣ・Ｄ地区にのみ計50基発見され、規模・プランはおおむね径1.5ｍ以内の円形・楕円形を呈すが、2ｍ以上ある大きなものや不整な形をとるものもあった。これらの作られた時期は、内部より出土した遺物により、縄文中期初頭と平安時代後半に求められるものが数基ある他は不明である。集石（集石状遺構）はＣ地区の南西隅に1箇所、列石はＥ地区西隅に1箇所発見された。いずれも規模が小さく、列石は近現代の遺物を伴っていた。土器集中箇所はＥ地区東寄りに存在し径10ｍ位の範囲から黒色土にまじって縄文中期初頭の土器が、一括品や大破片で多量に出土したが、結局掘り込まれた遺構としては捉えられなかった。不明瞭な竪穴状の落ち込みはＥ地区西半にあり、検出時は竪穴住居址かとも思われたが、掘り下げるに従い壁や底面が不明瞭になって遺構として捉えるには疑問が残るものとなった。

出土した遺物には、土器・石器・土製品があり、これらのうち少数が小竪穴内より、他はＥ地区の土器集中箇所と各地区の検出面や包含層から出土した。土器は多量に出土したがそのほとんどが縄文中期初頭の時期に位置づけられるもので、他には縄文前期及び後期と平安時代の灰釉陶器がごく少量あるのみである。石器も多量に出土したが遺構に伴うものはほとんどない。種類として石鏃・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・横刃型石器・凹石・磨石・石皿等がある。土製品には土偶・土製円板その他があり、やはりすべて遺構外からの出土である。

今回の調査は以上の様に住居址等の発見がなくＣ・Ｄ地区において小竪穴ばかりが検出されたわけだが、第一次調査における複雑に切り合って検出された縄文中期の住居址群と鮮明な対比をみせている。遺構面での貧弱さに反して遺物は多量に出土し、該期の集落に隣接する地点であることは充分に考えられ、山腹傾斜地の縄文時代遺跡における遺構の地点的集中と分散、集落の占

地等に著しい偏差があることを窺わせる調査結果となった。

2　各地区の概要と土層

C地区　（第6・7図）　C地区は今回設定した各地区のうち最も南に位置し、また「あんぼり」と呼ばれる谷状部分からも最も遠い。本地区からは小竪穴が26基、集石状遺構が1箇所検出されている。小竪穴の分布は本地区内ではその東半を中心にしており、東方の調査地域外へ続いていくものとみられる。内部より遺物の出土した小竪穴はNo.2（石鏃：第33図2）、No.5（縄文土器片：第32図159、160）、No.9（磨製石斧：第41図189）、No.12（縄文土器片：第32図154）、No.13（灰釉陶器片：第32図162）、No.18（土師質土器片）、No.21（縄文土器片：第31図139～141）、No.26（縄文土器片）の9基である。No.10・24～25の4基は縦の配列関係がある様にみえたが、掘り下げを進めてもそれ以上の関連性はつかめなかった。集石状遺構は本地区の一部を南方へ拡張した部分の付け根の位置に発見された。直径1.2m位の範囲内に長径40～50cmの石が6箇、平らな面を上に向けるようにして配され、その間に20cm内外の石が数箇まとめられている。

本地区より出土した遺物は、前述の小竪穴中出土品の他は包含層中及び検出面からの少量の土器小破片、石器があるにすぎない。

本地区の土層は東、南、西壁で観察を行い、基本的には、遺物包含層は表土とそれに続く黒色系統の色調を呈す土層として、地山は2次堆積のロームに礫を多量に含んでいる明茶褐色土層として捉えられた。ただ包含層は南壁の様に黒色土の一層以上に分層が不可能な部分と、東西壁の如く黒色に2～3の段落をもって分層ができた部分とがあった。また、東壁のⅣ層と西壁のⅡ'層、東壁のⅥ層は部分的に砂質性が強く、河川に近い傾斜地の故か、かなり局地的な土質の違いをみせた。本地区の各小竪穴はすべて地山である礫混ロームの明茶褐色土層中に掘り込まれた形で検出されたが、それぞれの小竪穴の深さや、内部より出土した遺物等からみて、やや地山より上位の層中より掘り込まれていたものもいくつかあると考えている。

D地区　（第6・8・9図）　D地区はC地区の北に隣接して長さ約45m、巾約7mと南北に細長く、等高線に沿うように「あんぼり」の谷の落ち際まで及んでいる。本地区からは小竪穴のみ24基発見された（小竪穴No.27～50）。小竪穴は地区内にまんべんなく分布し特に偏りはみられない。内部より遺物を出土した小竪穴は、No.36（土器片：第32図152、153、158）、No.40（土器片：第32図151、155）、No.41（土器片：第32図150、157）、No.46（土器片：第32図149、161）、No.49（土器片：第32図156）の5基である。

本地区より出土した遺物には、小竪穴の内部より出土した土器以外に、遺構検出の際包含層や検出面より出土した少量の土器片、石器があるが、土器片は小破片のみで図示し得なかった。

土層序は、基本的には礫まじりの2次堆積と思われるロームの茶褐色土層が地山となり、その上部に黒色ないしは褐色系統を呈す土層の包含層をもって表土に至る状態である。しかし実際に細かくみると、包含層や表土近くの黒～褐色の土層は所々に黄色土がブロック状に入ったり、細

かく分層できる部分があったりして、C地区と同様局地的な土質の違いがかなりみられるといえよう。また本地区で発見された小竪穴もその当初の掘り込み面について、やはりC地区と同様のことが考えられる。

E地区（第10、11～13図）E地区は谷の南側傾斜面にあり、谷と並行する様に長さ約44m、幅約18mの東西に長い形となっている。このため地区内は高低差が著しく東端が西端より4.5mも高くなっている。本地区の東方即ち谷の奥側にはF地区が隣接し、谷の傾斜面を登りきってすぐの所にD地区の突端が迫っている。本地区内には遺構として列石が1箇所発見され、その他、明瞭な遺構として捉えられなかったが、土器集中箇所と竪穴状の黒色土の落ち込みが1箇所づつあった。列石は地区内の北西隅近くに幅約0.5m、長さ約2m、北東から南西へ走る形で検出され、さらにその先端には2m内外の範囲に同様な礫が散開していた。10～25cm位の角礫を集積して構成されており、上面や内部から縄文土器の破片や石皿片等が出土しその時期の遺構と思われたが、端部から罐詰の罐が出土して近現代のものであることが判明した。竪穴状の黒色土の落ち込みは西部中央にあり、検出時は住居址になるかもしれないと思われたが、掘り進めるに従って壁等が不明瞭になり、最終的に炉址、床面等も検出されず、単なる自然地形であろうという結論が下された。この黒色土の落ち込みに相対する本地区東部中央には、厚い黒色土の堆積中から土器が多量に出土する部分があり、一応土器集中箇所と呼称した。範囲は10m弱くらいのもので、縄文中期初頭の大形土器片や一括土器が土製品や石器類を含んで多量に出土し、その量は今回調査の出土遺物の過半にあたる程であった。しかし、ここも結局掘り込まれた遺構とはならなかった。

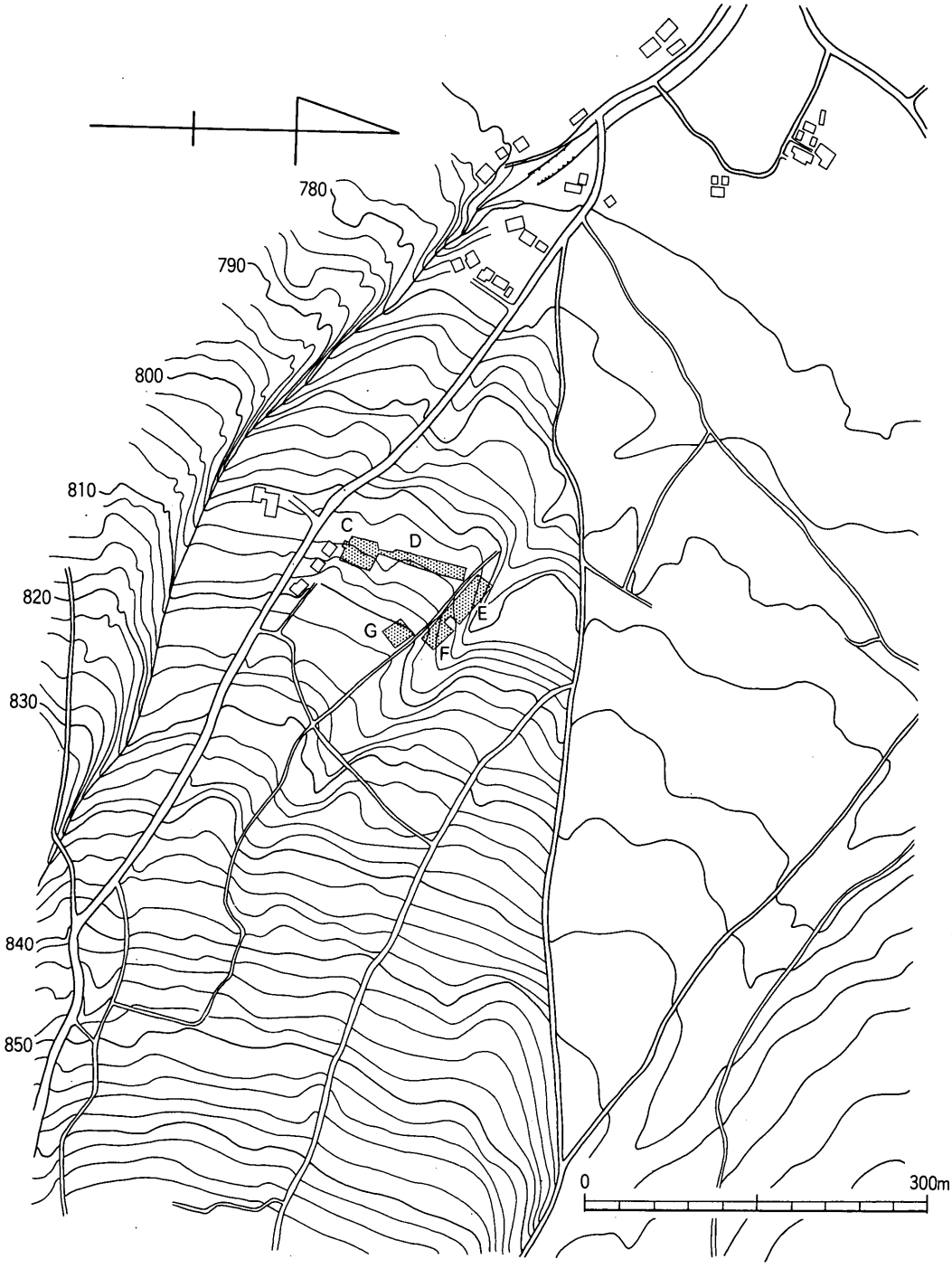
本地区の土層も、基本的には、地山としてのロームないし砂礫まじりの黄褐色土の上位に黒色、褐色系統の土層がのる形になる。しかし谷状地形の傾斜面のため、通常、より下層の砂礫を含む黄褐色土などが谷上からの流れ込み等により、ブロック状に黒色土や褐色土の間に入っている所が多い。また、東西方向の土層堆積即ち谷状地形の流れに沿った土層（南、北壁土層断面、東西ベルト土層）は水平方向にかなり整然とした堆積を示しているが、南北方向、即ち谷を横切る形での土層は複雑で、調査時、観察の際の分層にもかなり苦しみ、やや理解し難い状況となった部分もある。

F地区（第10、14、15図）E地区の東に隣接し、地形的にも全くE地区と同様の所にある。

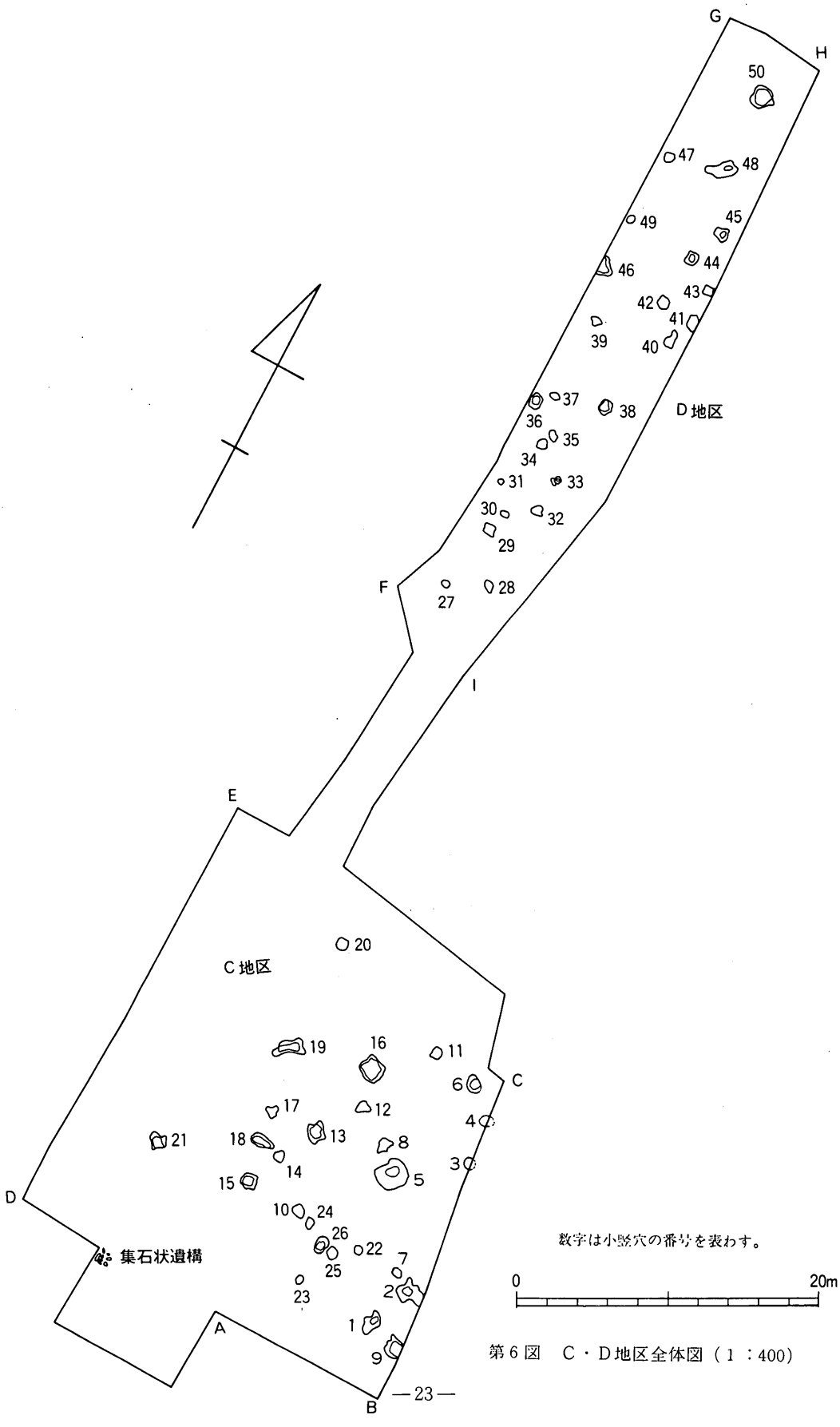
本地区からは多量の縄文土器片や石器類の出土があったが西端部に焼土があった他は遺構は全く見出せなかった。

堆積土層の傾向もE地区に酷似し、南、北壁に現れた東西方向の土層は傾斜を持ちつつも整った堆積をしているのに対して、東、西壁に現れた南北方向の土層は、特に東壁土層断面において複雑さを増している。

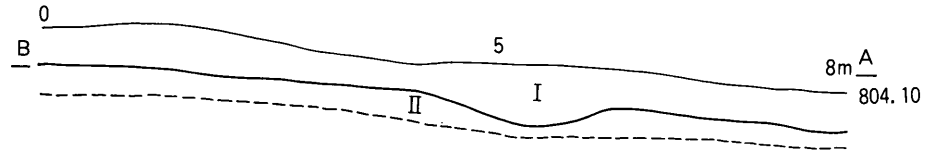
G地区　F地区の南東方向の谷の斜面を登り切ったすぐの所に一辺約18mのほぼ正方形になる様にG地区を設定した。本地区には全く遺構はなく、遺物も、掘り下げ時に地表に近い部分から採集された石器が2点あるのみで他は全く出土しなかった。（神澤昌二郎）



第5図　調査地区及び周辺地形図（1：6000）

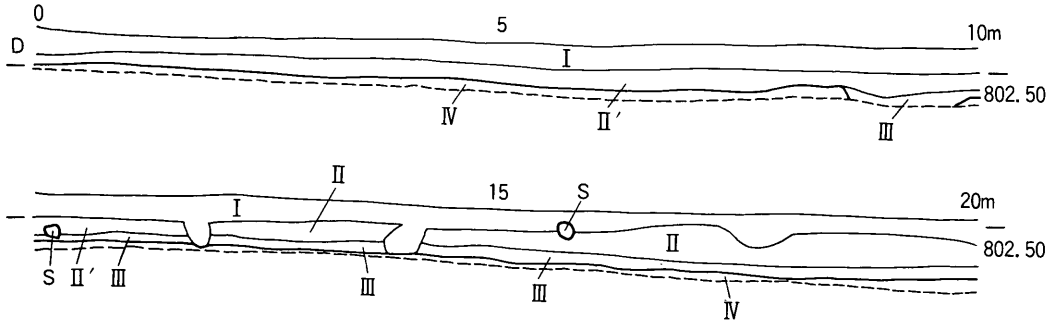


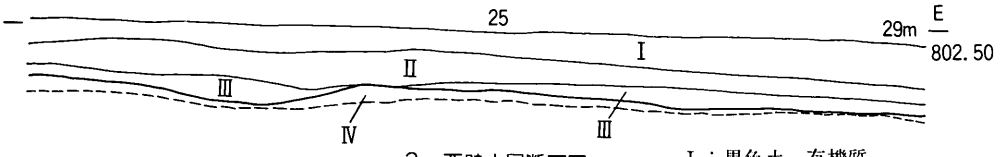
第6図　C・D地区全体図（1：400）



1、南壁土層断面図

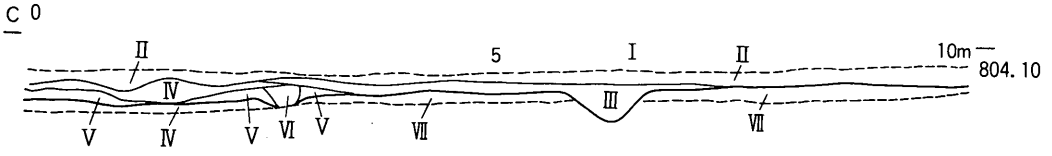
Ⅰ：黒色土　礫混黒色
Ⅱ：黄褐色土　礫混ローム

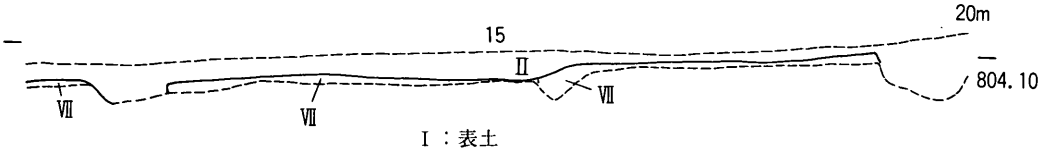


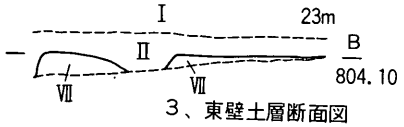


2、西壁土層断面図

Ⅰ：黒色土　有機質
Ⅱ：明褐色土　ローム混砂質
Ⅱ′：淡褐色土　砂質
Ⅲ：暗黒色土
Ⅳ：明茶褐色土　礫混ローム

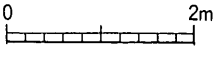




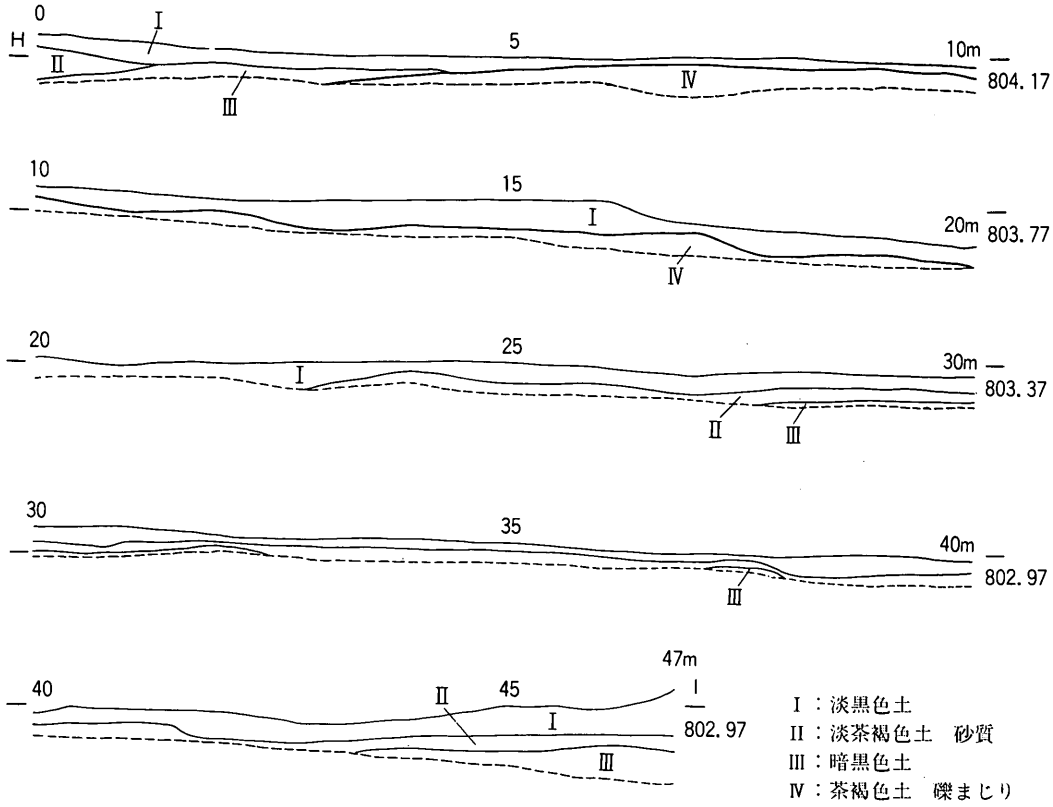


3、東壁土層断面図

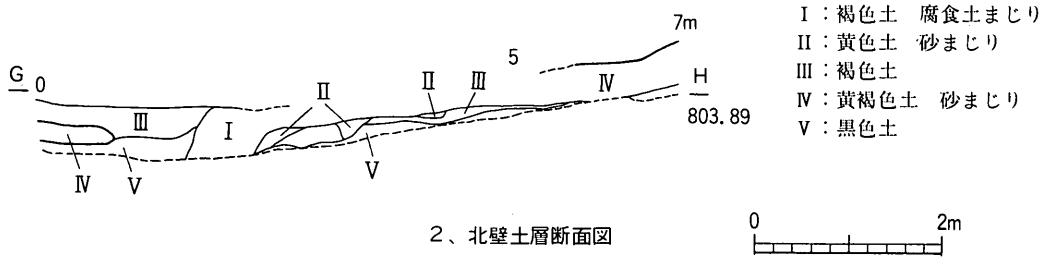
Ⅰ：表土
Ⅱ：黒色土　有機質
Ⅲ：明黒色土　炭化材混
Ⅳ：淡褐色土　砂質
Ⅴ：暗黒色土
Ⅵ：白褐色の砂質
Ⅶ：明茶褐色土　礫混ローム



第7図　C地区土層断面図

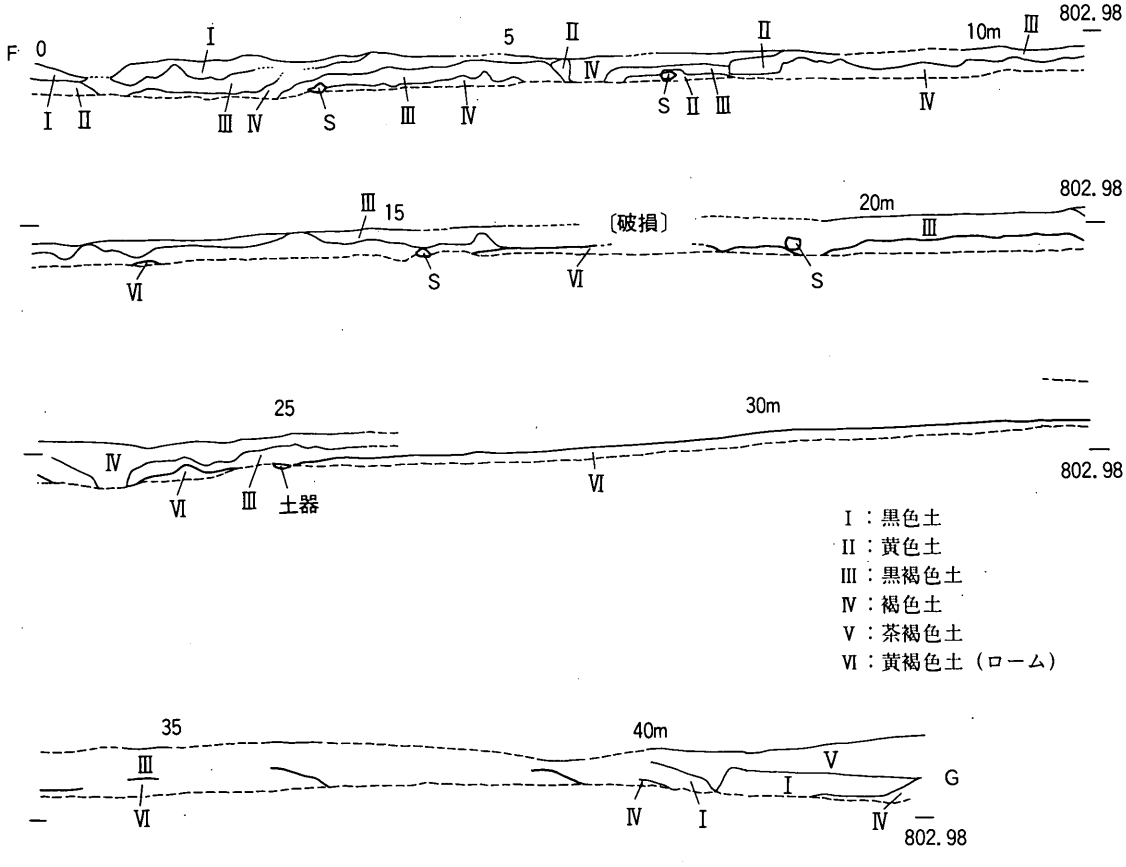


1、東壁土層断面図

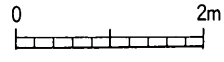


2、北壁土層断面図

第8図　D地区土層断面図(1)

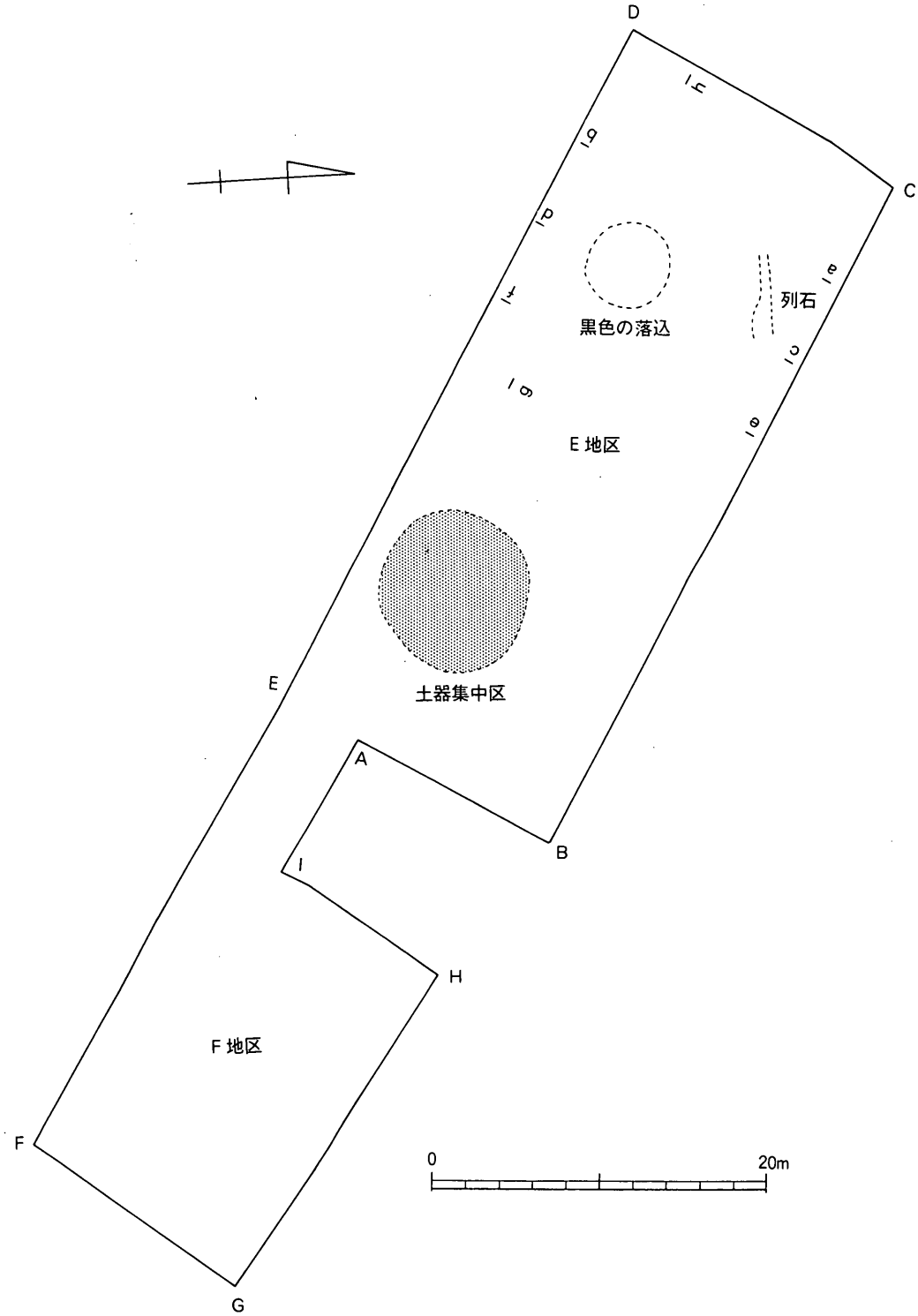


3、西壁土層断面図

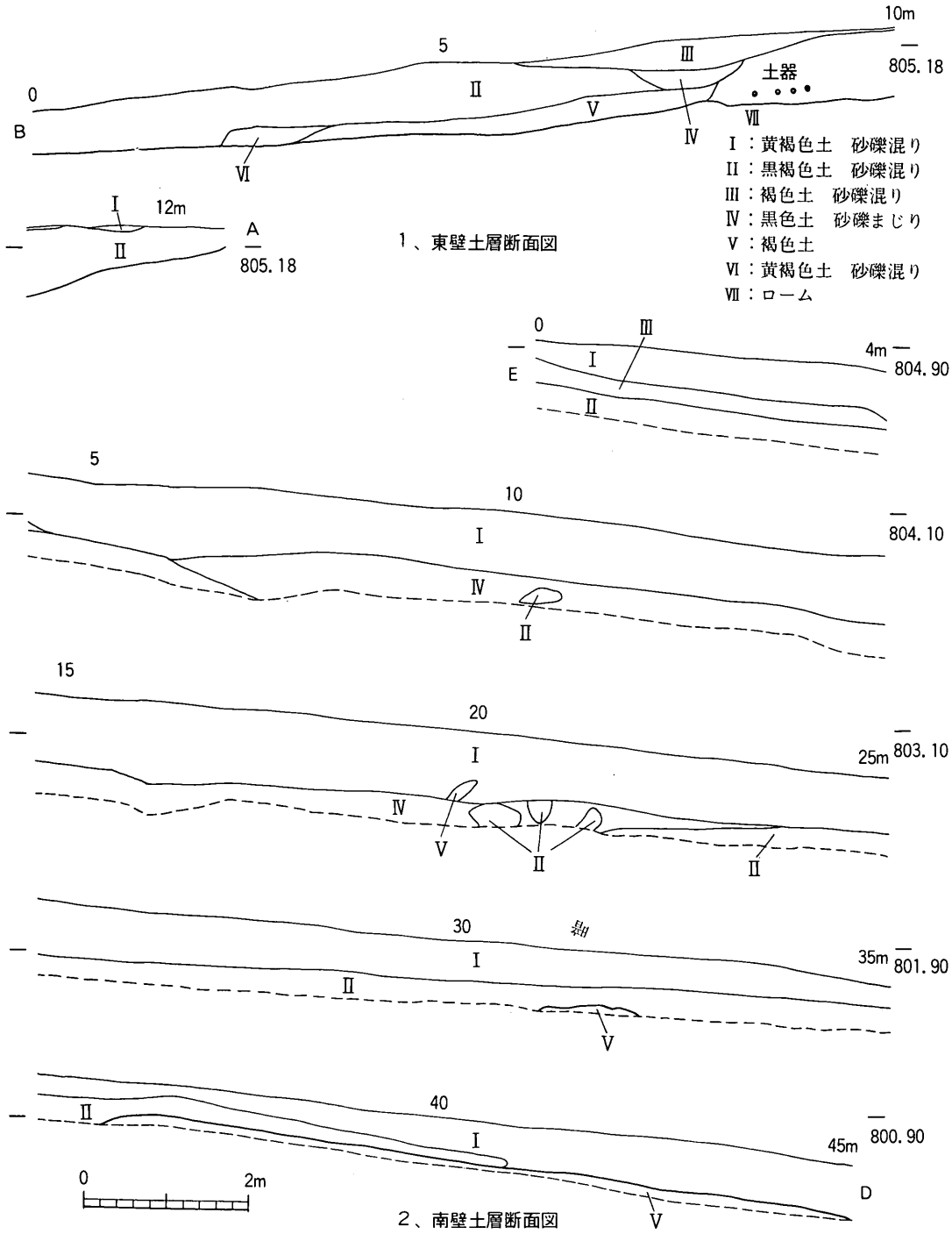


Ⅰ：黄褐色土　砂礫まじり
Ⅱ：黒褐色土　砂礫まじり
Ⅲ：褐色土　砂礫まじり
Ⅳ：黒色土　砂礫まじり
Ⅴ：褐色土
Ⅵ：黄褐色土　砂礫まじり
Ⅶ：ローム層

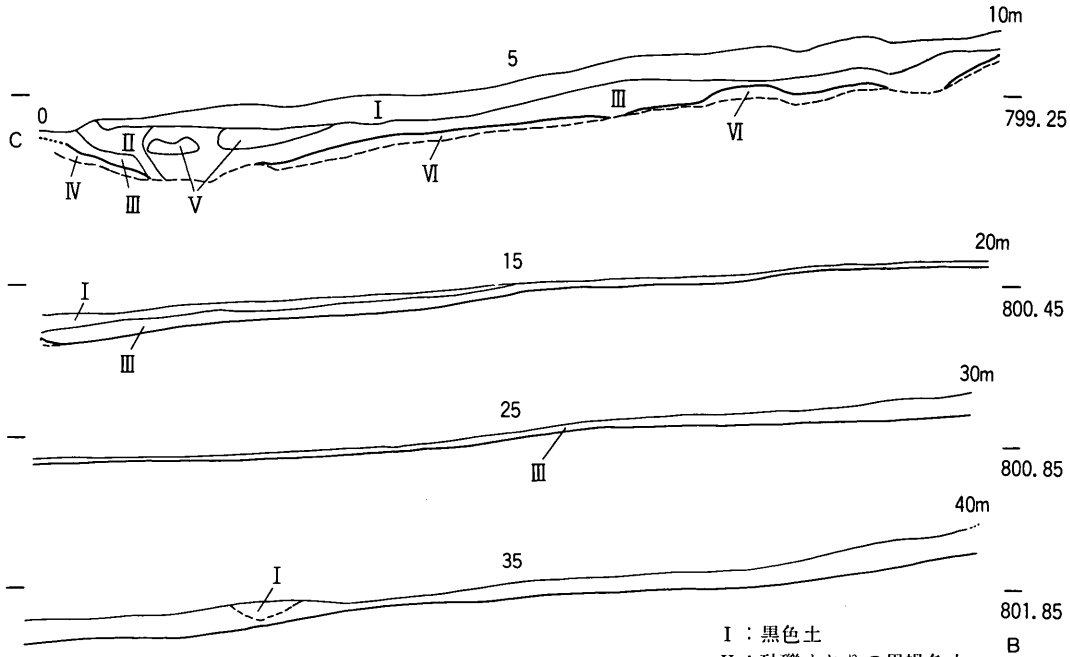
第9図　D地区土層断面図(2)



第10図　E・F地区全体図（1：400）

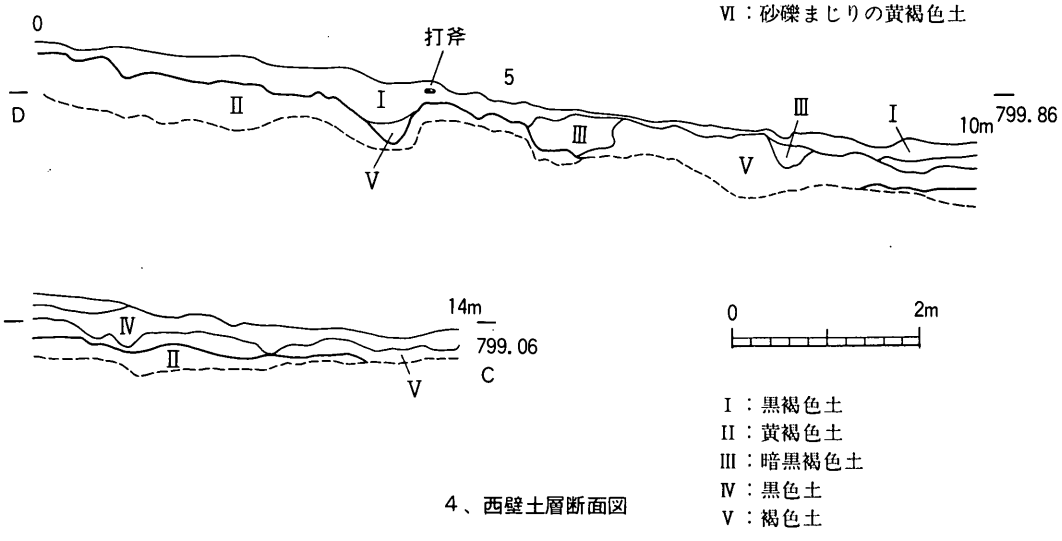


第11図　E 地区土層断面図(1)



3、北壁土層断面図

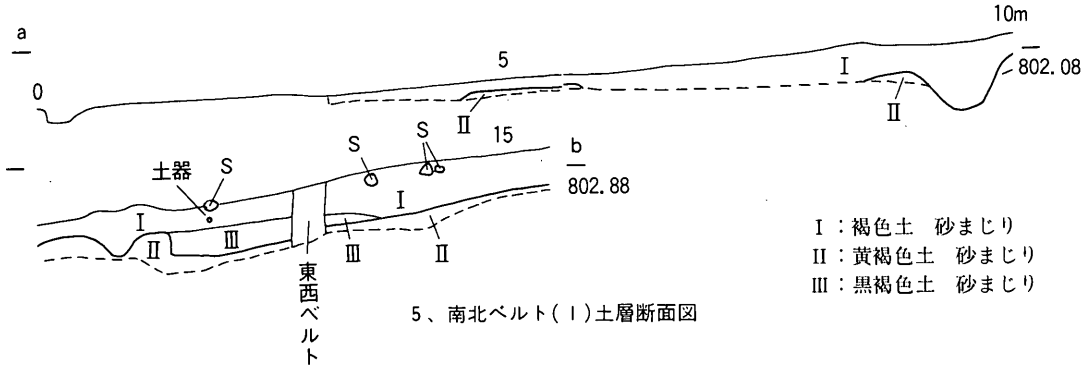
I ：黒色土
II ：砂礫まじりの黒褐色土
III ：砂礫まじりの褐色土
IV ：黒褐色土
V ：砂礫まじりの茶褐色土
VI ：砂礫まじりの黄褐色土



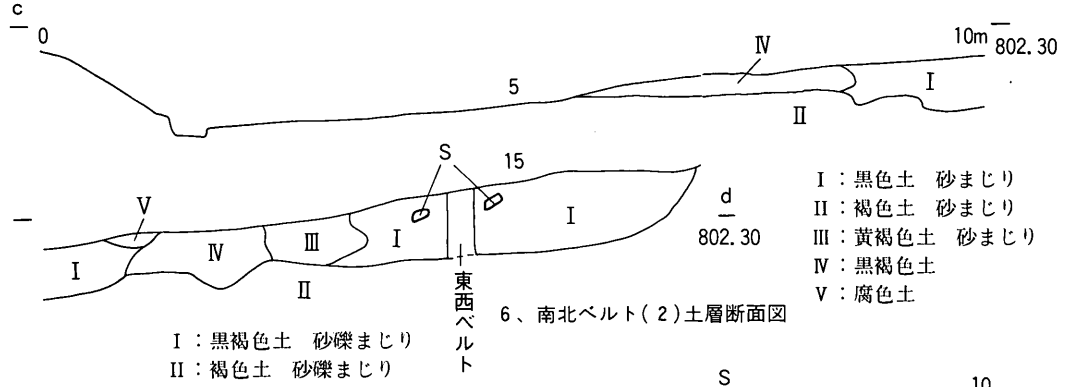
4、西壁土層断面図

I ：黒褐色土
II ：黄褐色土
III ：暗黒褐色土
IV ：黒色土
V ：褐色土

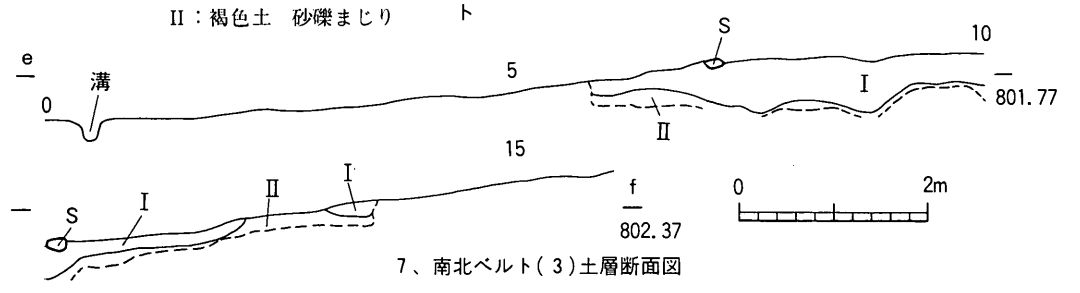
第12図　E 地区土層断面図(2)



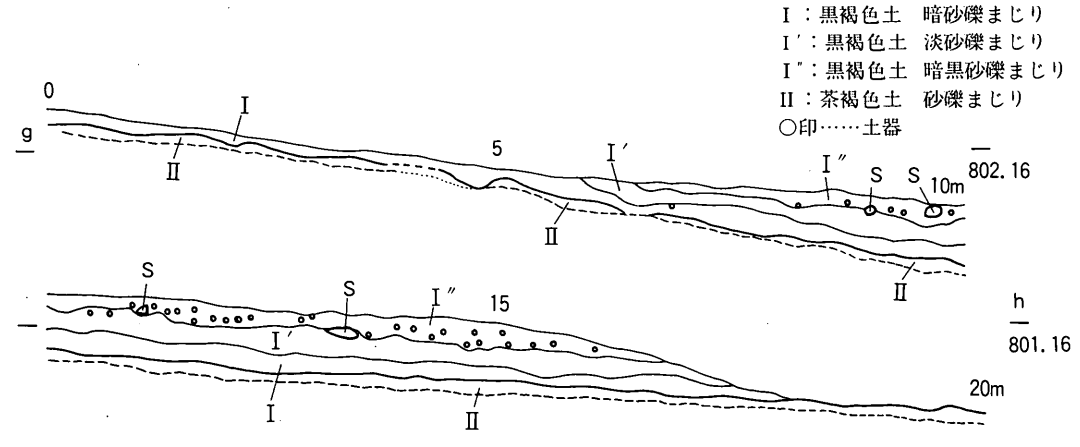
5、南北ベルト(Ⅰ)土層断面図



6、南北ベルト(２)土層断面図

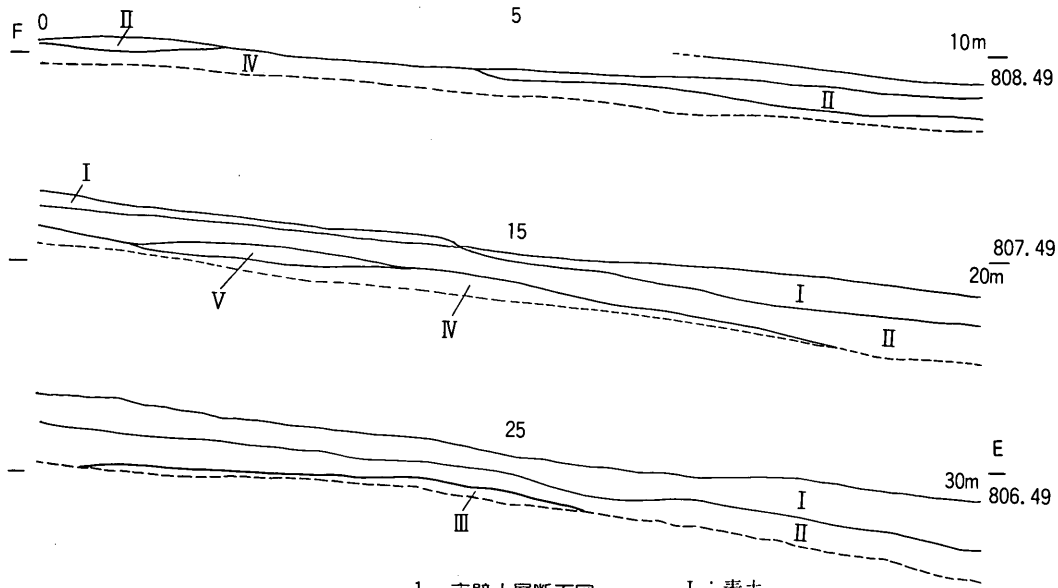


7、南北ベルト(３)土層断面図



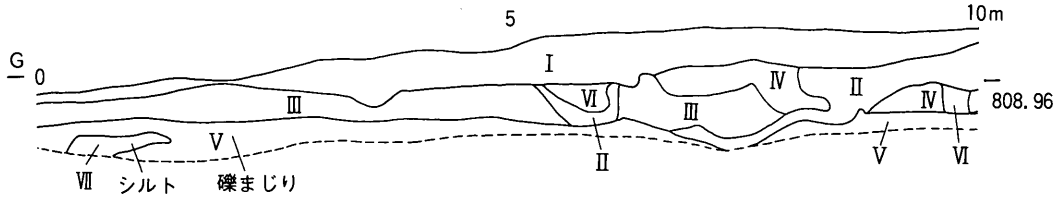
8、東西ベルト土層断面図

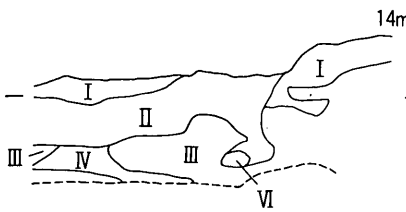
第13図　E 地区土層断面図(3)



1、南壁土層断面図

Ⅰ：表土
Ⅱ：黒色土層
Ⅲ：ローム層
Ⅳ：小　礫
Ⅴ：漸移層



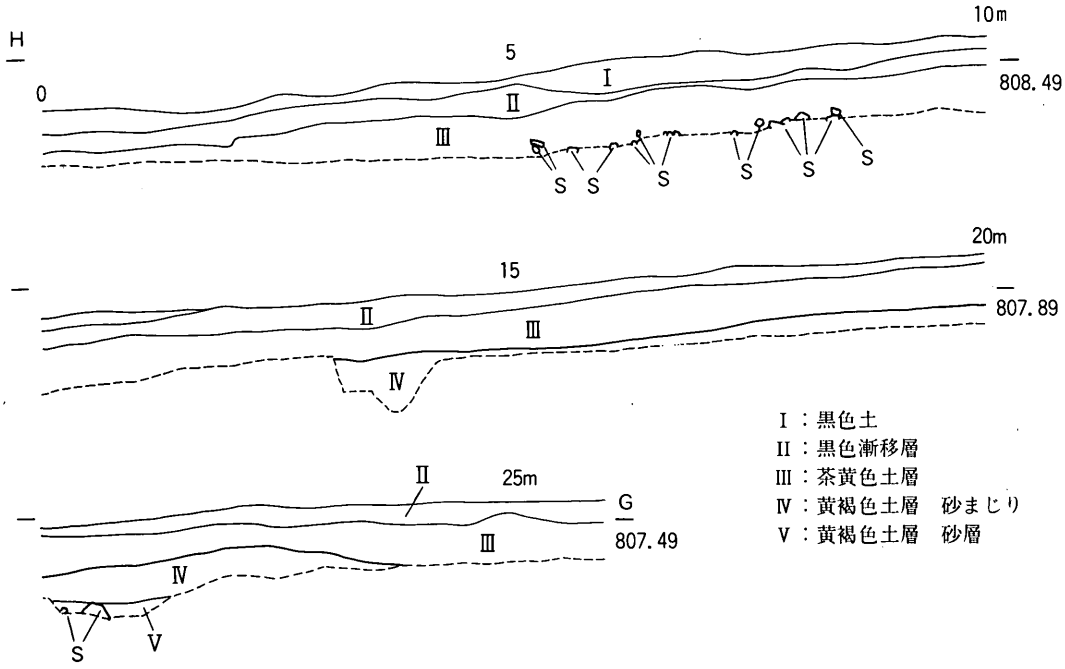


Ⅰ：明灰褐色土
Ⅱ：暗灰褐色土
Ⅲ：灰黄褐色土
Ⅳ：灰褐色土
Ⅴ：黄褐色土
Ⅵ：黒色土
Ⅶ：明黄褐色土

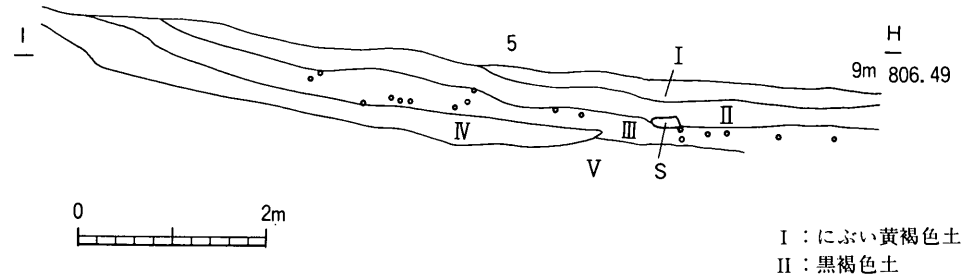
0　2m

2、東壁土層断面図

第14図　F 地区土層断面図(1)



3、北壁土層断面図



4、西壁土層断面図

第15図　F 地区土層断面図(2)

第2節　遺　　構

1　小竪穴（第17～20図）

今回の調査で確認した小竪穴は、調査地区内の南に位置するC地区と北側へ続くD地区の全面にわたっている。C地区には26基（番号1～26）D地区には24基（番号27～50）で計50基である。主観的、視覚的に平面形状で分類し第17図～20図に図示し第1表に詳述したので以下は全体の概略と遺物が出土した小竪穴を中心に述べてみたい。

平面形状と出土基数は、円形16基、楕円形7基、方形6基、三角形1基、不整円形14基、不整形6基であり、もっとも多いのは円形である。以上の内最大のものは、不整形であるがこの小竪穴で200cm×120×38を測る。最小は円形で49の40×38×14cmである。これらの小竪穴は多少の違いはあるが、砂礫を含む黄茶褐色土層に掘り込みがあり、遺物の出土は茶褐色土、黄茶褐色土、暗黄茶褐色土が包含層である。

出土した遺物は、大半が縄文土器片で他に灰釉陶器片、土師質土器片が1片づつ、石鏃、磨製石斧がそれぞれ1点ずつであり小破片や、細片のため図示できなかったものもある。以下は遺物を出土した小竪穴の番号順にみてみたい。

2からは、北東壁際から石鏃（第33図2）と底面付近からは縄文土器片が出土した。この小竪穴はC地区東壁に接し一部は調査区域外のため全体を確認できなかった。5は、縄文土器片を出土した（第32図159、160）。全体に砂礫を含み角礫が混入する。9は2と同じく東側が調査区域外のため全体を調査することができなかったが磨製石斧（第41図189）を出土した。底面に30×20cm大の平石がある。12は、平坦な底面で縄文土器片が出土した（第32図154）。13は、底面が平らな断面摺鉢状を呈し灰釉陶器片を出土し（第32図162）、18は、小破片のため図示できないが土師質土器片を出土した。縄文期以外の遺物の出土はこの2基のみであった。当初6、8、10、と11、12、13、14、15、が対応し柱穴かと思われたが深さや形状が明確でなく確認できなかった。21は、第II層に砂礫と自然の角礫を含み底面付近より縄文土器片を出土した（第31図　139、140、141）。26は、底面が堅くまた焼土があり縄文土器はこの上面より出土した。保存状態はあまりよくないためもろく細片化していて図示できなかった。当初住居址かと思われたので検出に期待したが確認されなかった。36は、今回調査した小竪穴中最も深い掘り込みでD地区の西壁に接し一部調査区域外になるものと思われる。全体に小礫、砂礫を含み第III層が遺物包含層になっており縄文土器片を出土した（第32図　152、153、158）。40、41からも縄文土器片を出土した（第32図　151、155）。（第32図150、157）。特に41は、D地区の東壁に接し一部は調査区域外のため全体は不明であるがかなりまとまって出土した。主体は区域外になるかもしれない。46も北西側が調査区域外になるので全体が不明であるが縄文土器片が出土した（第32図　149、161）。49も縄文土器片が出土した（第32図　156）。

以上遺物が出土した小竪穴の概略であるが他に３、４の小竪穴は形状が円形でほとんど同じ大きさであり上面に炭化物をかなり含んでいたが土器等遺物の出土は見られなかった。（態谷康治）

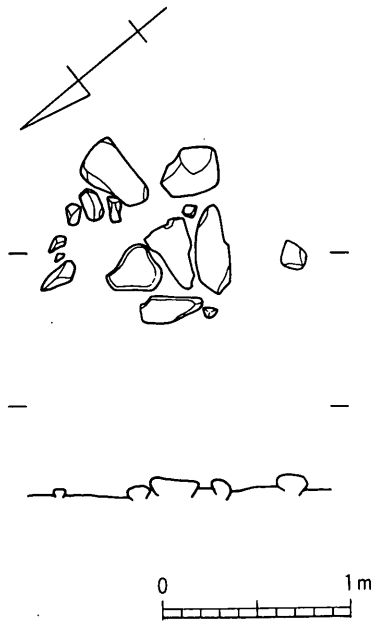
2　集石状遺構（第16図）

Ｃ地区南西隅に位置する。Ｃ地区の一部を南方へ拡張した丁度つけ根の部分である。直径1.2m程の範囲内に長径40～50cmの角のとれた石が６箇、平らな面を上に向けるようにして配され、それらの石の間には径20cm位の石が数箇まとめられていた。この遺構は地山の黄褐色礫混ロームの上面に構成されており、おそらく縄文期に伴うものと考えられ、小破片のため図示できなかったが、縄文中期後葉の曽利期併行と思われる土器片が、表土剥ぎの段階で少量検出されている。

（神澤昌二郎）

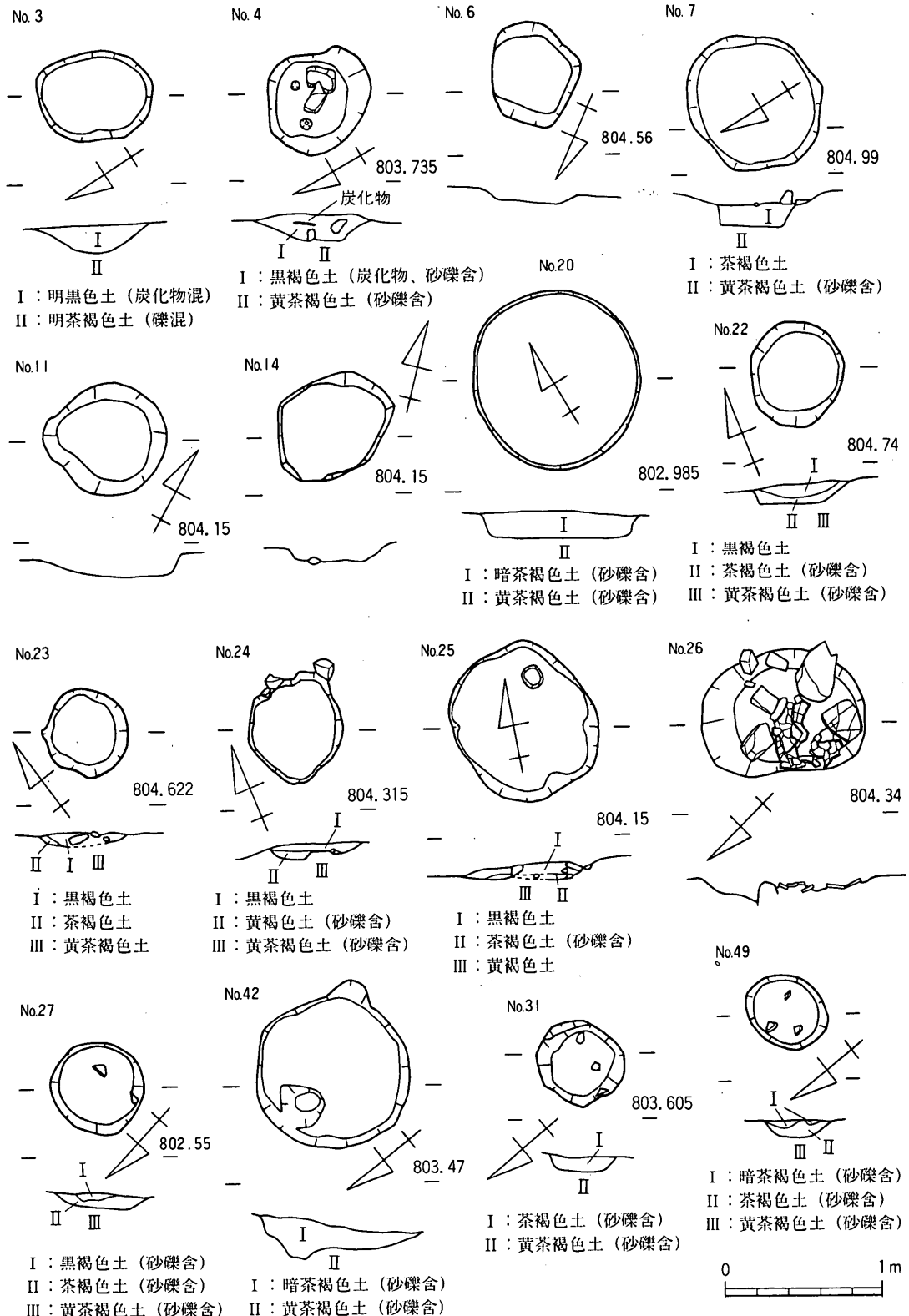
3　土器集中箇所（第10図）

Ｅ地区東部に位置する。径10ｍ位の範囲の黒色土中から縄文中期初頭の土器が一括品や破片となって大量に出土した。その出土量は、今回調査で得られた土器総量の⅔以上となることは間違いない。土器と共に石器も多量に得られている。この土器集中箇所は調査当初は「あんぼり」の谷の傾斜面における単なる遺物包含層または人為的なものではない土器片の溜り場と理解していたため、出土した各遺物の地点等の精密な把握は行わなかったが、最終的には遺物の出土のし方が異質なため、なんらかの人為的な行為の結果としてのものと判断を改めた。結局遺構としては明瞭な掘り込み等にはならなかった。

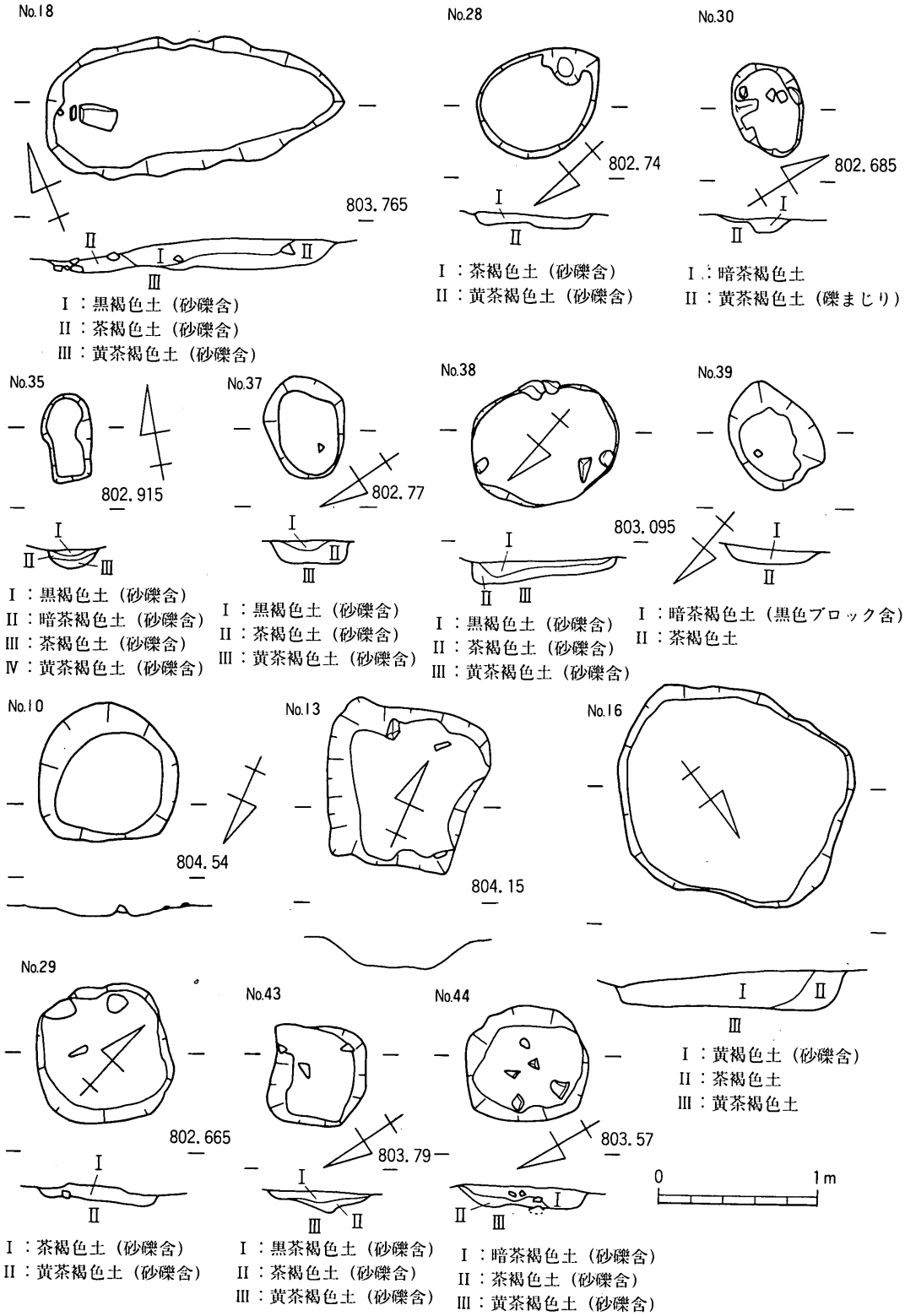


第16図　集石状遺構実測図

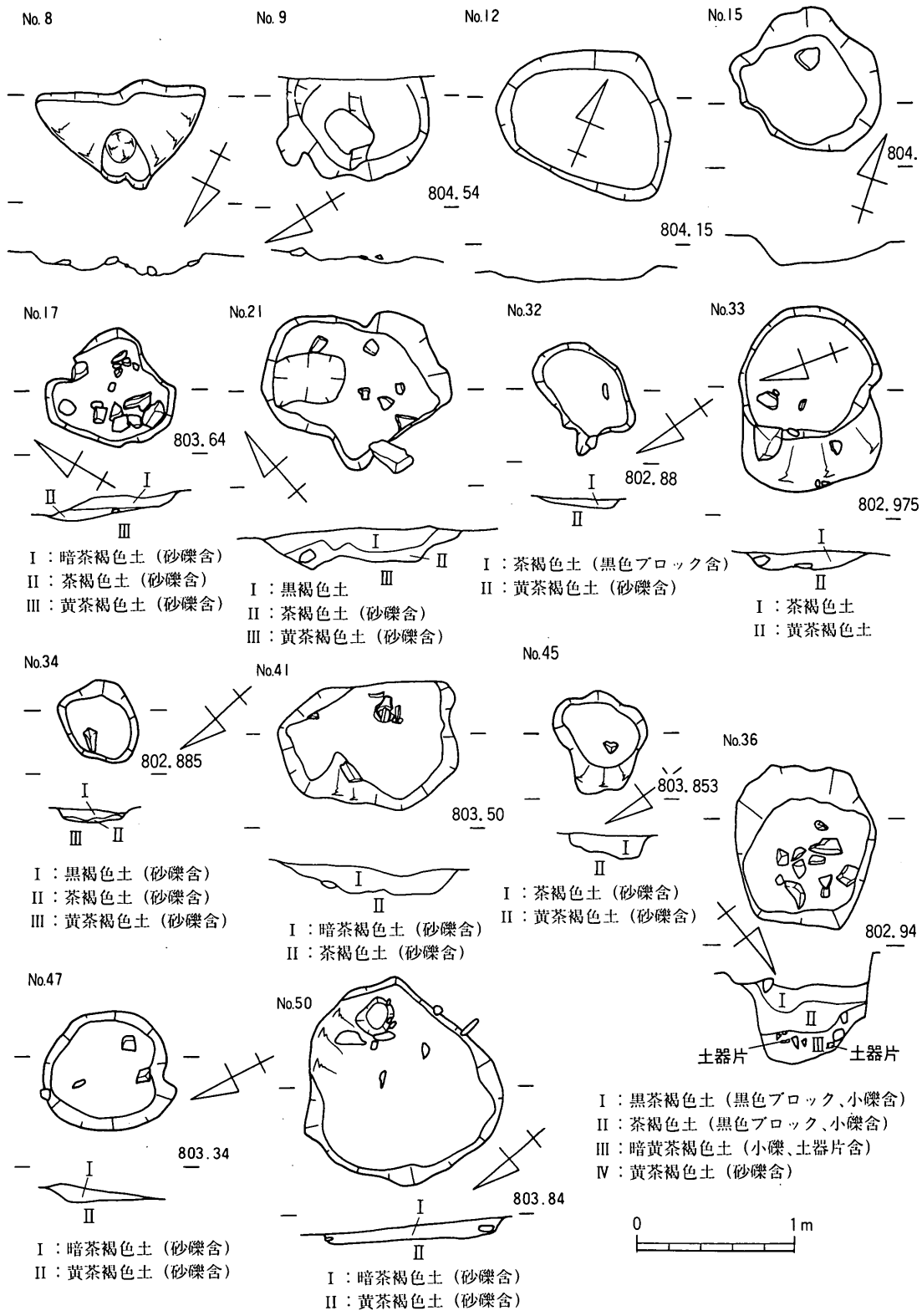
今回の調査では、小竪穴等の遺構のあったＣ、Ｄ地区よりも、「あんぼり」の谷の傾斜面にかかったＥ、Ｆ地区の方が遺物の出土量は概して多く、この谷の斜面が遺物の廃棄場所的な性格をもたされていたのではないかと考えられるのである。前年の第１次調査の際も谷中にＯ地点として5×5ｍのグリッドを１箇設けて掘り下げたが、遺構が存在しなかった割に多量の遺物の出土があったことも忘れられず、この谷の両側が居住地等となって、谷中にはかなりの時期別の、今回の土器集中箇所に類似する遺構が存在していたのではないかと思われる。他の縄文時代の遺跡でも類似する遺構はたびたび見られ、土器溜まり、土器棄て場、特殊遺構等の名称をもって述べられているが、今回のものはそれらに１つの好例を追加したと言えよう。（神澤昌二郎）



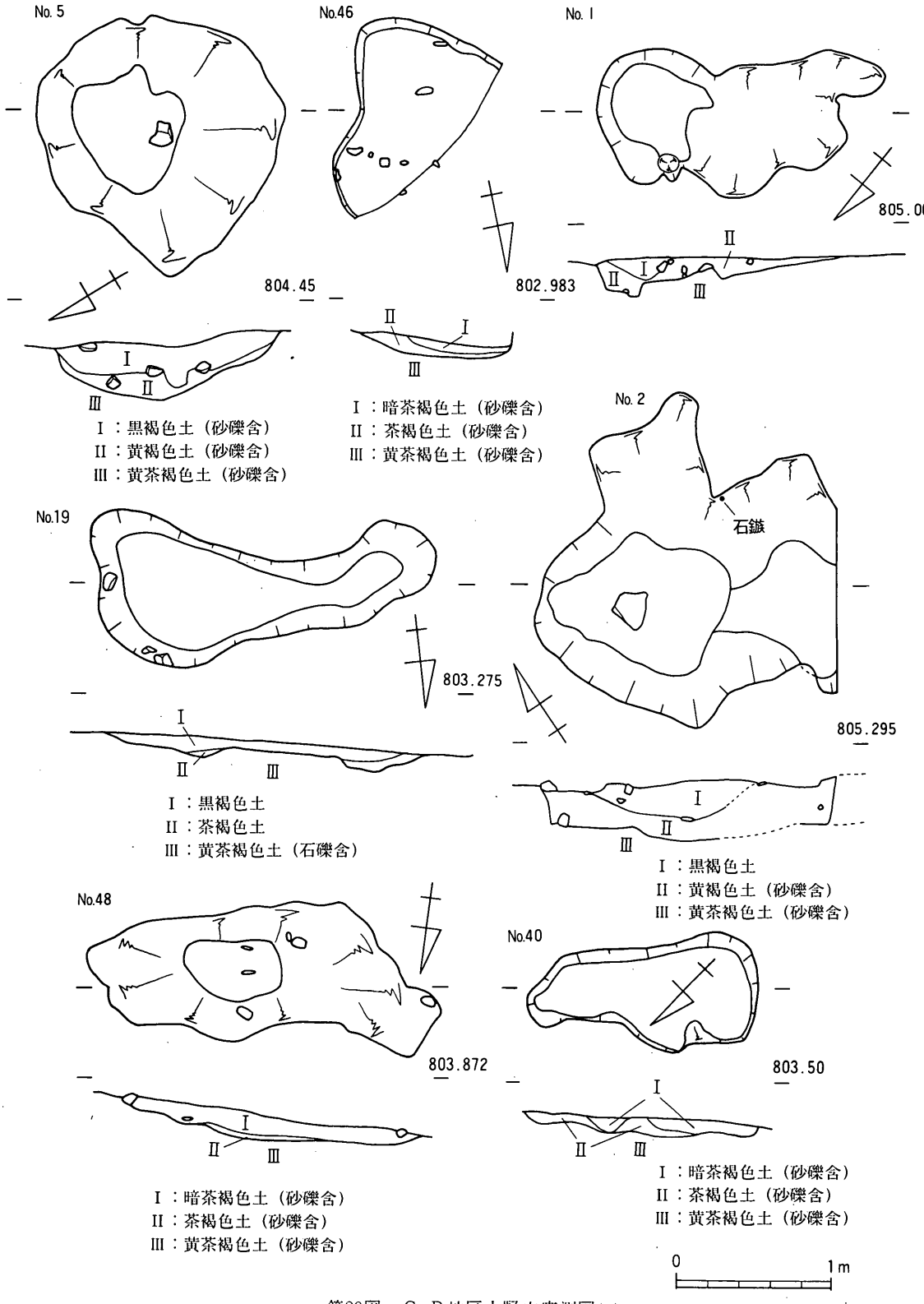
第17図　C・D地区小竪穴実測図(1)



第18図　C・D地区小竪穴実測図(2)



第19図　C・D地区小竪穴実測図(3)



第20図　C・D地区小竪穴実測図(4)

第3節　遺　　物

1　土　器

今回調査の各地区包含層、検出面及び遺構内より出土した土器の総量は、54×34×20cmの整理箱に30箱程である。これは住居址等の発見がなかった割には多い量と言えるだろう。時期別にみると、縄文前期、中期、後期、平安時代のものがみられるが、総量の95%以上が縄文中期初頭に属するもので、他の縄文前期のものは文様に縄文を持ち繊維を含む磨滅した小破片が数点、後期のものは8の字形の文様に充填縄文をもつ小破片が1点、平安時代のものは一部の小竪穴からの土師質土器や灰釉陶器片が数片という状況である。出土土器からみると今回の調査地一帯はほぼ縄文中期初頭の単一時期の包含層として捉えることが可能であろう。提示した総数は162点、そのうち一括品として復元図化できたもの27点、拓影135点である。各土器の詳しい観察結果は一覧表に譲り、以下では出土土器の主体となる縄文中期初頭の土器について包括的に述べてみたい。

器形

おおむね深鉢形、浅鉢形の2種に分けられる。特殊なものとして有孔鍔付土器の一部と思われる破片が少量ある（第31図137・138：以下の番号はすべて土器の通し番号)。これらの中にもかなり多様性と共に類似性があり、それぞれ細分が可能であろう。

深鉢形　完形品はほとんどないが一括品により細部のいくつかの形態を比較していくと、口縁、口頸部の形状、胴部の張り等が細分の手懸りとなる。

波状口縁のものは、8・12に代表される。胴部は欠損しているが、底部際からほぼ直線的ないしは反り気味に外開して段をもつ頸部に至り、内彎気味に大きく開く口縁に続く器形の外形線を描くと思われる。口縁はかなり正確に割りつけられた四単位の波状となっている。70・103も胴部の張り具合が不明だがほぼ同様なものであろう。ただし103の波状部突端の外側面は僅かにふくらみ、円形に面が取ってある。以上4点の他、92・104も大きな四単位の波状口縁をもつと思われるが、頸部に段ないしは稜をもたずに胴部へ移行する外形を呈するらしい。6・7や17の様なものは波状口縁というよりは口縁端部に付された突起とみたい。

平縁口縁のものは更に数種類に分かれる。A種は1・3に代表される胴部が直線的ないしは反り気味に外開し、内彎気味に開く口頸部に続くもの、B種は2・17等に代表される胴部が一旦張り、頸部でやや括れて内彎気味に開く口頸部に至るもの、C種は9に代表される胴部が張り口縁部が特徴的に短く急に外開するもの、D種が6・7に代表される胴下部から口縁端部まで直線的ないしはやや反り気味に外開するものである。この他に補助的ではあるが、13・20・21・22の様な小形で特殊なものをE種、39・49の様な直線的に外開してきた口縁部が「く」の字に屈曲して肥厚する口縁端部に至るものをF種としておきたい。この細分は一括品や器形がわかる大形破片

を例としているので、拓影で示した小破片類のなかには何種にあたるのか明確でない物も多い。たとえば、内彎気味に外開する口頸部破片のみではA、B種のいずれかの区別はつき難く、また張りをもった胴部破片ではB、C種で同様のこととなる。

浅鉢形　平縁口縁をもつものと波状口縁をもつものに大別され、さらに鉢部の形態により細分が可能と考える。ただし提示したものはすべて破片からの復元実測か拓影であり、特に底部付近の形態は全く不明である。

波状口縁をもつものの鉢部は底部際からほぼ直線的ないしは口縁に近くなってやや反り気味に大きく開く形の1種類しかみられない。代表的な例として109・110・113・130等がある。これらの口縁部は四単位で全周する大きな波状となろう。波状口縁の例外としては133（鉢部から口縁にかけて内彎気味に外開）・134（口縁端部が肥厚し「く」の字形に内屈）があるがいずれも波状の振幅が小さく、平縁口縁のものの亜種とみた方がよいかもしれない。

平縁口縁のものは断面形に3種類ある。A種は11・117に代表される底部から直線的ないしはやや端部が反り気味に大きく外開して口縁端部に至るもの、B種は107に代表される口縁部が内彎しながら立ち上がるもの、C種は直線的に外開してきた鉢部が大きく「く」の字に内屈して口縁部をつくるものである。

文様

個別の文様、文様帯、施文具或いは施文方法に多様性と共通性が窺える。これらの総体とした文様に関連する要素は、前述の器形の種類にかなりよく対応する。

文様帯　深鉢形の波状口縁のもの及び平縁口縁のA～C種は頸部以上と以下で文様帯が2段に分かれる（2段構成）。上端から第1段目、即ち口頸部は横位に4の倍数単位の反復で同様の文様を連ね、第2段は頸部下から底部際までで、縦長に4ないし8等分している。16の様な例外もあるが、A～C種はこの文様帯の配置が最も基本的なものと考えられる。これに対し深鉢形平縁口縁のD種には7の様に横位3段以上の文様帯をもつものがある。第2段目以下の文様帯は2段構成のものと同じ型だが、口縁部の周囲に横位の縄文帯をつくっている点が特徴的である。また6の様に7と同様な口縁外周の縄文帯以下は一帯として捉えた方が良いものもあるが、このD種は頸部の括れがないためか、概して口頸部と胴部がきっちり二段の文様帯に分け難い。6にしても欠損している胴部下半の文様の展開は、或いはもう一つの文様帯として捉えるべきものになるかもしれない。この点からみると12は胴部破片であるが同じD種で第2段目と第3段目の文様帯の一部が現れているのであろう。同様なD種の一部と思われるものに27・75・98が挙げられる。深鉢形平縁口縁のE種は文様帯に区切って文様を捉えられず、F種はほとんどが小破片で文様帯の構成については触れられない。

浅鉢形のものはすべて口縁部の内面か外面或いはその両方に1段のみの文様帯をもち、それ以下の鉢部は無文となる。136はその唯一の例外で外面に口縁部の文様帯から鉢部へ垂下される沈線がみられる。浅鉢形ではなく深鉢形の口縁部かもしれない。

文様　個々の文様は専ら器面への陰刻により描かれ、隆起線は基本的には文様帯や大まかな文様のまとまりの区画に用いられるのみである。描かれる個々の文様は「U」字ないし逆U字状の弧、円、楔状の「T」ないし「Y」字形が主となり、これらに縦位、横位の直線が伴っている。器形によっては竹管状施文具を用いたと思われる連続爪形、刺突による三日月形がみられる。これらの文様が先に挙げた各器形各種の文様帯にかなりの共通性をもって組み合わされて描かれている。次に各種の文様帯の文様の特徴についてみてみたい。

深鉢形平縁口縁のA種及びB種の第1段文様帯（口頸部文様帯）は、逆U字形の弧と円を交互に連ねて8単位で全周させるものが基本となっている。円には単円、二重以上の同心円、渦巻きの各種類があって、T字ないしはY字形で二・三方から囲まれて所謂「玉抱き三叉文」を構成している。細部に多少の変形はあるが、この文様の組み合わせとして観察できる同種の文様帯をもつものとして1・2・17・67・69・80・105等が挙げられる。これらの細部の相違（変形）を列挙すると、1は弧線の端部が連結して弧線というより大きな波状線になり、17は玉抱き三叉文が1つおきに円の替りに並行線をもち、69・105は円を囲むT字形がはぶかれ、80は玉抱き三叉文が配されるべき部分にも弧線が並列されている、という状態である。

同器形同種の第2段文様帯（胴部文様帯）は頸部から垂下される隆起線によって縦長の区画に4等分される。区画内は、単に縄文が施されるだけのもの(1)、上端に沈線による縁取りの描かれるもの（2・3）、上端に逆U字形の弧の連結やT字形が楔状に描かれるもの（67・77）、頸部から垂下される縦の隆起線の両側に沿って引かれる沈線・平行沈線が胴部中央付近で菱形を描く様に彎曲するもの（5・40・87）等の多様性がみられるが、いずれも縦長の4区画の構成を乱すものではない。第2段文様帯が以上の外、16・59・86・102の様に上端にもう1つの文様帯を設定できそうなものや、31～33・57・58・66等の様に縦長の4区画の基本が崩れて小区画が描かれるものなどもある。

深鉢形平縁口縁C種は明確に該当する個体が9の1箇のみであるが、第1段文様帯は幅の狭い縄文帯、第2段は前のA、B種の様に縦長の4等分がなされずに逆U字形の弧線を連結して楔状T字形を組み合わせている。この第2段文様帯の縦の4分割がない点が特徴であろう。

深鉢形平縁口縁D種は2段以上の文様帯をもつものがあることは前述した通りである。第1段文様帯は幅が狭く、縄文帯となる。6・7・98等でよく観察できる。第2段は7・27の様に明瞭に文様帯を画すものと、6・98の様に既に隆起線による縦の4分割がこの段から始まるものの2種がある。前者は内部に変形された玉抱き三叉文をもつ大きな上方に開く弧を4単位で連ね、更にその弧を隆起線で縁取っており、後者は区画内部を直線で縁取ったりその中心に同心円を描いたりしている。第3段文様帯は基本的にはA、B種の第2段文様帯と同じく縦の隆起線で縦長の区画に4分割されるが、更にそのまま隆起線際を縁取っただけのものと、区画の上端に逆U字を横位に連結させて連結部から直線を垂下させたものの2類がみられる。

深鉢形平縁口縁F種は口縁部付近の破片のみで頸部以下の器形、文様を知り得ないが、口頸部

のみをみても、「く」の字に屈曲する部分で上下2帯に分けられそうである。即ち第1段目は39の様に横走する直線に伴って縦の短沈線が並べられるもの、38・49・65・82の様に単に横走する直線のみのもの、84・85の様に円形の刺突が二段で横位に並べられるものの3類程がみられ、第2段目は横走する直線で区切られた中に縦位ないしは斜位の直線が充填されるもののみで捉えられる。文様を知り得る範囲のF種は円形刺突のものを除いて、長短さまざまな直線で文様が構成される傾向が強いと言える。F種として捉えられず、むしろA種やC種の器形にあたるものの中にも、専らこの直線で文様が構成されるものがいくつかみられ(26、42、43、68)、これらは、或いは器形を超えて一括して良いものかもしれない。F種の頸部以下にどの様な文様帯、文様が続くのか今回の資料ではよくわからないが、23か28の様なかるい沈線で描かれる頸部付近や、31、33の様な平行沈線で描かれている胴部付近はどうかと思っている。

浅鉢形は平縁口縁、波状口縁の両方とも文様は類似している。3種類程の文様構成が窺える。その1は幅に多少の違いはあるが、いわゆる爪形文を連続させているもので、この竹管状施文具の押し引きでつけられる文様が平縁口縁のものでは横走し、波状口縁のものでは波状部で渦巻きや同心円状に連ねられている。その2は、単なる横走する直線またはこれに刻み状の縦位短沈線が伴うもの、その3は縄文帯だけのものや、前2者では捉えられないものである。その2、その3が口縁部内外面ともに現れるのに対し、その1は専ら内面のみという特徴がある。

施文具　深鉢形および一部の浅鉢形にみられる沈線は断面形が半円となっており、先の尖ったヘラ状工具よりは断面形の丸い細い棒状工具で引かれたと考えた方が無難であろう。この他沈線ではごくまれに平行沈線が認められ(5・14・16・28?・31・32・33・40・41)これらは半截竹管により描かれたものとみている。浅鉢形につけられた各種の爪形文は従来の考え方通り、半截ないしは多截の竹管工具によるものであろう。深鉢形および浅鉢形の一部にみられる縄文は時に地文となり、時にその文様帯の主要な文様となっている。縄文の施文方向は、深鉢形D種の第1段文様帯や、A～C種のごく僅かな頸部の隆線につけられるものが横位に回転されるだけで、他はすべて縦方向である。縄文の撚りはRL、LRともにみられ、30%位のものは結節を伴う。縄文の他に、まれに撚糸文が地文となっているものがある(2・5・89・90・95)。　(神澤昌二郎)

2　石　器

今回出土した石器の総数は261点である。[註1]調査区5地区のうち、E地区から最も多く出土、表採の8点を除くと、その90%以上229点を数える。ここでは器種毎に大きな分類を行い、概要を述べる事とする。

1)　石鏃(第33図1～33)

33点出土した。これらは茎の有無と基部形、側辺の形状で次のように大きく分類した。

無茎凹基－A、同平基－B、同円基－C、有茎凸基－D。側辺内彎－a、直状－b、外彎－c、A：B：C：Dの数量比は24：3：3：1となった。a：b：cをみると1：14：15である。又

B、C、Dの7点はすべて側辺外彎を呈していた。欠損品は15点と約半数を占め、脚部欠損が9点と一番多い。石質は4点を除いて、黒曜石製である。次に個々について見てみると、抉りの深い3だけはやや青みがかった黒曜石を用いており、今回出土した小物石器中この1点は、他の黒曜石とは産地が異なるものと思われる。6は縁部が一部を除き白濁しているのが観察できる。この状態は固い対象物に当て、擦ることの反復運動による磨滅であろうと考える。33は一応ここに入れてはおいたが、欠損部が既に再加工されており、他の1～32の石鏃には見られない鋸歯状の側辺が何らかの石器への転用を思わせるものである。

2) 石錐（第33図34～40）

7点出土した。全体形からつまみ部を有するもの(A)と、棒状のもの(B)に分け、錐部の2次加工が両面(a)か、片面(b)かで分類した。Bはすべて両面加工であり、片面加工の2点は共につまみ部を有していた。両面加工されているものの中で特につくりの丁寧なものは34、35の2点である。また35～37の3点は先端が欠損したものをほとんど加工せず再利用しているものと観察される。38は錐部の先端に石鏃6と同様の磨滅が見える。39は両端に錐部をもつものである。この2箇所の錐部は、低い三角形状の断面を呈し、簡単なつくりではあるが、他の6点より尖鋭なものとなっている。

3) 石匙（第34図41、42）

2点である。41は刃部形状円刃を呈し、いわゆるラウンドスクレイパーにつまみをつけた恰好をしている。又、42は外彎刃で、横型石匙としての大形のつまみの他に、刃部の一端に小さなつまみを作出している痕跡があり、いわゆる縦型石匙とも受け取れる。

4) スクレイパー（第34図43～49）

7点出土した。刃部の形状により、外彎刃(A)、直刃(B)、内彎刃(C)、さらに、2次加工の種類によって両面加工(a)、片面加工(b)とに分類した。器種全体の傾向は外彎刃、或いは両面加工のものが主流をなすように思われるが、絶対数が少なく確たる事は言えない。7点のうち、大きい方の3点がチャート製であり、これらは石匙に比べるとかなり粗雑なつくりである。又、47は狭小な刃部と、反対側に残されている打痕が他のものとはやや異なった感じの石器である。

5) ピエス・エスキーユ（第34図50～52）

これら3点はいわゆる両極打法のみられる剥片であり、ここに一括した。いずれも縦長の素材でいわゆるピエス・エスキーユとはやや全体形の異なるものではある。

6) 使用痕のある剥片（第34図53～57）

5点を図示した。これらの分類は使用痕部の平面形状をスクレイパーの刃部形状と同様に扱い又、刃つぶれ(a)か、刃こぼれ(b)かという観点から行った。結果、ほとんどがb型の刃こぼれであった。

7) 打製石斧（第34～39図58～154）

113点出土した。分類は基本的には、中央道報文「岡谷その4」（青沼1980）に従い、現状の側辺

と刃部形状による組み合わせで行った。

量的にみると、Ⅰ：Ⅱ：Ⅲの比は48:10：35で撥・平行短冊型が非常に多い事が分る。又、A：B：C：Dのそれは20：27：18：21と円刃が他よりもやや多い程度で極端に偏った傾向はない。

第3表　打製石斧の形態別個体数

刃部形 / 側辺部形	直刃(A)	円刃(B)	尖刃(C)	斜刃(D)	不明
撥型(Ⅰ)	8	13	11	11	5
胴膨短冊型(Ⅱ)	3	1	1	2	3
平行〃(Ⅲ)	8	11	5	5	6
不明	1	2	1	3	(両者不明) 13

打製石斧の中には完形ではあるが一見して作成する段階での過程、例えば薄化時、調整時、或いは使用中に破損したものをそのまま、もしくは若干手を加えるだけで継続使用したと見られるものがある。[註2] 刃部側では、58、62、72、98、131、133、又頭部側では、63、67、93、107、108、110、115、116、縦に半折したもの97、不明117、等を指摘する事ができる。これらは計16点となり、量的には全体の約25%に当たる。側辺、刃部形でみると、Ⅰが7点、Dが6点であり、斜刃へ多く偏った姿を示している。次に欠損部についてみると、頭部24、刃部13、胴～頭部9、胴～刃部7点を数え、[註3] 頭部が欠しやすいことを示している。

使用痕は多くの場合、刃部際の側辺部は丸みを帯び、その周辺の主にどちらか片面の剝離の稜部が平滑化しており、なかには刃部に太い凹みの線条の痕跡を残しているものもある。そのようなものの中から特異なものとして62、117がある。頭部に痕跡を見せる62は、刃部欠損後再び刃部を作出している、その間にでも頭部側を刃部として使用したのであろう。117は断面を見ると、片面が大きく剝落してからそちら側を刃部として用いた結果であろうと考える。又、79、115、150の片側辺部にのこる使用痕は他の刃部周辺に見られる痕跡と全く同じ状態であり、極めて偏った使用方法によるものと思われる。

8）横刃型石器（第39、40図155～177）

27点出土した。これらは刃部の形状のみで3分類している。直刃(A)、外彎刃(B)、内彎刃(C)である。数量でみるA：B：Cは10：12：3となり、[註4] 内彎刃が3点とすくない。又、その3点のうちの2点（174、175）も、刃部作成時の1回の加撃が大きすぎて彎曲してしまった感が強く、刃部の全体形へ払われた考慮ではないようである。欠損のあり方は、刃部或いは背部の一部を欠するというものもあるが、刃部から背部にかけて半折するというものが4点あり、これが本器の普通の欠損のタイプと思われる。

使用痕跡についてみると、横刃型石器類には打製石斧のような明瞭な痕跡はのこっていない。ただ159の刃部際に光沢をもった平滑化した面が観察できたのみである。

9）その他の打製石斧（第40、41図178～187）

打製石斧、横刃型石器とはやや趣の異なる刃部作出のみられる石器類をここに掲げた、いわば粗形の刃器類が多い。一部を除き周囲に刃部を設けているもの――178～180、打製石斧の刃部片を

再加工しただけのもの――182、183、剝片に簡単な刃部を作出した薄手のもの――184、185、厚手の鈍い刃部角の片刃石器――186、横長のもので大きな剝離が行われていてもまだ刃部をもたないもの――187等がある。

10） 石錘（第41図188）

唯1点のものである。礫石錘で手ごろな緑泥岩の自然石の両端を数回ずつ加撃したのみで他に加工は見られない。

11） 磨製石斧（第41図189～192）

4点出土した。定角式石斧と乳棒状石斧である。定角式石斧は小形の189と大形の190があり、190は刃部破損後、破損面を敲石として利用した痕跡がある。191は頭部破損後再加工が行われた為か広い刃部巾に不似合な寸詰りのプロポーションとなっている。192は乳棒状石斧の頭部側の破片である。

12） 敲石、凹石、磨石（第41～43図193～219）

これらの石器は一括して扱った。合計44点の出土を見た。

型式は石器に見られる次の各痕跡をプラスすることとした。敲打に伴った、大きな剝離がある――A、凹部をもつ――B、磨滅痕が顕著な面をもつ――C、小さな敲打痕をのこす平滑面がある――D等である。その結果、A＋B11点、A9点、B、C＋D各6点、A＋B＋C4点となり、C、D、B＋C、A＋C＋D、A＋B＋D、B＋C＋D、A＋B＋C＋Dが各1点であった。このことから、Aの敲打痕か、Bの凹だけをもつもの、或いはその両者を有するもので半数以上となりさらにこの両者にCの磨滅痕をも含めると、全体の約70%を占めることとなる。又1点のみを除きDはCを共に持っており、逆にDとAの敲打痕、あるいは凹という2通りの型式は見られなかった、これは仕事の類似、相違性を示すものと考える。

個々の痕跡についてもうすこし観察してみると、Aには調整痕までもつ193、194と、2面ないし3面により生じた稜、突端部を利用する199、200、比較的扁平な素材の端部を利用した201、202等が多い。また凹の用途とも関係する事であるが、破損部位が凹の位置と合致しているものが9点あり、その中で長軸に対して直角に破損した216、217などは、新しくできた面の縁辺を敲いてつぶし、面も敲きによりかなり平滑化していた[註5]。

Cの磨滅痕の典型的なものは219の石鹸状を呈するものである[註6]。又、やや特異なものとして215がある。半折した凹凸面が擦れており、普通は外彎面となる他のものとの用途の違いを感じさせる。

Dは、特殊磨石にみられるあの平滑面である。多くはDだけの痕跡（216）だけではなくC痕跡を隣接させている。使用面は長楕円形を呈し、ほとんどが長軸に平行する面にあるが、212、213は直交する面にもみられる。これらの痕跡は“敲きと擦り„を交互に行った所産ではないかと考える。

13） 石皿（第44図220～223）

4点出土した。すべて破損品である。222は他の3点よりも薄い石材を用い、表裏両面に皿部を作り始めたものである。まだ起伏が激しく平滑化していない。

14) 台石（第44図224）

前述の凹石よりも極端に大きく、厚みのある長方形の石の2面にはわずかな凹みが残っている。

（高桑俊雄）

註

1 ピエス・エスキーユ、使用痕ある剥片等については図化したものだけを含めたが、実数ではもっと多くなるであろう。

2 むろん製作当初目的とした、或いは破損前の形態などは分りようもないが、石器の平面、断面の状態、調整の疎密などでアンバランスなものをここに選んでみた。

3 刃部と頭部を欠するものは、刃部1、頭部1として計算した。

4 177はB・C両方に含めた。3点は不明。

5 このようにこれらの破損後の再使用は敲打器への転用が多いようである。表には壊れて誕生した面に何も人為的な痕跡のないものだけを一部破損としておいた。ちなみに全体では11点となり25%という値を示す。

6 『長野県中央道報告書—原村その5』（長野県教育委員会 1982 笹沢・佐藤）によると、阿久ではこのタイプのものは70%以上がBとCの他に敲打痕をも残している。

3 土製品

土製品としてとりあげたものは14点あり、その1点以外はいずれもが堀の中にあたるE地点の多量に出土した土器と共にあったものである。土製品は土偶、不明の土製品、土製円版の三つに分けられる。

a 土偶（第45図1～5、7～9）

1はいわゆる河童型土偶の頭部で、頭頂部は平らでX状の3本ずつの結節沈線をひき、右側1本は先端が内側にまるまり、他端は分岐して対象的にまるまっている。X状沈線の間にも一対の三角形を沈線で描き、後頭部には後斜めに径4㎜の貫通孔がある。顔面は平べったく小さいが、剥離していて形状不明である。頸部中央には径3㎜の孔が縦にあいている。色調は褐色と黒色、胎土にはかなりの石英細粒を含む。2は妊娠土偶で胴部前面しか残っていない。大きくはち切れんばかりに脹らんだ腹部には太めの妊娠線が走り、臍は串状工具で突き差してある。脚の付根は2.5×2.4cmのほぼ円形である。色調は茶褐色、胎土には微砂粒を含む。3は板状の土偶で腕と胸部が残る。前面には首から肩へ2本の結節沈線が引かれ、腕は短かく、先端が丸く表現されている。小さ目の乳房の間に縦に結節沈線が垂下する。背面は平らで無文である。頸部と胴部中央にはそれぞれ3㎜の孔があいている。色調褐色、裏面3分の2位が黒色化している。4は土偶の側面と思われるが、部位ははっきりしない。側面に2条の結節沈線をもち、片面は無文、他は剥離

している。色調茶褐色、胎土には白色微粒を僅かに含む。５も部位がわかりにくいが、土偶の左腹部あたりと思われる。側面に４本の結節沈線がはじまる。裏面は無文で反っている。色調茶褐色、一部黒色化している。７、８は足で、７の足裏は僅かに彎曲しており、踝にあたるあたりに３条の短い沈線を施している。足部分だけを別造りしたらしく、塊状に残っている。８も足部であるが、形状から右足と思われる。足底は平らで内側がくびれる。上部からの孔が僅かに残る。色調は７は茶褐色、８は淡橙色に内側はにぶい橙である。胎土は共に僅かに石英の微粒を含む。９は全長2.6cm、上・下面径1.6cmのほぼ円形の耳栓にも似た、鼓形の土偶である。反りの少い側面に縦に深い沈線を引き、上部に両眼とも思える凹み、鼻と思われる不整菱形の凹み、口と思われるやや浅目のはっきりしない凹みの３つが施されている。しかし見様によっては、顔面、胴、下腹部とも見える。色調は茶褐色、胎土は僅かに雲母を含んでいる。焼成はよい。

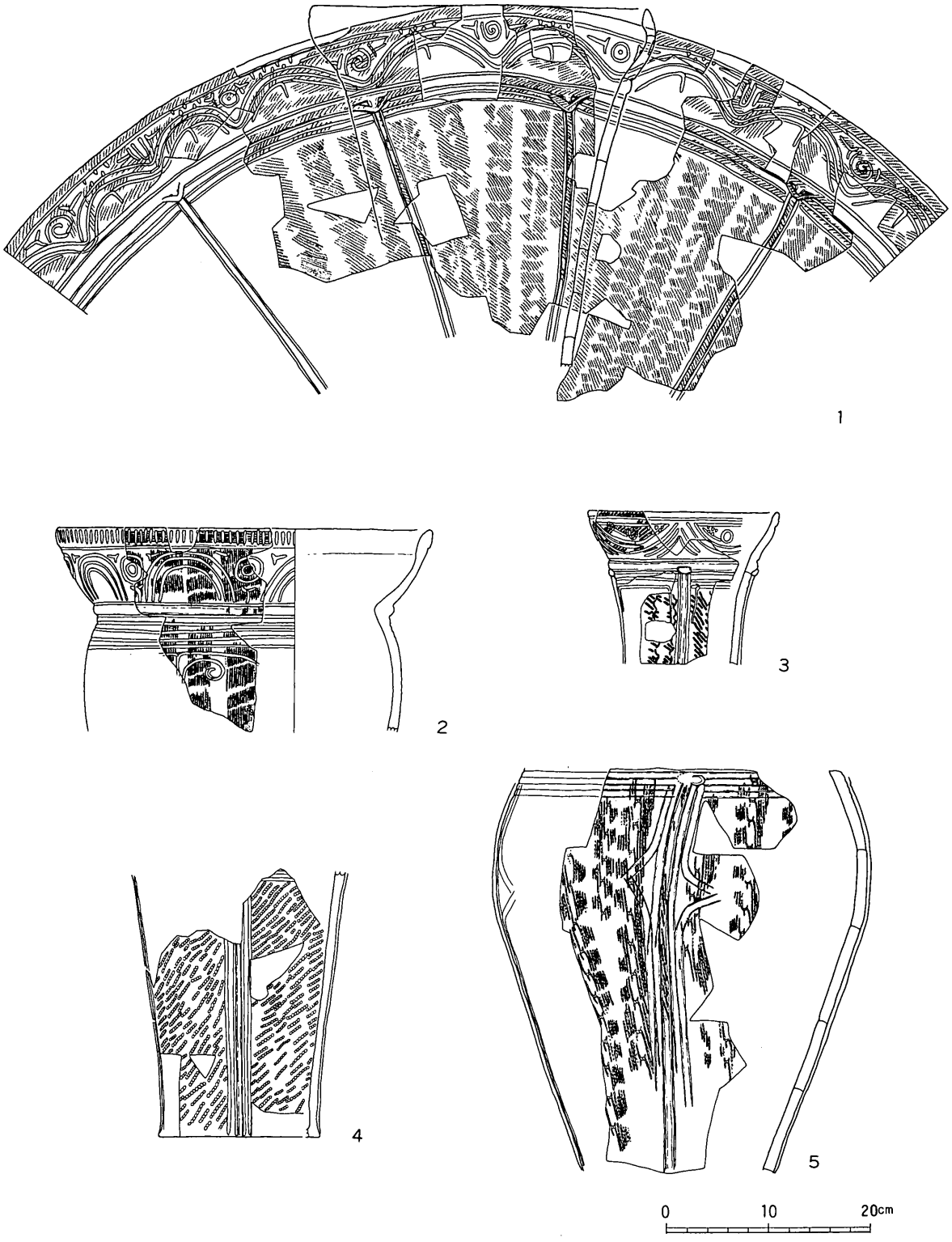
b　不明土製品（第45図６）

６は土偶と決め難いもので、2.8×3.0cmの楕円のラッパ状のものであり、短径片側に僅か２mmの小孔が穿たれている。すぼまる基部はそのまま終っているのか、他と接続するのか摩耗していて不明である。色調黒褐色、胎土は僅かに細砂粒を含む。

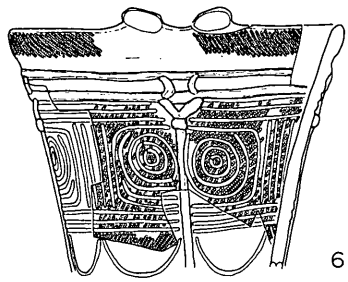
c　土製円版（第46図１～５）

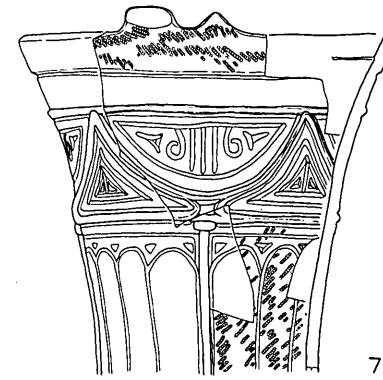
５点ある。１は縄文の付された土器片の側面を磨ったもので、直径3.6cmで僅かに内彎する。２は羽状の４本の沈線と、隆帯に縄文を施したものの破片で、側面を磨ってほぼ円形に整えている。色調褐色、胎土に雲母を含む。３はＤ地区検出面出土のもので、縄文施文の土器片を磨って円形を形づくっている。色調茶褐色、内面黄褐色。胎土雲母含む。４は長径3.4cmの小型のもので、無文の土器片の側面を磨っている。色調茶褐色。胎土白色細粒を含む。５は無文土器片でやや６角形にも似た形で、明らかに２辺を磨って調整している。これらの他、土製円版としては疑問があったので図示しなかったものが３点あるが、その中の１点は繊維土器であり、これが土製円版とすれば、松本平の中では時期的に最古のものと言えるので、あえて言及しておく。

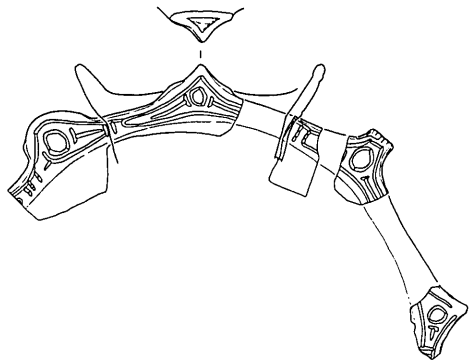
（神澤昌二郎）

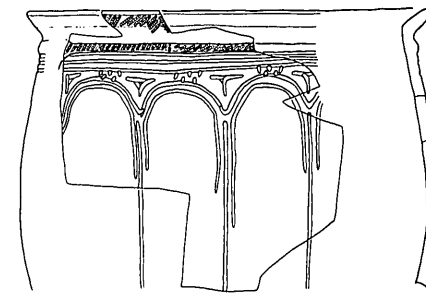


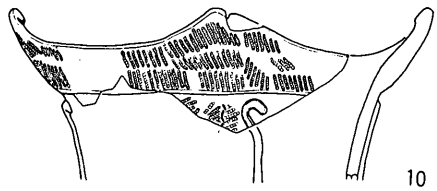
第21図　出土土器(1)

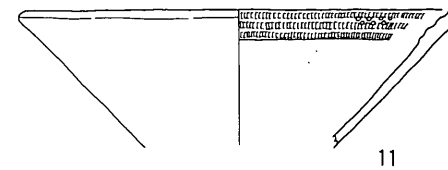


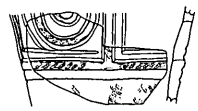


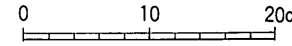




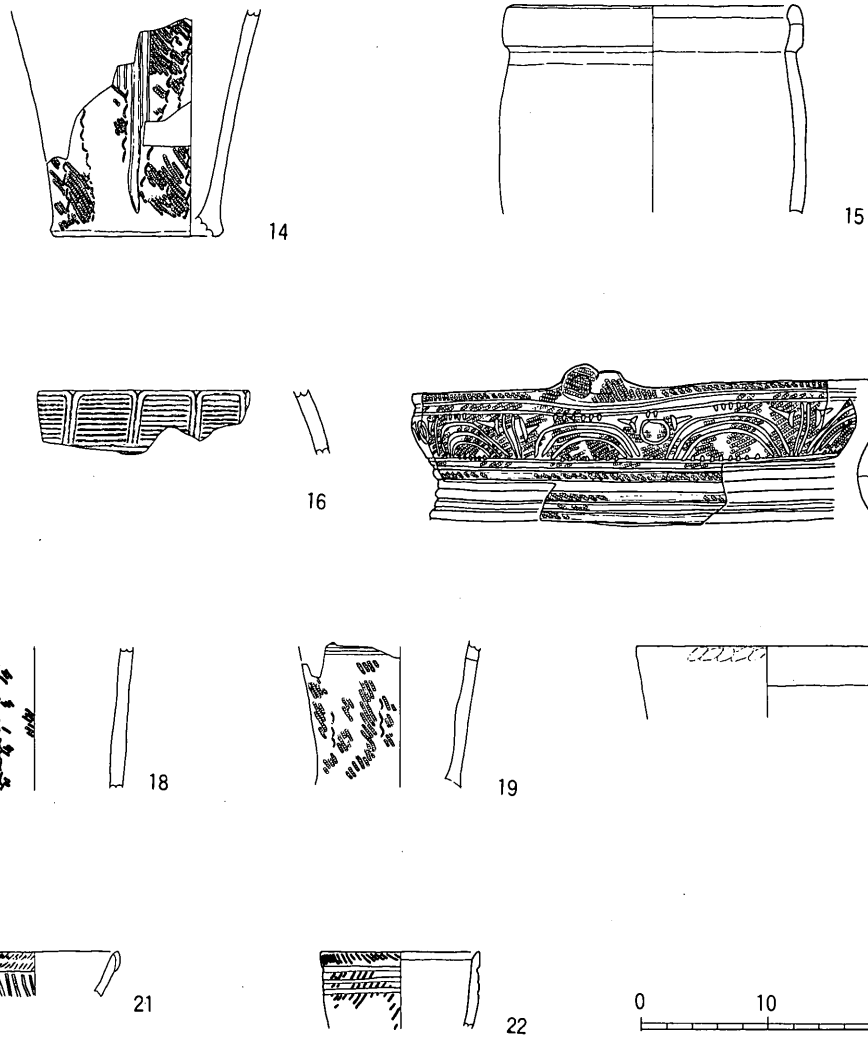






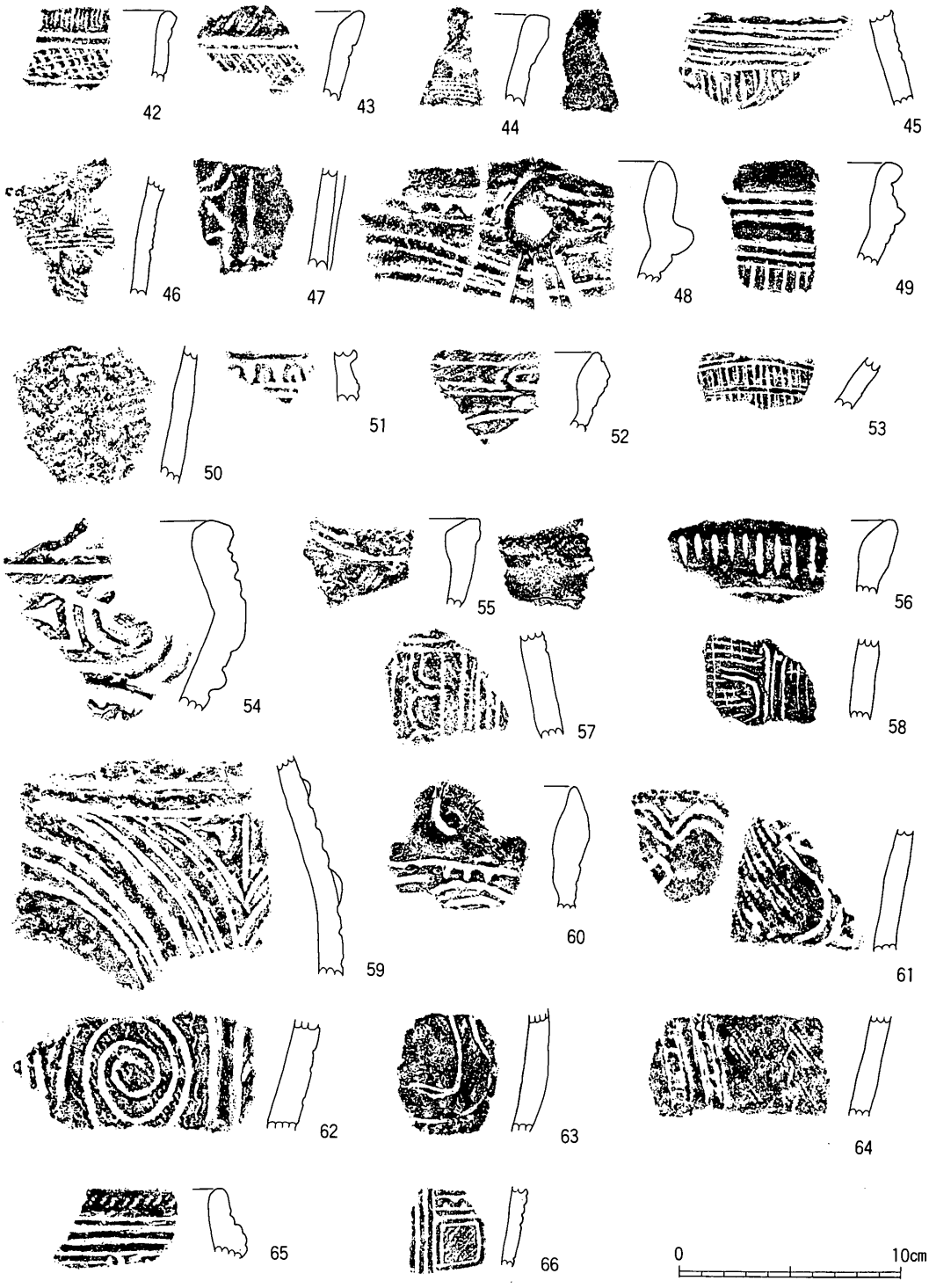


第22図　出土土器 (2)

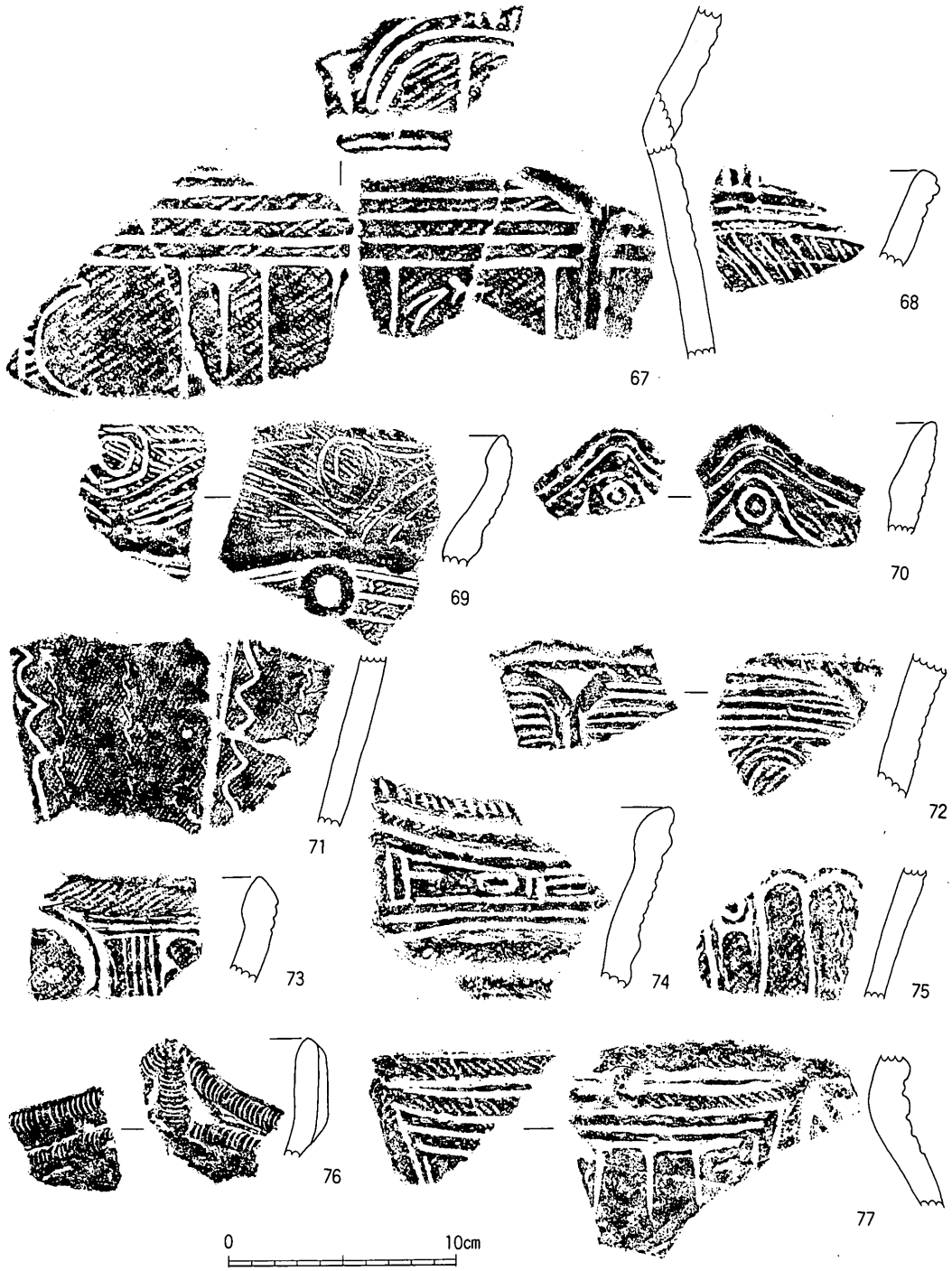


第23図　出土土器(3)

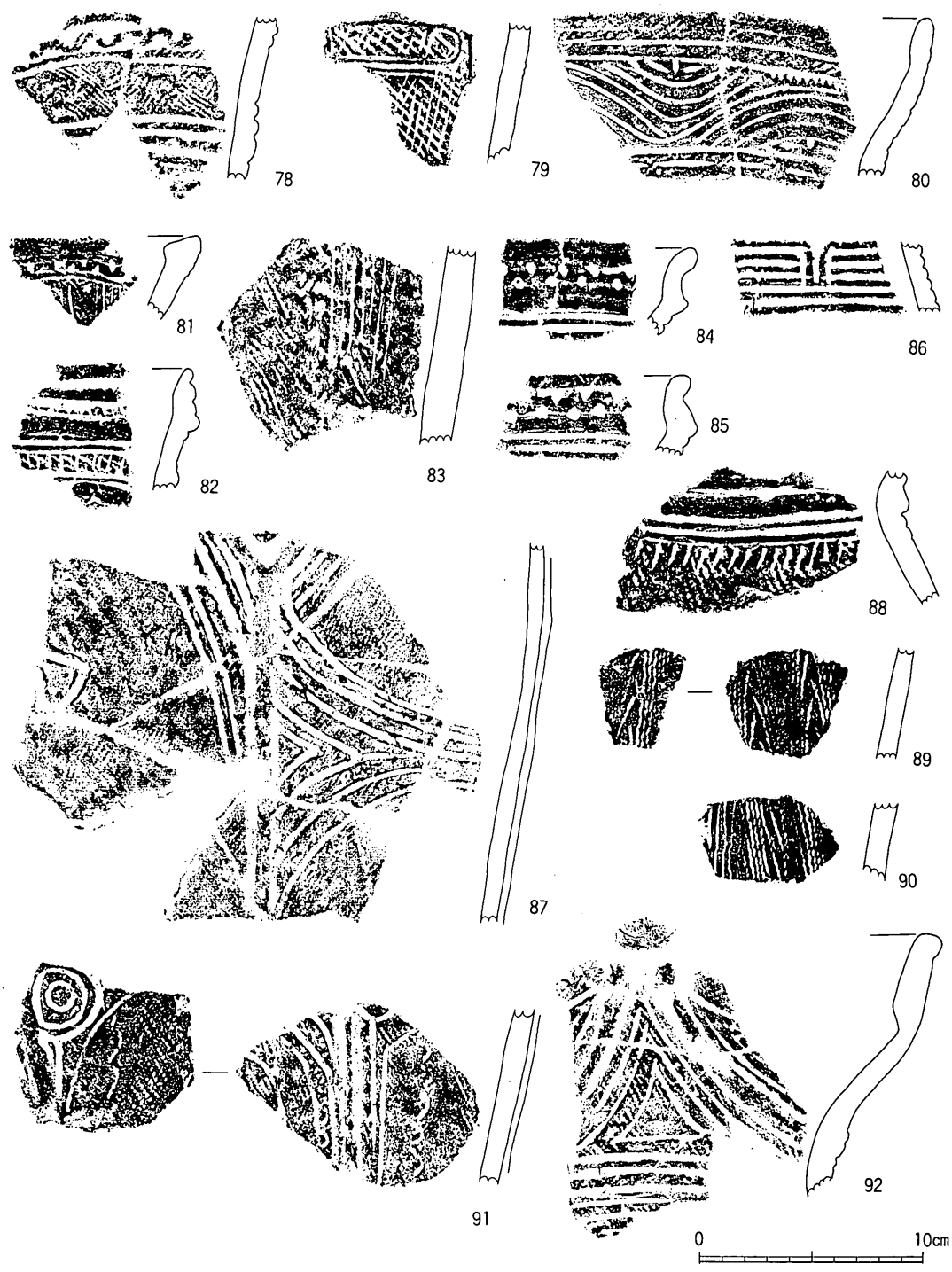
第24図　出土土器(4)


42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0
10cm

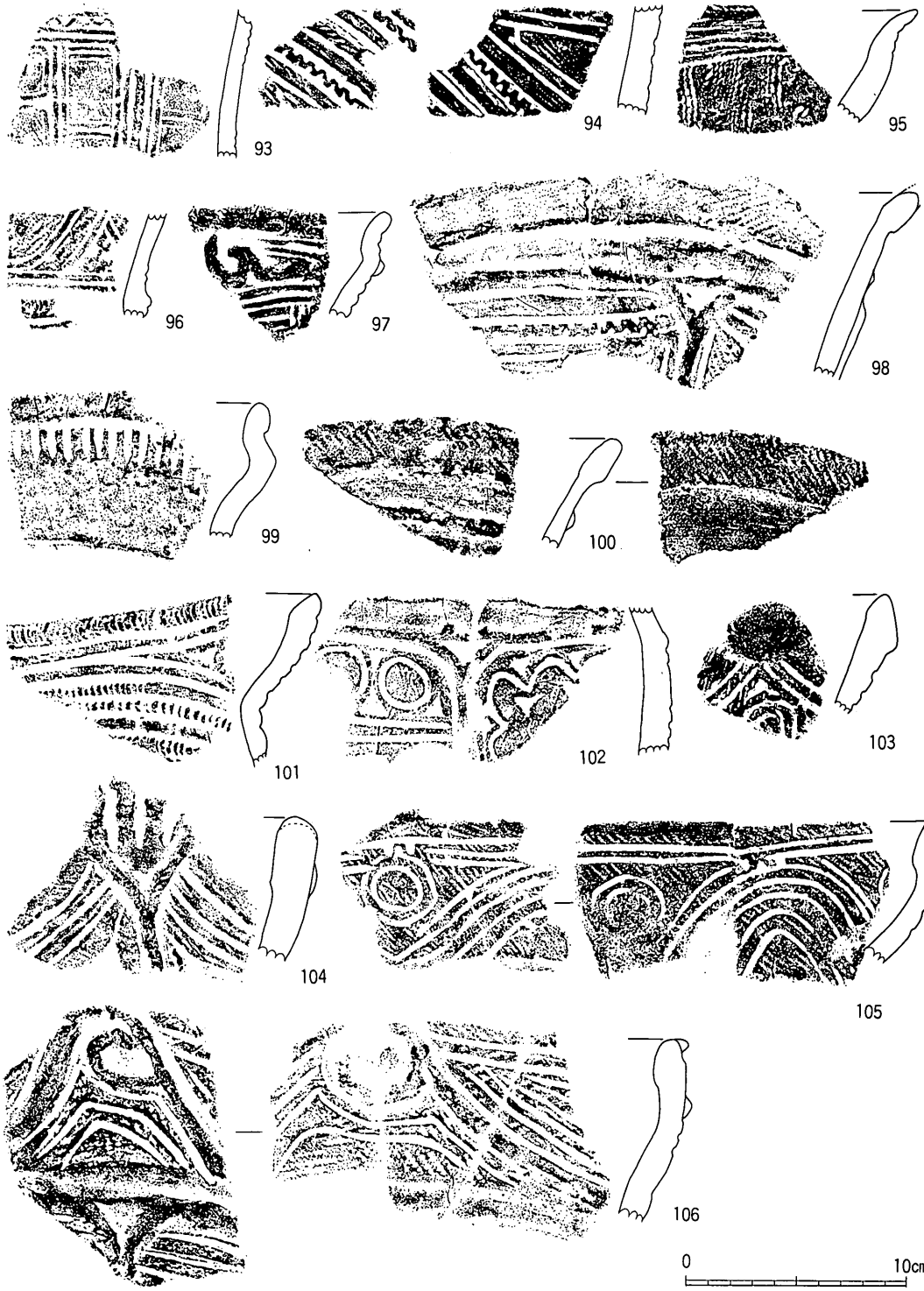
第25図　出土土器(5)



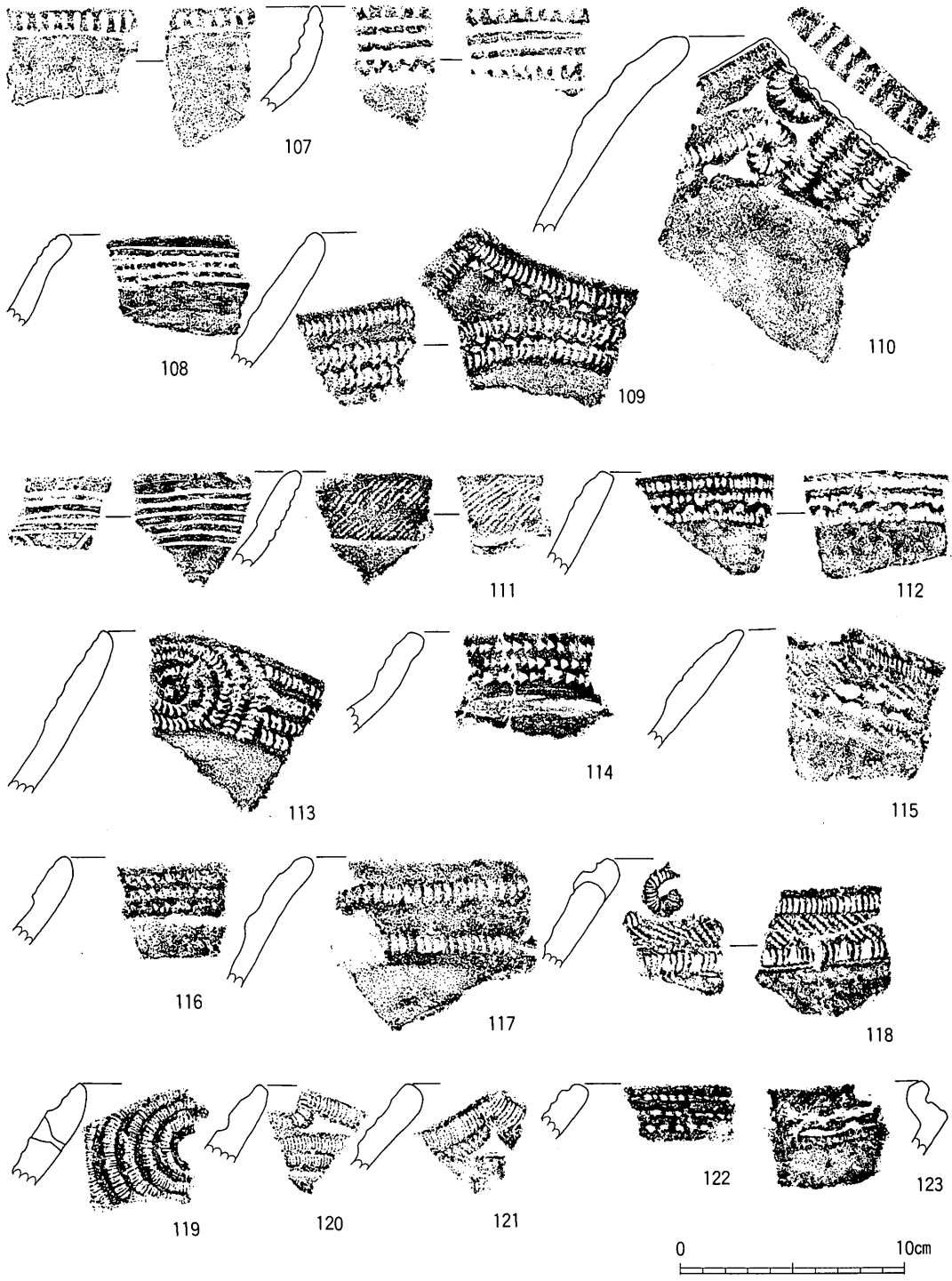
第26図　出土土器(6)



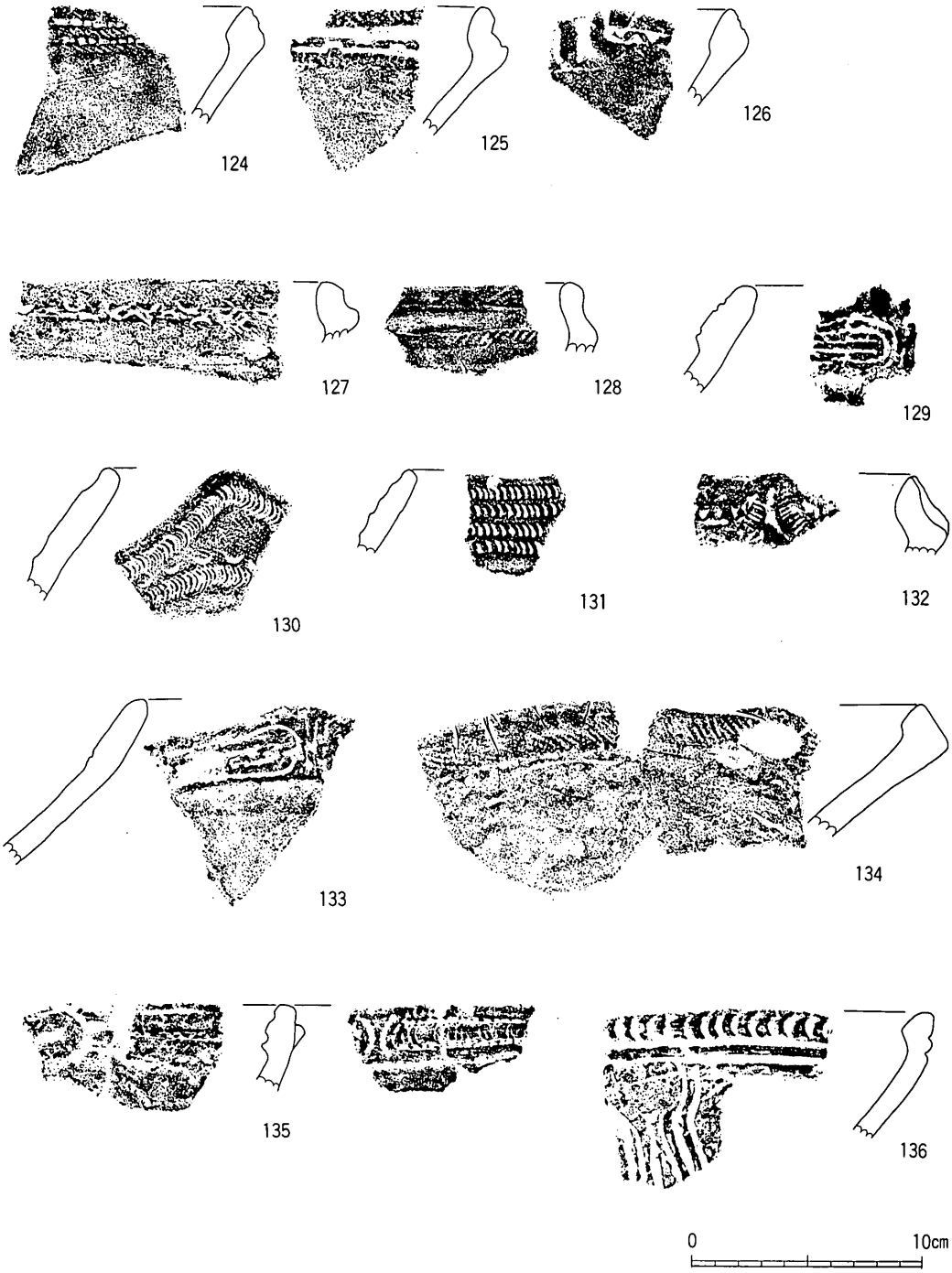
第27図　出土土器(7)



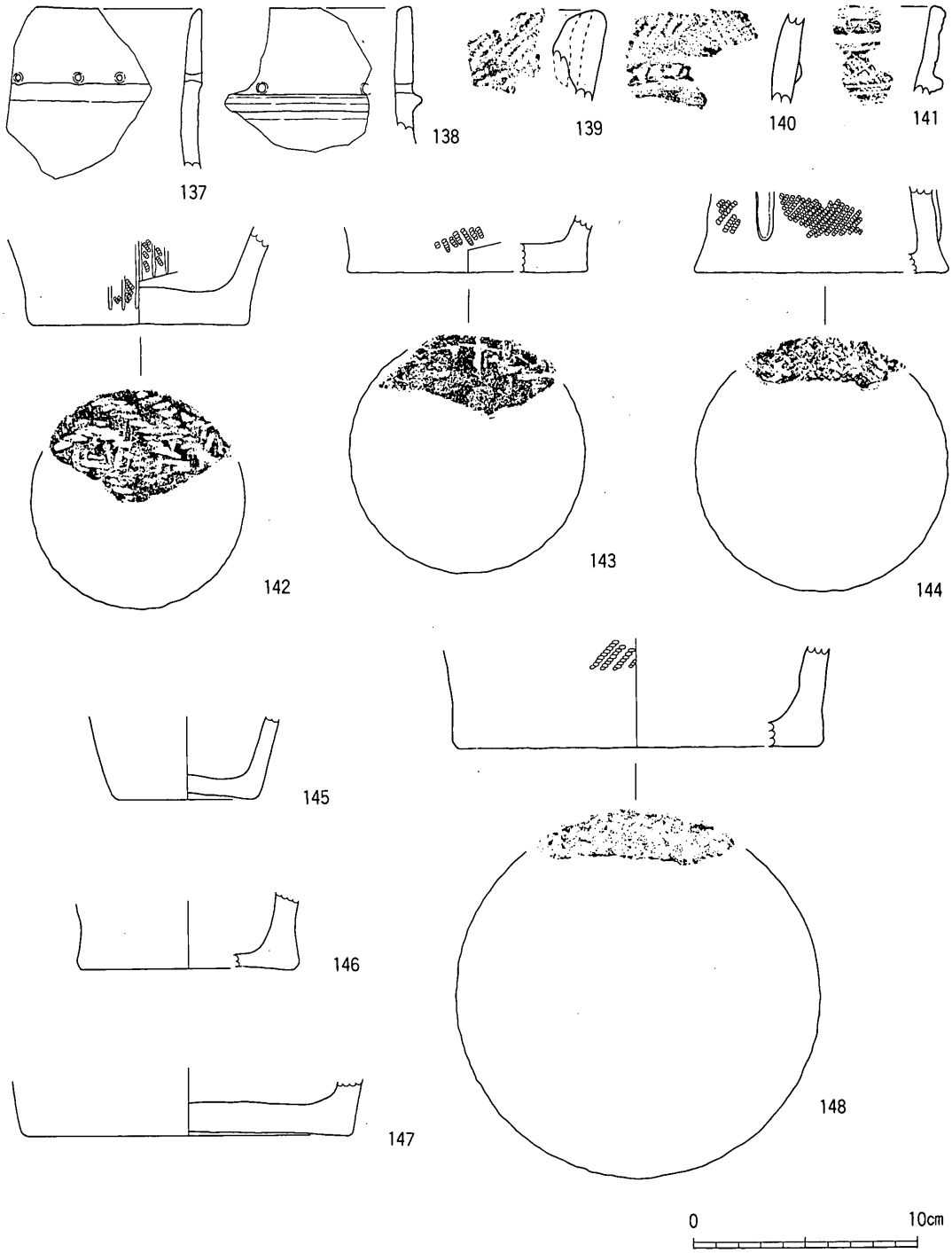
第28図　出土土器(8)


107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
0
10cm

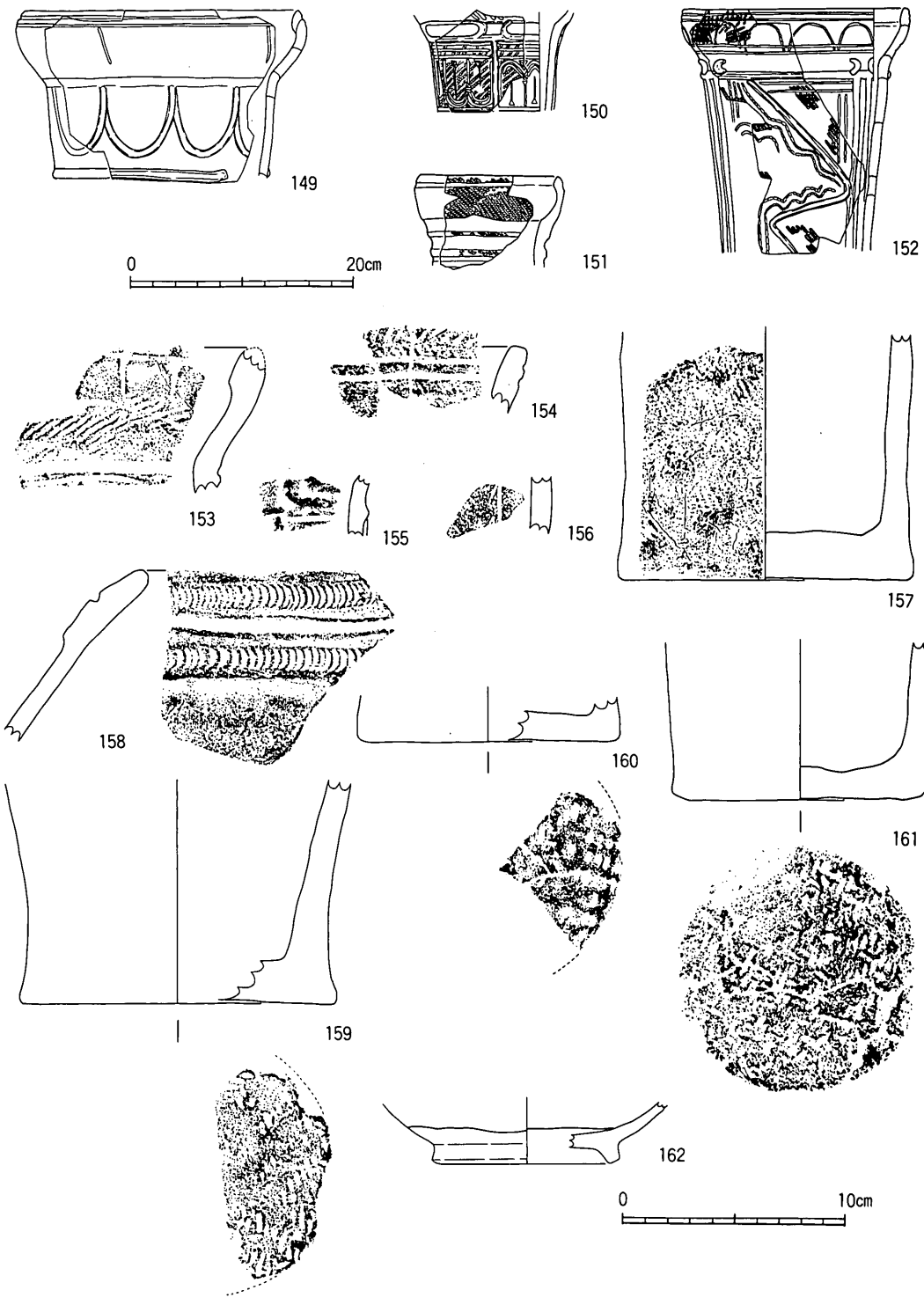
第29図　出土土器(9)



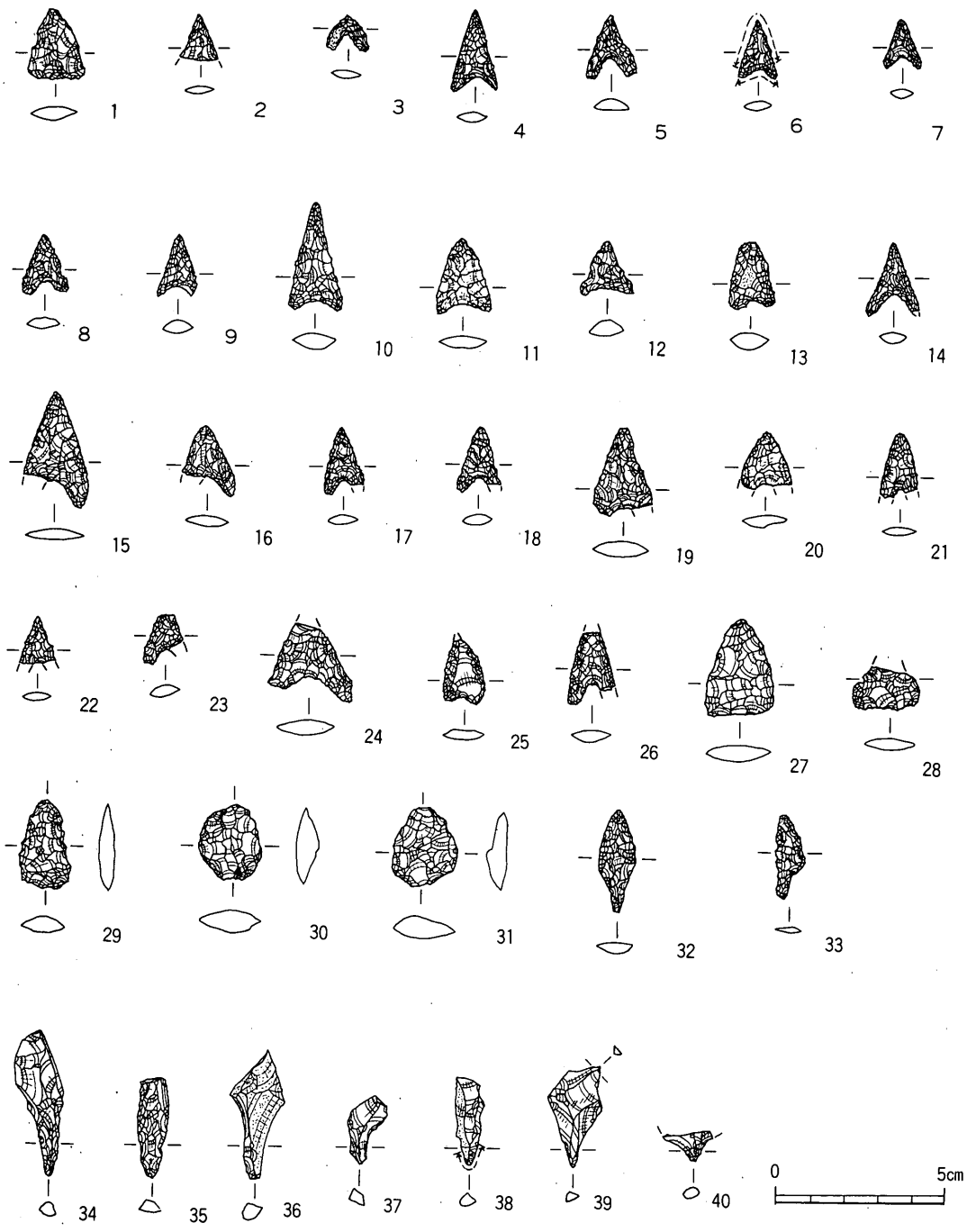
第30図　出土土器(10)



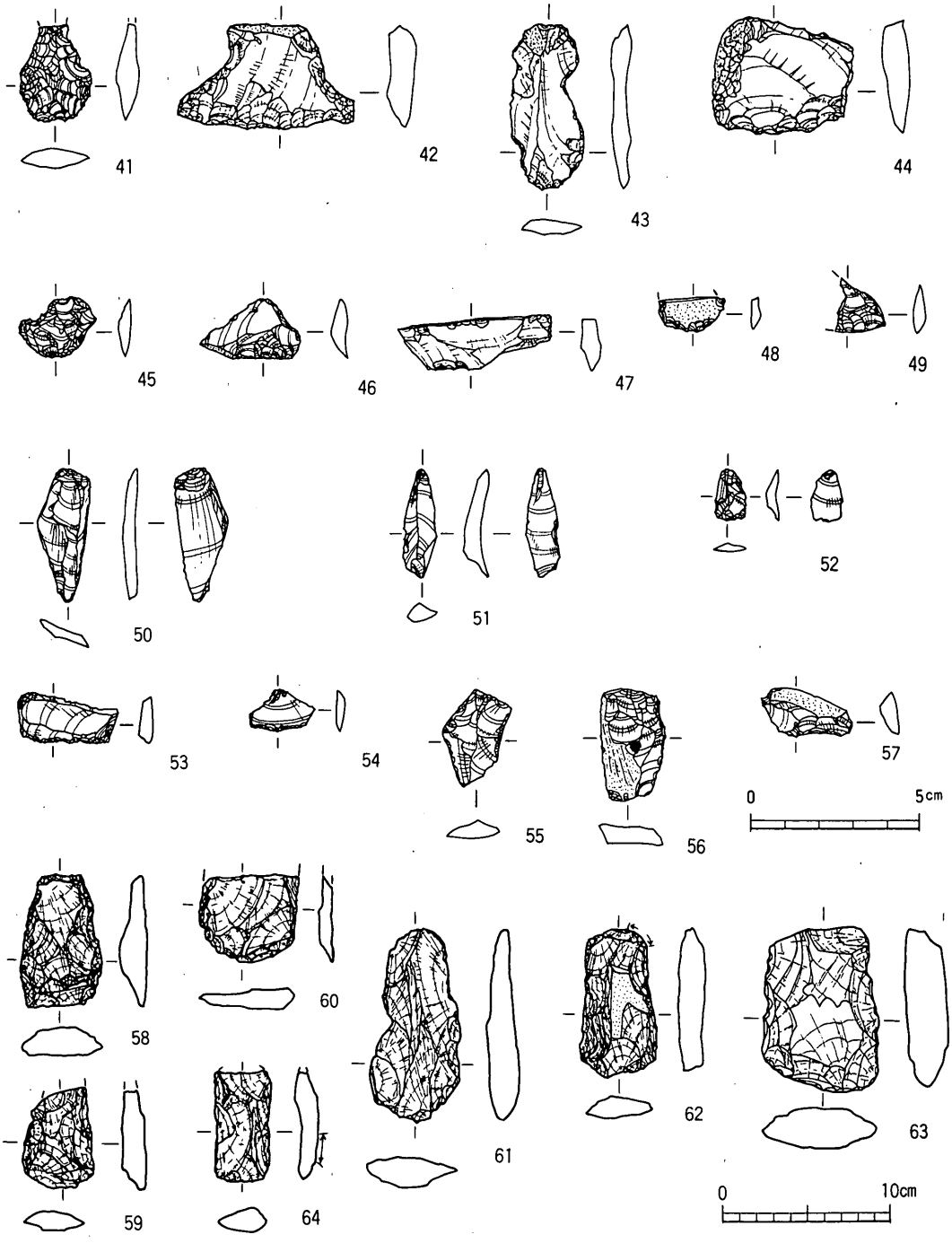
第31図　出土土器(11)


149
150
151
152
0
20cm
153
154
155
156
157
158
160
161
159
162
0
10cm

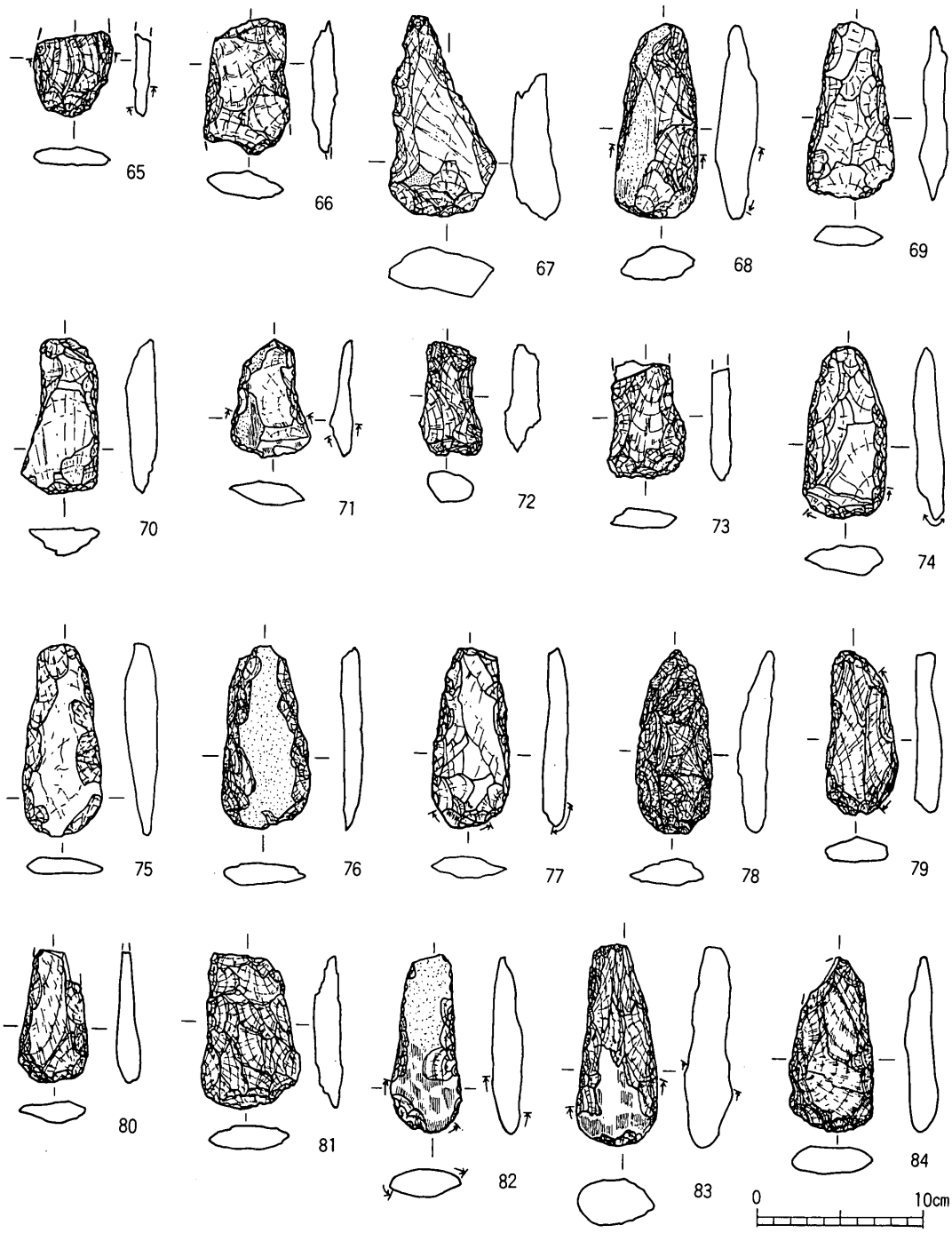
第32図　出土土器(12)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
5cm

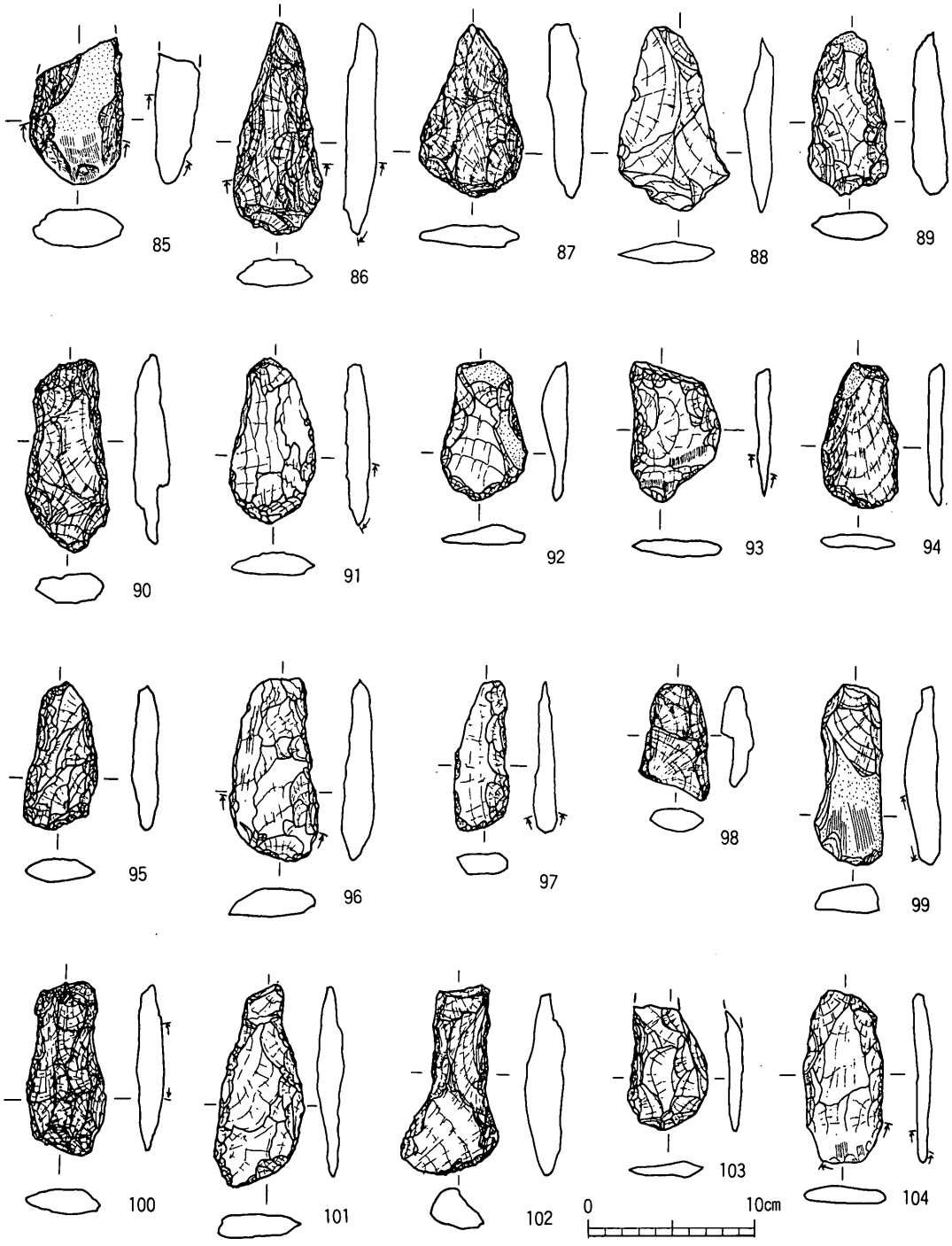
第33図　出土石器(1)


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
5cm
58
59
60
61
62
63
64
0
10cm

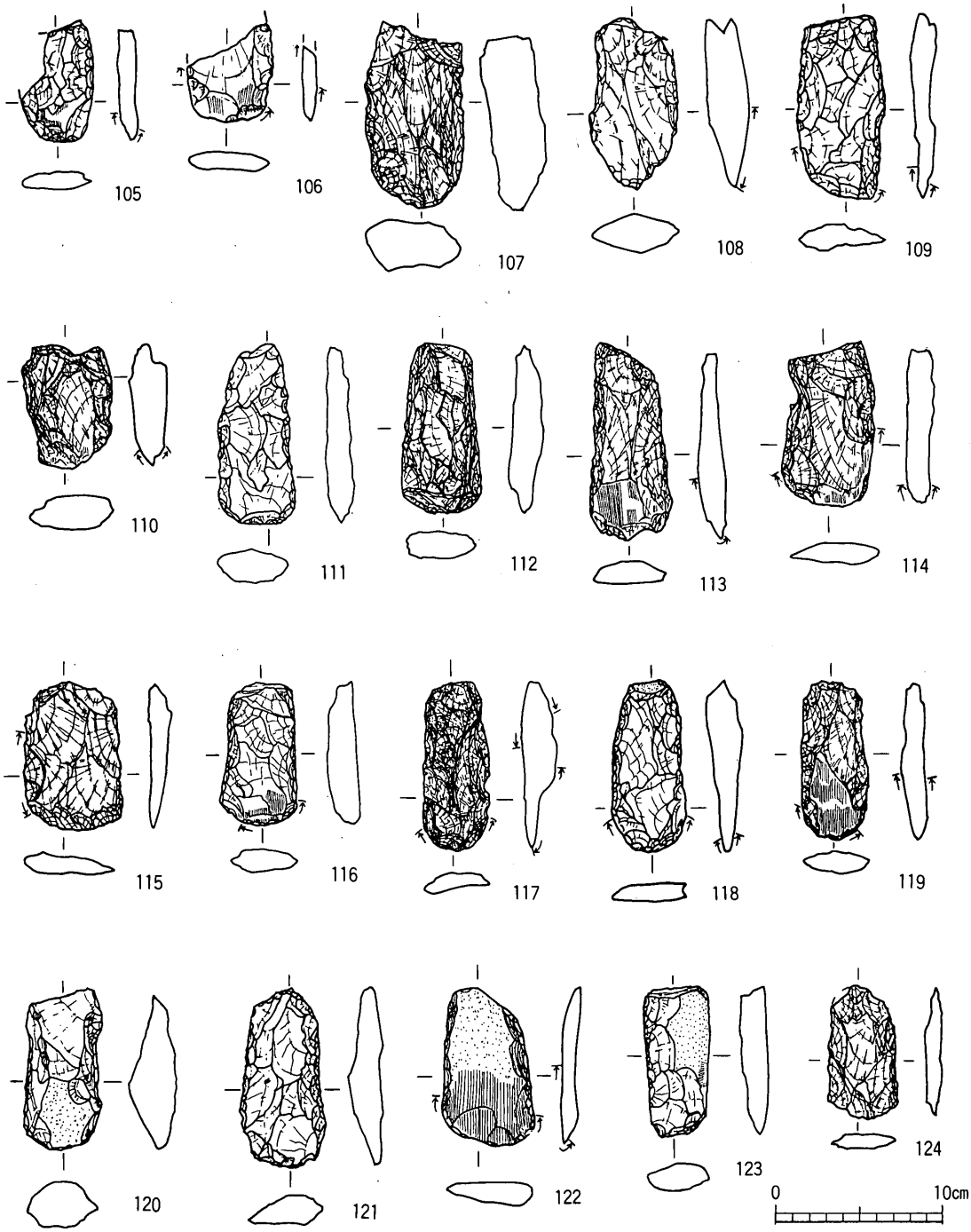
第34図　出土石器(2)



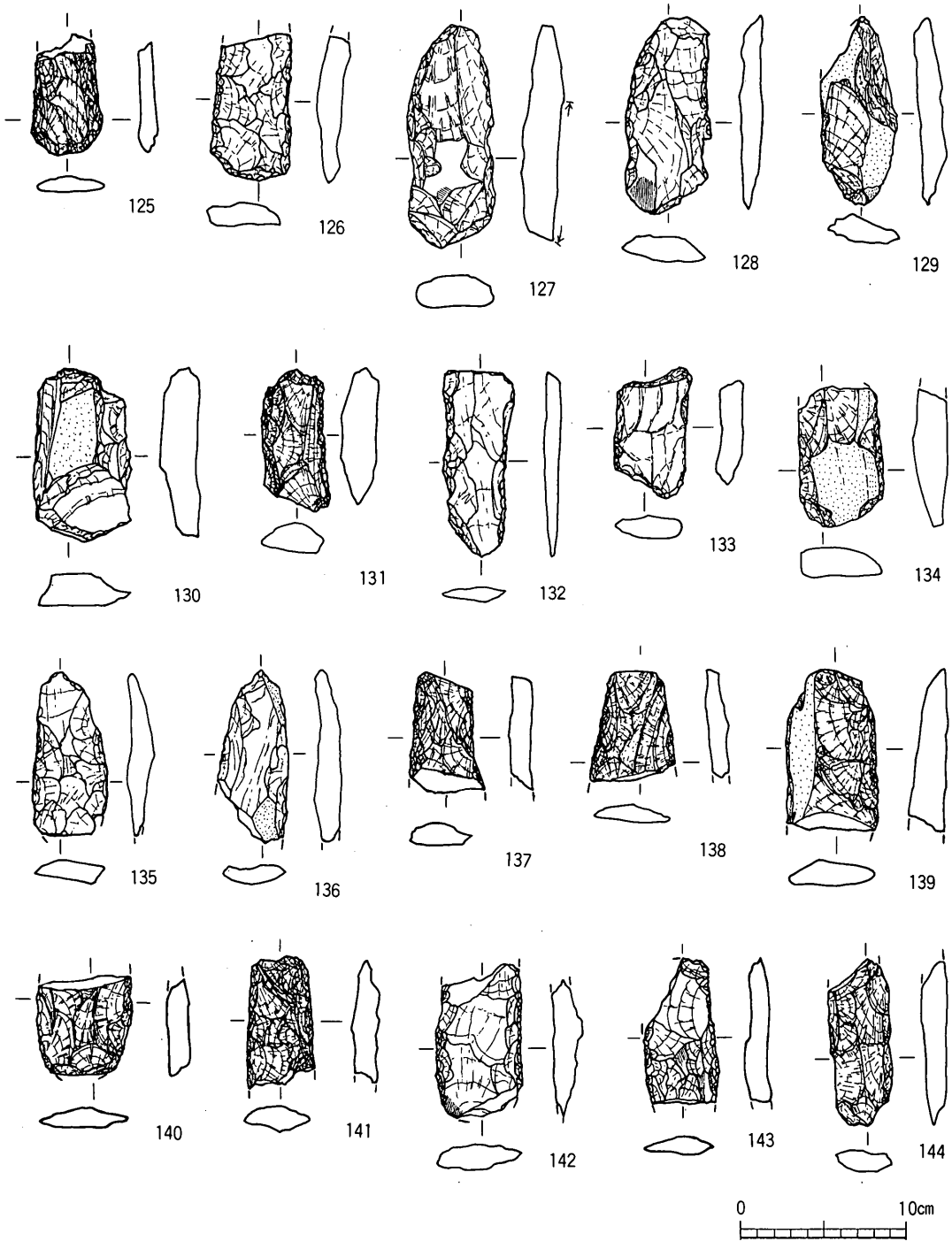
第35図　出土石器(3)


85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
0
10cm

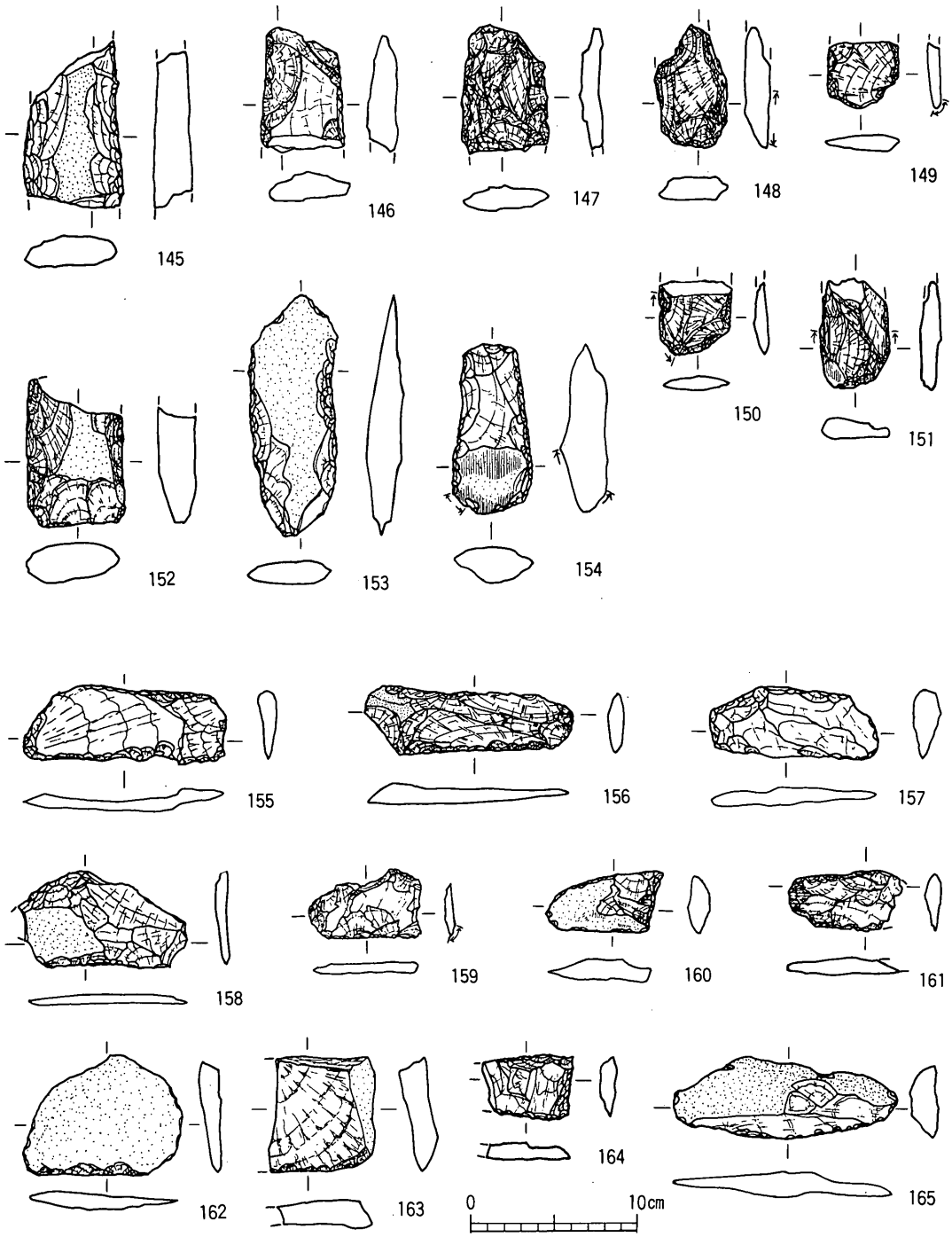
第36図　出土石器(4)


105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
0
10cm

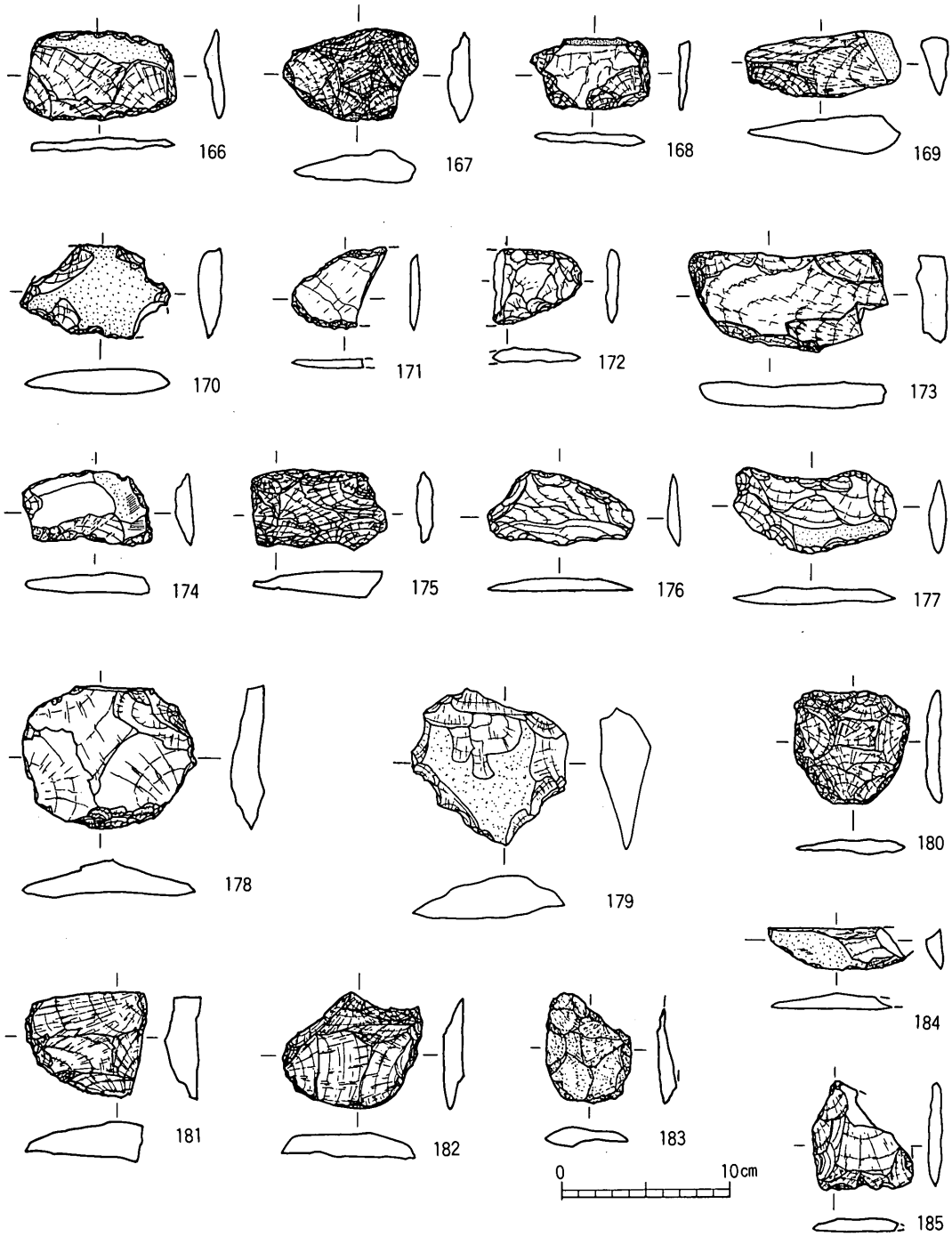
第37図　出土石器(5)


125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
0
10cm

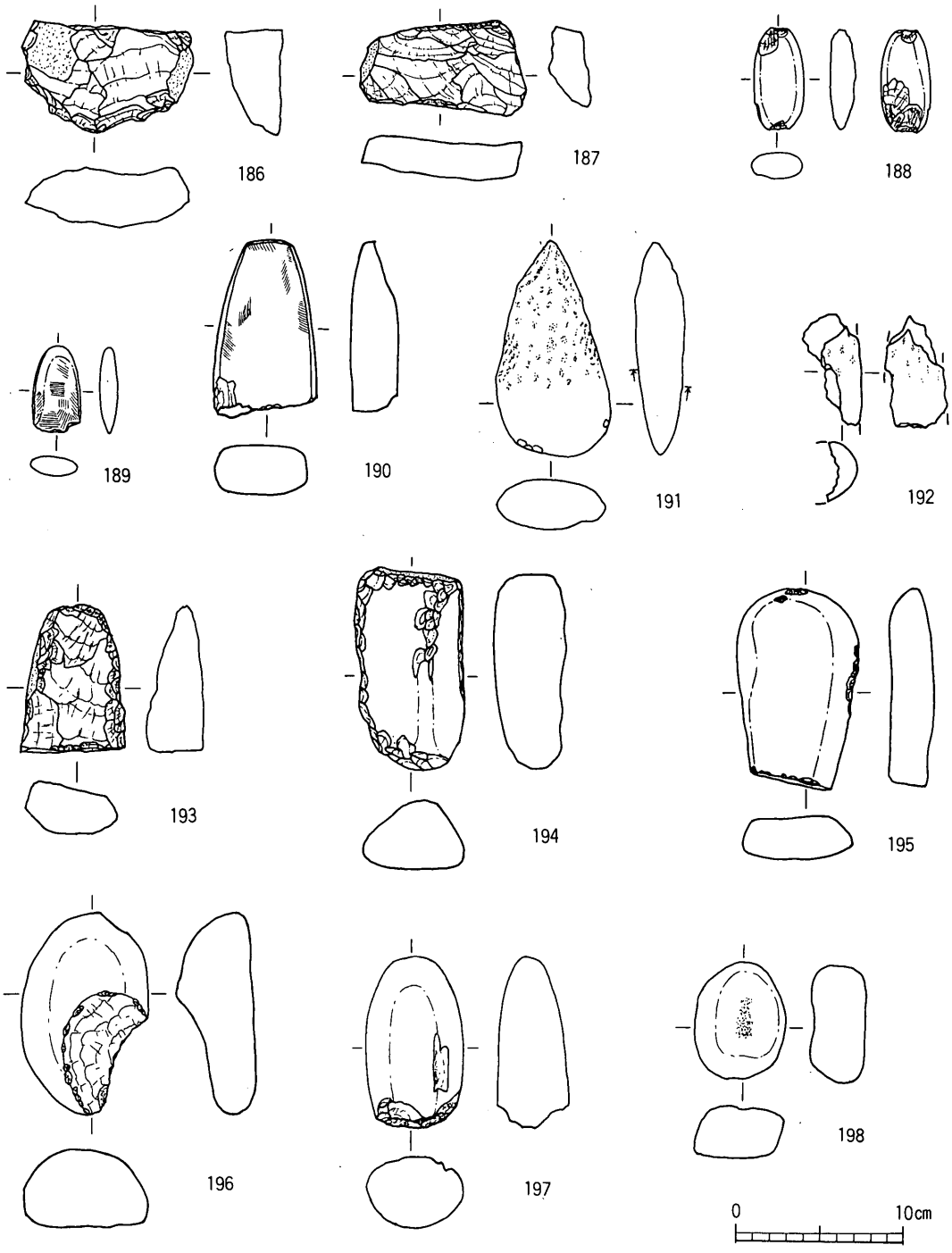
第38図　出土石器(6)


145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
0
10cm

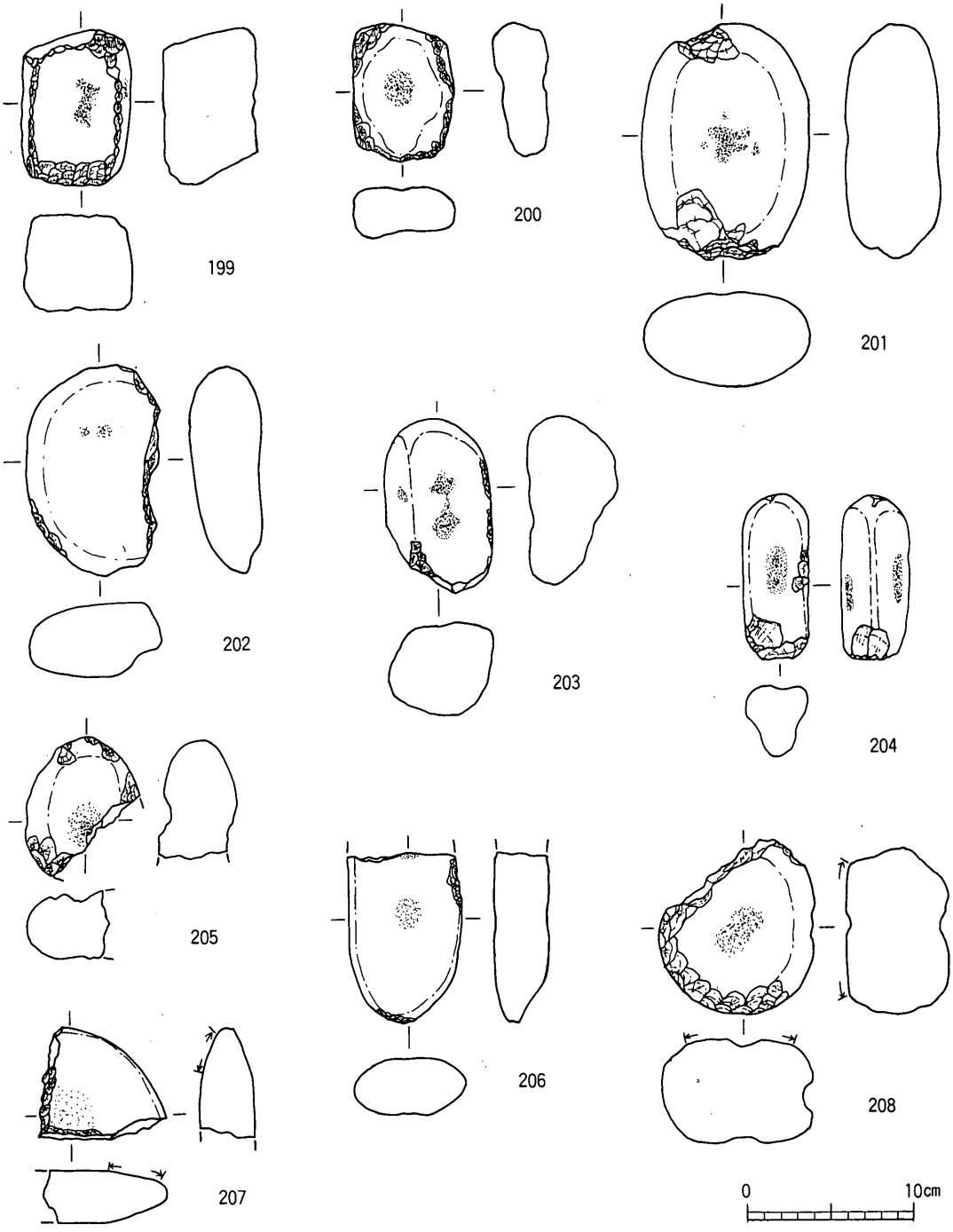
第39図　出土石器(7)


166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
10cm

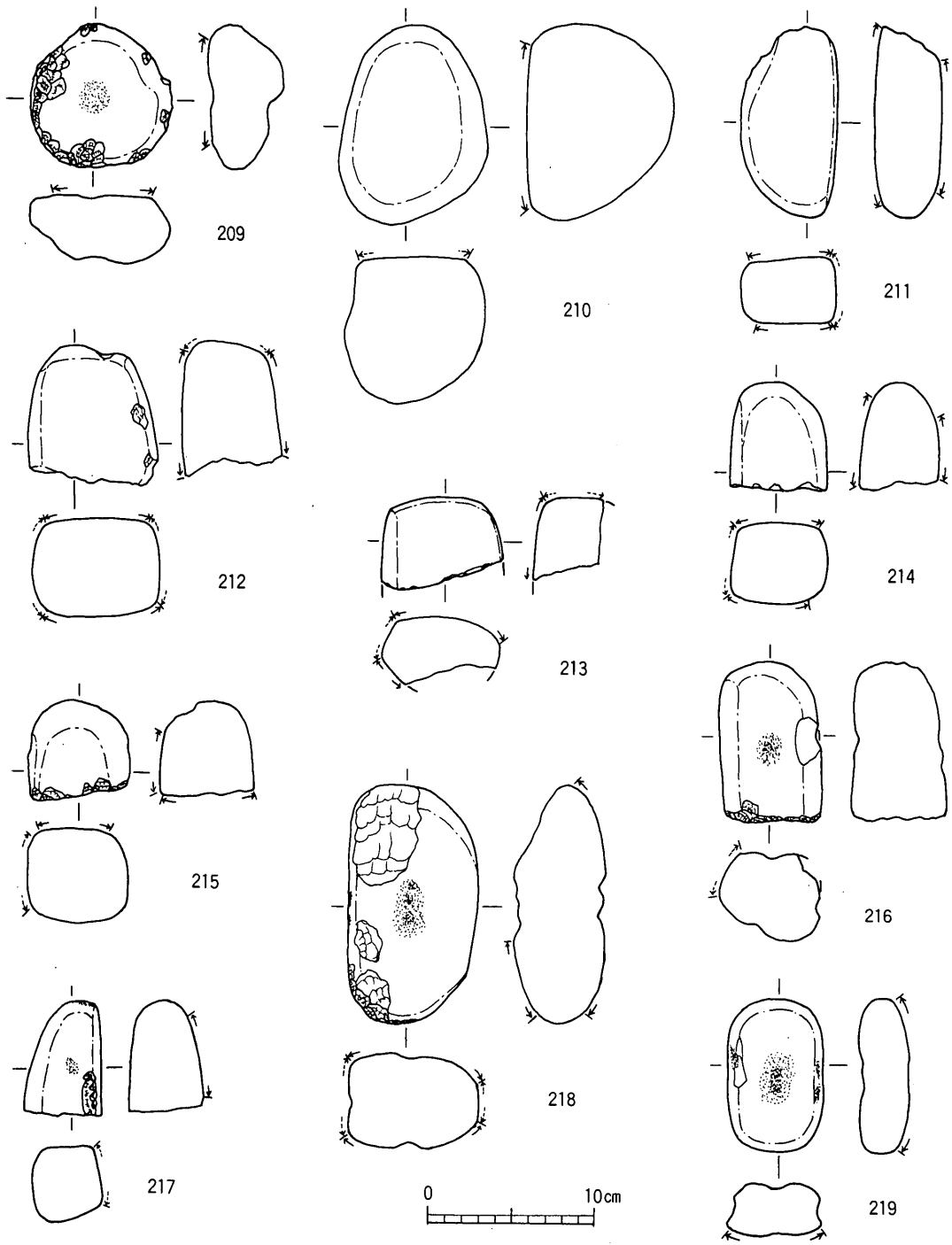
第40図　出土石器(8)



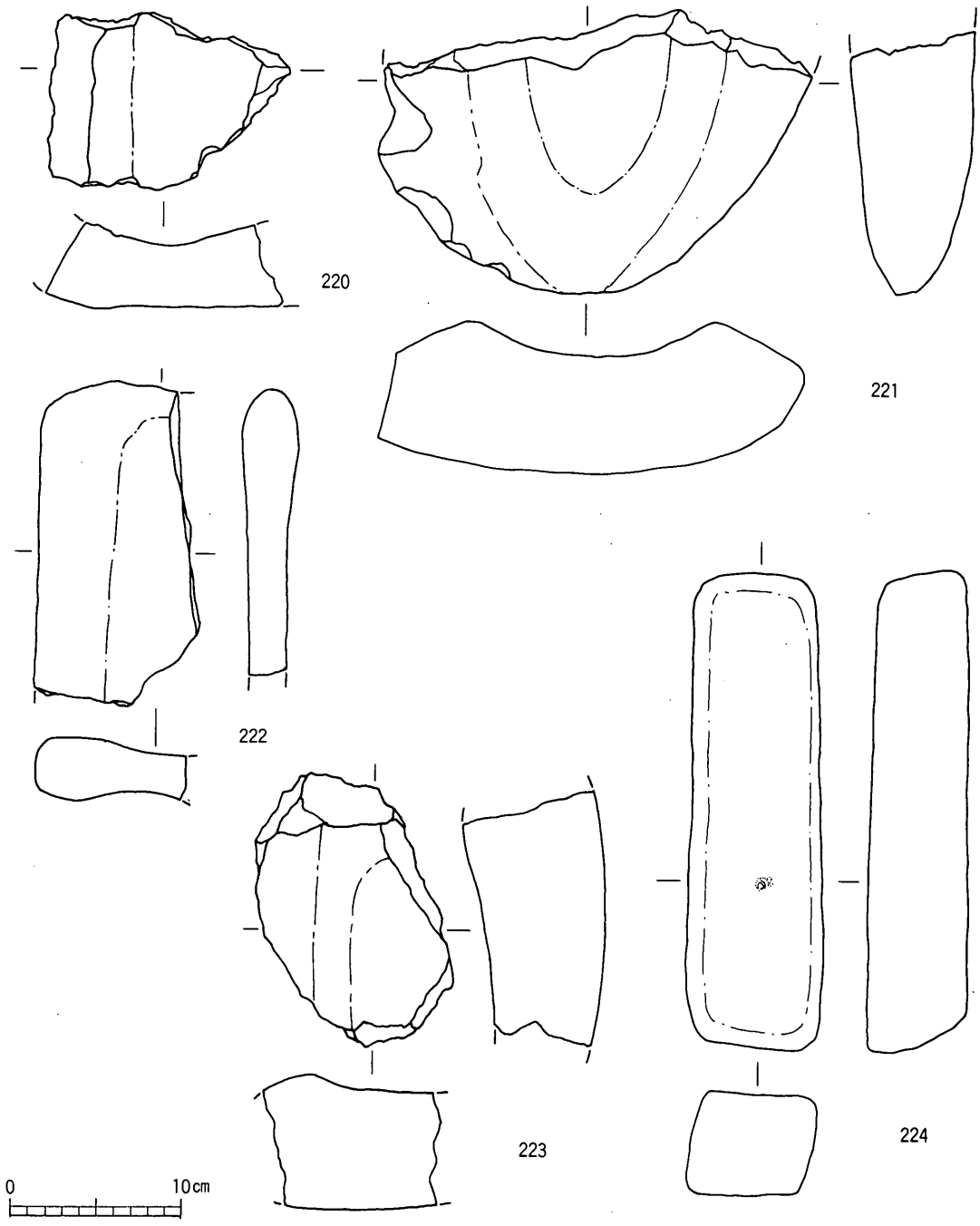
第41図　出土石器(9)



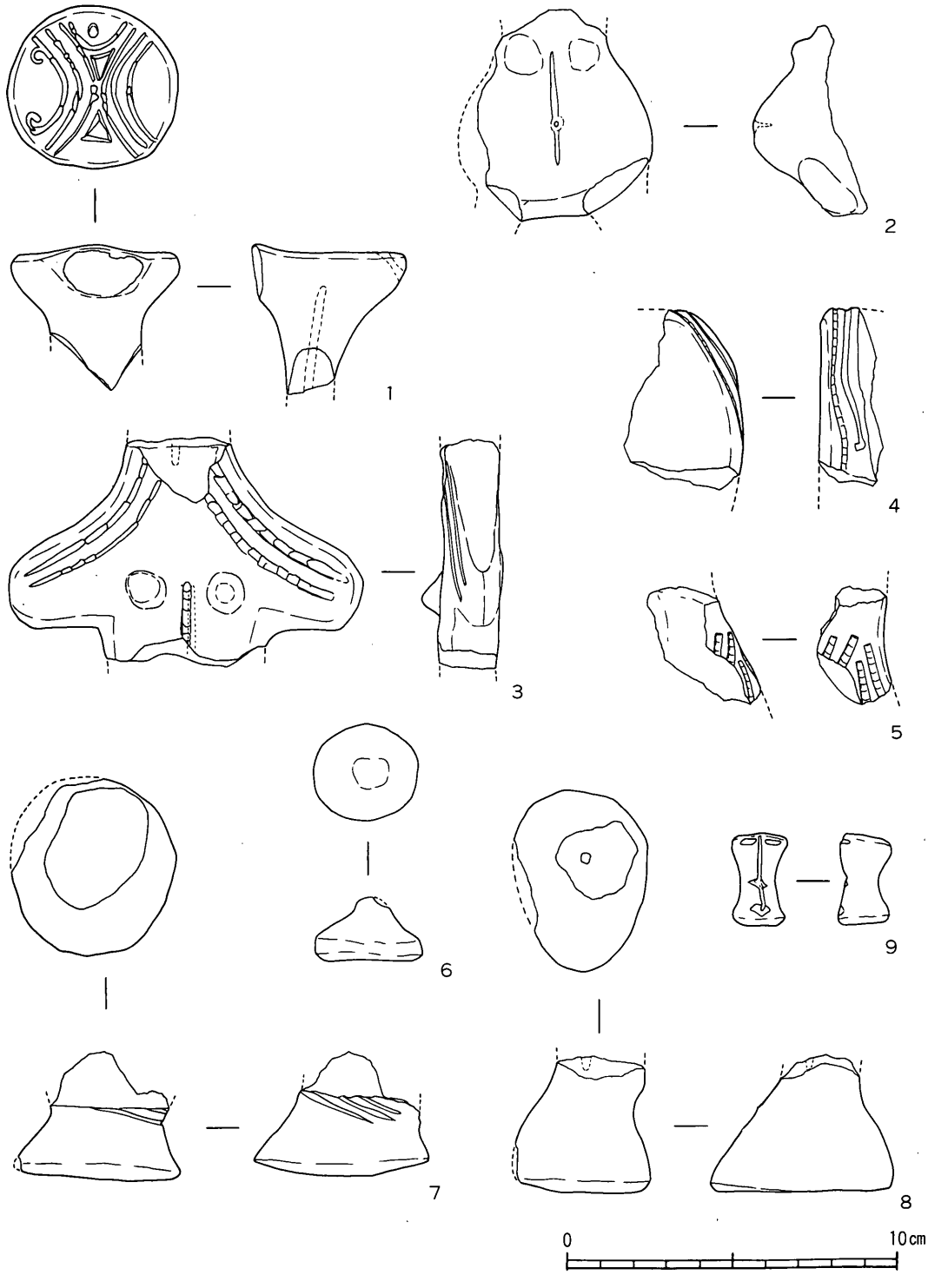
第42図　出土石器(10)



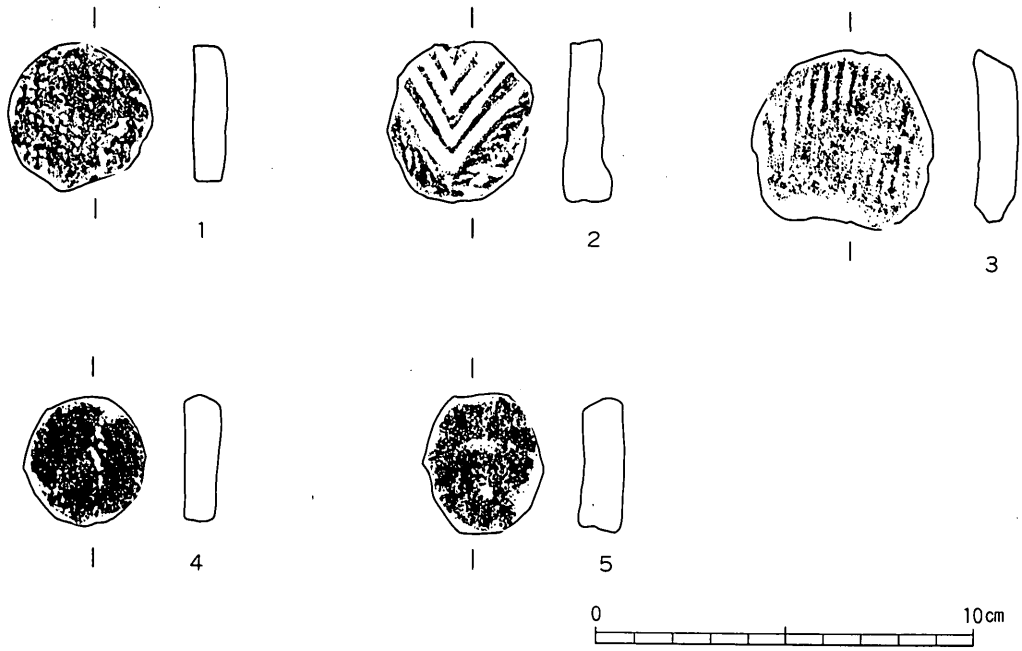
第43図　出土石器(11)



第44図　出土石器(12)



第45図　出土土製品(1)



第46図　出土土製品 (2)

第4章　縄文時代中期における松本平

——牛の川・雨堀遺跡の資料について——

1979年牛の川遺跡、1980、1981年雨堀遺跡第1次、2次調査によって、多量に出土した遺物の主体は縄文時代中期に属するものである。しかし、中期全般すべてを埋めることができるものではないが、長野県の縄文中期編年、唯一である井戸尻編年(藤森他・1964、武藤他・1978)に照し合わせ、土器と共に八ヶ岳山麓における炉形態の変遷(折井・1977)も参考として考えてゆきたい。ここでは両遺跡、住居址、土壙、遺構外一括資料の中から良好な資料を選び、縄文時代中期、九兵衛尾根II式、貉沢、新道、藤内Ⅰ、II、曽利Ⅰ、II、III、Ⅳ、Ⅴ式期併行のものをあつかう。(中にはその式期併行のものでも、古い部分、新しい部分の資料しかないものは、その全様相を述べずそれのみを扱う。また、何々式併行を(　)付けとし縄文時代中期何期とした。良好な資料のない九兵衛尾根Ⅰ式期併行を縄文時代中期松本平Ⅰ期、貉沢式期併行をIII期、井戸尻Ⅰ式期併行をⅦ期、井戸尻III式期併行をⅧ期とした)。

松本平の中期土器の様相を概して、諏訪地方(特に八ヶ岳山麓)と比べて、通して簡単に見ると、中期初頭においては諏訪地方とほとんど変わりなく、中期前葉、中葉においても平出第3類Aの数量の違いなどわずかな違いはあるがほとんど変りが見られない。しかし、中期中葉終末より中期後葉においては、八ヶ岳山麓の曽利式土器(山梨が中心らしい)とは、様相の違った、中期中葉終末～後半前半の所謂「梨久保B式土器」、後葉前半～後半の所謂「唐草文土器」が主流をなす。

以下、土器の番号は報告書に掲載された時のものである。

1)　縄文時代中期、松本平II期(九兵衛尾根II式期併行)

雨堀B地区1号住、雨堀第2次調査、土壙内、遺構外一括廃棄土器群から新しい段階の資料が出土している。器種別に分類して見ると、

深鉢A——円筒形で底部から口縁部に向って直線的に開くもの。(雨2次20)

B——円筒形で底部から口縁部に向ってゆるやかに広がり、口縁部がやや広がるもの。(雨B1住、2・雨2次6、7、8、10)

C——円筒形だが、頸部がややくびれ、口縁部が多少内彎しキャリパー形口縁になるもの。(雨2次1、3・雨B1住1、5)

D——胴部がゆるやかに脹らみ、頸部でくびれ、口縁部が多少内彎しキャリパー形口縁になるもの。(雨2次2、5、15、17)

E——甕形に近い器形で、口縁部は短かく外反し、頸部でくびれ、胴部がゆるやかに脹ら

むもの。（雨２次、９）

浅鉢Ａ――底部から口縁部へ直線的に開くもの。（雨２次、11）

深鉢における底部は、所謂「張り出し底」といわれる、底部縁が外側に張り出すものと、底部から胴部へ開く２種がある。文様帯はほとんど口縁部文様帯と胴部文様帯に区別される。

文様は縄文を地文とし沈線文で施文するものが多く、連弧状や渦巻、Ｙ字状懸垂文、楔状懸垂文、三叉文を描くものが多い。隆帯ではＴ字状、Ｙ字状、蕨状懸垂文を施文するものが多い。中には雨第２次７の様に隆帯の弧線で横帯区画文を構成するものもある。また雨第２次６のごとく隆帯の懸垂文を４単位貼付しその中を沈線で区画するものもある。地文となる縄文はほとんどが口縁部は横位に、胴部は縦位に転がしている。雨第２次２、５の撚糸文は、北陸地方に多い木目状撚糸文の流れを汲むものと思われる。地文が無文のものでは雨Ｂ１住２、雨第２次８のごとく細く角ばった結節沈線を施文したⅢ期の先駆的文様を配するものもある。雨第２次６、７の土器はおそらく、雨Ｂ１住２の部類の土器に区画文の類似、器形の類似などから前者から後者へ変化したものと考えられる。

雨Ｂ１住の一括資料はⅡ～Ⅲ期への過渡期、関東でいう五領ヶ台式直後（佐藤、1974）、阿玉台直前型式（西村、1972）にあたる良好な資料で、雨第２次、一括廃棄土器の大半はその一段階手前のものと考えられる。県内の同時期の遺跡として、岡谷市船霊社、原村大石、茅野市頭殿沢等がある。

別系統の土器として、北陸系の土器が、雨堀２次調査で出土している。

この時代の住居址資料は雨Ｂ１住しかなく、今のところは地床炉のみであるが、埋甕炉も存在したと思われる。

2）　縄文時代中期、松本平Ⅳ期（新道式期併行）

牛の川Ｂ地区６号住居址、雨堀Ａ地区６号住居址から出土している。

器種別に分類してみると、

深鉢A_1――円筒形で口縁部に向って直線的に開くもので高さが高いもの。（牛Ｂ６住４、５、18、雨Ａ６住、９）

深鉢A_2――円筒形で口縁部に向って直線的に開くもので高さが低いもの。（雨Ａ６住２）

Ｂ――円筒形で底部から口縁部に向ってゆるやかに広がり、口縁部が開くもの。（牛Ｂ６住１、９）

C_1――底部から口縁部に向ってゆるやかに口縁部がやや内彎する。（牛Ｂ６住３、８、雨Ａ６住３、４）

C_2――底部から頸部に向ってゆるやかに開き、口縁部が大きく外反し、内彎するキャリパー形になる。（牛Ｂ６住６、７、雨Ａ６住５）

C_3――底部から頸部に向ってゆるやかに開き、頸部で外反し、口縁部がやや内彎するもの。

（雨Ｂ２住２）

C_4――C_3とほぼ同じ器形であるが、頸部で外反し、口縁部が大きく内彎するもの。（雨Ｂ２住１、牛Ｂ６住19、雨Ａ６住８）

E_1――胴部はゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、口縁部が多少内彎するもの。（雨Ａ６住、７）

E_2――胴部はゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、口縁端部が直立及びやや内傾するもの。（牛Ｂ６住11）

Ｆ――胴部中半部でくの字的に大きく脹らみ、頸部から口縁部に向って外反し口縁部がやや内彎し、キャリパー形になるもの。（雨Ａ６住６）

浅鉢は見られないのではぶく。

文様帯はほとんど頸部付近で口縁部文様帯、胴部文様帯に区別されるが、雨Ａ６住６のごとく文様帯を区別しがたい縦位の区画文や文様帯の区別できないものもある。また雨Ａ６住６、Ｂ２住２のごとく、底端部まで施文するものも見られる。文様構成では、三角状及び弧線状、楕円状の横帯区画文を構成するものが多くなる。また、縦位区画文を構成するもの（雨Ａ６住６、牛Ｂ６住19）、横帯区画文、縦位区画文の両者で構成するもの（雨Ｂ２住２）や抽象文を構成するもの（雨Ａ６住８、９）、抽象的把手、突起をもつもの（雨Ｂ２住１、２、牛Ｂ６住６）などが見られる。文様では、地文に縄文を施文するものの数量は減少し、区画文内や隆帯添いには、＜状の結節沈線、連続する刺突文、縦位及び斜行沈線を充塡、施文する。他には、波状の沈線、結節沈線等を施文している。キャタピラ状の結節沈線を施文したＶ期の先駆的文様もある。雨Ｂ６住７は棒状工具か半截竹管状工具の背による沈線、牛Ｂ６住11は半截竹管状工具による二条一組の沈線の施文である。両者共器形は平出第３類Ａに類似するが平出３類Ａとは胎土、器厚がやや異なるし、雨Ａ６住７などは施文工具も異なるが、施文されたモチーフ、器形などから、平出３類Ａの系譜をひくものと考えられる。雨Ａ６住６の器形、半截竹管状工具腹面を強く当てて引く沈線（半隆起線文）及び区画文、雨Ｂ２住２の胴部文様帯下半の半截竹管状工具腹面を強く当てて引く沈線及びその区画文の形状は、北陸地方の土器系統（上山田古式）の影響を受けたものと思われる。特に雨Ｂ２住２の胴部文様帯下半の区画文は、北陸系統の手法と類似する。牛Ｂ６住４、７、８、15、はⅢ期的な様相の細く角ばった結節沈線を残している。特に８はⅢ期の手法そのままであり、牛Ｂ６住の土器群はⅣ期の古い部分と考えられる。雨Ｂ２住は２個体のみではっきりしないが標準タイプと思われる。雨Ａ６住９は、Ｖ期に多く見られる土器で新しい手法である口縁部文様帯に縄文を施文し、一部分を円や楕円形に磨り消し、胴部文様帯に抽象文が施文され、キャタピラ状結節沈線が施文した土器である。おそらく雨Ａ６住はⅣ期でもやや新しい部分の土器群と考えられる。

この時期の炉は牛の川Ｂ６住、Ｂ８住、雨堀Ｂ２住が４つの石を組み合わせた小さな石囲炉で、Ａ６住が周辺に石を３箇もつ地床炉である。他に中信地区の同期の炉としては塩尻市平出遺跡へ

号住、ワ号住、塩尻市中島遺跡2号住があり平出ヘ号住は周囲を7箇の礫で囲った埋甕炉、ワ号住は埋甕炉、中島2住は小さい規模の石囲炉であるので石囲炉、地床炉、埋甕炉が併存していたと考えられる。

3) 縄文時代中期、松本平Ⅴ期（藤内Ⅰ式期併行）

牛の川9号住居址から出土している。

器種別に分類してみると、

深鉢A——円筒形で口縁部に向って直線的に開くもの。（牛9住9、10、38、40、41、42）

B_1——円筒形で口縁部に向ってゆるやかに開くもの。（牛9住39、47）

B_2——B_1と同形だが口縁部が大きく開くラッパ状のもの。（牛9住6、7）

B_3——B_2と同形だが底部直前でやや屈曲し、底部に至るもの。（牛9住35、36）

C_1——底部から口縁部に向ってゆるやかに開くB_1的な器形であるが、口縁部がやや内彎するもの。（牛9住2、8、14、23、26、34、52）

C_2——C_1と同形だが口縁部が大きく開き、口縁端部が内傾するもの。（牛9住45、51）

C_3——C_1と同形だが口縁部が内彎するもの。（牛9住1、4、5、11）

C_4——C_3と同形だが、底部直前で張り出し、屈曲し底部に至るもの。（牛9住21、22、24、25、37）

D——胴部はゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、口縁部が内彎するもの。（牛9住3）

E——胴部はく字状に脹らみ、頸部で外反し、口縁部が内彎するもので、台付のものもある。（牛9住16）

F_1——胴部はゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、口縁端部が直立するもの。（牛B9住50）

F_2——胴部はゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、頸部～口縁部の中半で屈曲し、口縁部が直立及び、内傾するもの。（牛B9住12、13、27）

浅鉢A——底部から口縁部に向って開き口縁部が内彎するもの。（牛B9住54、55）

B——底部から口縁部に向って開き口縁部がくの字状に内傾するもの。（牛B9住53、54）

他に有孔鍔付土器、器台がある。

文様帯はほとんどが頸部で口縁部文様帯、胴部文様帯に区別されるが、胴部文様帯が2分されるもの、口縁部文様帯、胴部文様帯が同一で区別されないものもある。文様構成は三角状及び大きな波状、楕円状の横帯区画文で構成するもの、縦位区画文を構成するもの、抽象文を構成するものが多くなる。ミミズク状の抽象的把手をもつものも多くなる。文様では、地文に縄文を施文する比率は前時期とほとんど変化がない。区画文内、隆帯に添い、キャタピラ状の結節沈線、縦位及び斜行沈線等を充填、施文している。牛B9住50は平出第3類Aと呼ばれる土器で、牛B9住、12、13、27は所謂「蒸し器」（武藤、1965）と呼ばれる土器で直立するか、内傾する口縁部の長さが50とは異なるのであるが、形状は似かよっているので、武藤氏の述べられているごとく、

前者から後者へ変化したものと考えられる。牛Ｂ９住51、52は沈線及び半隆起線で曲線や渦巻文を強く施文した土器で、馬高式系の土器と考えられている土器であるが、器形、文様のモチーフ、施文状態などから見て、北陸地方でも富山県、石川県に分布する上山田式、天神山式系統の影響を受けた土器と考えられる。52は特に半隆起線文で施文され、手法、モチーフ（把手は異なる）は類似する。牛の川Ｂ９住の土器群はⅤ期の標準的資料である。

この時期の炉は、牛の川Ｂ９住がⅣ期よりやや大きい方形石囲炉である。他に中信地区の同期の炉として、波田町葦原遺跡（1980年）１住、３住に同程度の石囲炉が見られる。埋甕炉は中信地区においてはまだ検出されていない。おそらく、石囲炉が多くなりはじめる時期と考えられる。

4） 縄文時代中期、松本平Ⅵ期（藤内Ⅱ式期併行）

雨堀Ａ８号住居址から出土している。

器種別に分類してみると、

深鉢A_1――円筒形で口縁部に向って直線的に開くもの。（雨Ａ８住、18、22）

A_2――円筒形で口縁部に向って直線的に開き、口縁端部が内傾するもの。（雨A8住20）

A_3――A_1と同形だが胴部～口縁部がやや内彎する。（雨Ａ８住21、26）

B_1――円筒形で口縁部に向ってゆるやかに開く。（雨Ａ８住８）

B_2――B_1的な器形であるが底部直前でやや屈曲し底部に至るもの。（雨Ａ８住17）

C_1――円筒形だが頸部でゆるやかに外反し、口縁部が内彎するもの。（雨Ａ８、27）

C_2――C_1的な器形であるが、口縁部がやや内彎し、底部直前で丸みをもって屈曲し底部に至る。（雨Ａ８住６、９）

C_3――C_2的な器形であるが、口縁部が大きく内彎する。（雨Ａ８住）

C_4――C_3的な器形であるが、胴上半部がゆるくくびれ底部直前で大きく張り出し屈曲して底部に至る。（雨Ａ８住24）

C_5――底部～頸部へ直線的に開き、頸部で外反し口縁部が短かく、内彎するもの。（雨A8住11）

C_6――C_5的な器形であるが、底部直前で張り出し屈曲して底部に至る。（雨Ａ８住２、3、4）

D_1――胴部がゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、口縁部がゆるやかに内彎するもの。（雨Ａ８住５）

D_2――胴部がゆるやかに脹らみ、頸部でゆるやかに外反し、口縁部が内彎するもの。（雨Ａ８住25）

E_1――底部から胴中半部に向って広がり、胴中半～頸部が直立及びやや内傾、やや外傾し、頸部で外反し、口縁部がやや内彎するもの。（雨Ａ８住13、19）

E_2――胴上半部が丸く脹らみ、頸部で外反し、口縁部が内彎するもの。（雨Ａ８住14）

F_1――胴部は円筒形に近いが、極わずかに脹みをもち、口縁部に向って広がり、口縁端部

が直立する。(雨A8住16)

F_2——胴部はゆるやかに脹らみ、頸部で大きく外反し、口縁端部が直立するもの。(雨A8住12)

浅鉢は見られないのではぶく。

底部は底部直前で屈曲し底部に至る、屈折底が多くなる。

文様帯は、口縁部文様帯と胴部文様帯に区別されるものが多いが、雨A8住3、4の様に口縁部、頸部、胴部文様帯の3文様帯に区別されるもの、6の様に文様帯の区別できないものも見られる。口縁部は隆帯が2、3本貼付されるのみで無文帯となるものも多くなる。文様構成は、大きな波状、楕円状、弧状の横帯区画文で構成するもの、抽象文を構成するものが多くなり、縦位区画文は消滅してしまう。文様では、縄文が地文となるものがわずかに多くなり、縄文でも斜位に縄を回転させて撚糸文風に縄文が縦位に並ぶように施文しているものも現われる。区画文内は縦位の沈線を充填するものが多く、縦位の沈線間に刺突文横位、斜位の短かいヘラ切り沈線を施すものも見られる。またD字状の結節沈線文を施すものも見られる。深鉢E_1、E_2の所謂「蒸し器」の器形の胴上半部には、楕形文が現われる(雨A8住13、14)。27はV期同様、北陸地方の上山田式、天神山式の影響を受けた土器である。雨堀A8住の土器群はVI期の標準資料である。

この時期の炉は、雨堀A8住が8箇の石を埋め込み並べた円形石囲炉である。他に中信地区の同期の炉としては、塩尻市平出遺跡レ、ホ号住居址、塩尻市小段遺跡4号住居址がある。平出レ号住居址は7箇の石を埋め込み並べた方形石囲炉、ホ号住は11箇の石を埋め込み並べた方形石囲炉、小段4号住は6箇の石を埋め込み並べた方形石囲でどれも40～50cm前後の大きさの石囲炉である。この時期からは石囲炉が主流になり始めた時期と考えられる。

5) 縄文時代中期、松本平IX期(曽利I式期併行)

雨堀A14号住居址から新しい段階の資料が出土している。

器種分類してみると、

深鉢A——円筒形で直線的に開く。(雨14住20)

B——A的な器形であるが頸部で外反する。(雨14住21)

C_1——底部から頸部へゆるやかに開き頸部で外反し、口縁部端部がやや内彎しキャリパー形口縁になるもの。(雨A14住18)

C_2——胴部がゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、口縁部端部が内傾するキャリパー形口縁になるもの。(雨A14住17)

C_3——C_2よりやや胴部が脹らみ、頸部で口縁部が外反するもの。(雨A14住19)

C_4——胴部がゆるやかに脹らみ、頸部で外反し口縁部が直線的に開くもの。(雨A14住16)

C_5——胴部が極ゆるやかにく字状に脹らみ、頸部で外反するもの。(雨A14住23)

文様帯は口縁部・胴部文様帯の2文様帯に分けられるもの(17、18、23)口縁部・頸部・胴部文

様帯の3文様帯に分けられるもの（16、19、21）が多い。口縁部文様帯はほとんどが無文帯である。20の様に全体で1文様帯をなすものも見られる。文様構成は、前時代までの抽象文を構成するものは少なくなり、簡単になり、ほとんどが4単位の文様構成である。地文に条線をもつものが主流となる。19の様な沈線による綾杉文を地文に施文するのは次の段階の所産である。16、21の様に粘土紐で波状文を頸部に施文するものも多い。20の様に刺突文を地文にするものは前時期（Ⅷ期）と本時期にあまり多くないが見られる。17の口縁部文様帯の縦位の沈線は次の時期に出現する重弧文土器及び斜行沈線文土器につながる一要素と考えられる。18、21は両者共に4単位の隆帯から地文の縦の条線を横断する3本の沈線が施文されており、これは、本期の新しい部分の一要素となると思われる。16、18は曽利系の土器で後はすべて唐草文系の土器である。本期の良好な資料は松本平には少ないが、所謂「梨久保B式」とよばれる土器が主流をしめている。

この時期の炉は松本平でも多く雨堀A14号住②のごとくの長方形石囲炉が主流である。雨堀14号住①の炉のごとく地床炉も見られるが、中には石が抜かれ地床炉に見えるものもあると思われる。また、松本市大村柳田遺跡などには埋設土器石囲炉がある。

6） 縄文時代中期、松本平Ⅹ期（曽利Ⅱ式併行）

牛の川遺跡B3号住、雨堀A3、10、13、15、17号住から出土している。

器種別に分類してみると、

深鉢A——底部から口縁部に向って直線的に開く、口縁端部内面には粘土紐を貼付し、内面に凸帯的に出ている。（雨A3住8）

B_1——円筒形で頸部で外反し、口縁部がやや内彎するもの。（雨A17住3）

B_2——A的器形で頸部で外反し口縁部が直線的に開き、口縁端部内面には粘土紐を貼付し凸帯的に出るもの。（雨A17住4）

B_3——円筒形で頸部で外反し、口縁部がやや内彎するもので、口縁部に粘土帯を貼付し、肥厚化している。（雨A3住5）

B_4——B_2的器形で頸部で外反し、口縁部がやや内彎するもの。（雨A15、26）

C_1——胴部がゆるやかに脹らみ、頸部でくびれ口縁部が直線的に開くもので折り返し口縁。（雨A13住、12）

C_2——C_1と同形だが口縁部内外面に粘土帯、紐を貼付し口縁部を肥厚化したもの。（牛B3住1、2、3・雨A13住15）

C_3——胴部はゆるやかに脹らみ、頸部で外反し、口縁部が内彎するもの。（雨A3住3、牛3住7）

C_4——C_3的器形だが、口縁端部内面に粘土紐を貼付するか、折り返し、内面に凸帯的に出て、口縁端部が肥厚化しているもの。（雨A3住4、雨A17住2、牛B3住6）

C_5——胴上半部が脹らみ、頸部で外反し、口縁部が内彎するもので、口縁端部が折り返し

口縁、粘土紐貼付で内面に出る。

C_6——胴部が極わずか脹らみ、頸部で外反し、口縁部が内彎するもので、口縁端部が折り返し口縁、粘土紐貼付で内面に出る。(牛Ｂ３住５)

D_1——胴部がやや下脹らみで、頸部下で一端くびれ、頸部がやや脹らみ、頸部上で外反し、口縁部が直線的に開く。(雨A13住13)

D_2——胴部が中半で脹らみ、頸部下で一端くびれ、頸部がやや脹らみ、頸部上で口縁部が外反し、口縁部が直線的に開き、口縁端部内面が、折り返し、粘土紐貼付により、内面に凸帯的に出て肥厚化する。(雨Ａ３住10、11)

Ｅ——胴部がやや脹らみ、そのまま口縁に至る、樽形に近い器形で口縁端部が、折り返し、粘土紐貼付により内面に出て、凸帯的になり、肥厚化する。(雨Ａ３住２)

その他の器形として二窓の釣手土器がある。

文様帯は、口縁部文様帯、胴部文様帯に分かれるもの、口縁部・頸部・胴部文様帯に分かれるもの、すべてで一文様帯をなすものの３種がある。口縁部文様帯はほとんどが無文帯であるが、牛Ｂ３住１、２、３のごとく、無文帯でもわずか口縁端部に沈線、列点文(刺突文)を施すものもある。文様は、地文に縄文をもつものは少なく、条線、細条線、綾杉状文を施文するものが主流である。この時期になると腕骨文を施文するものがふえてくる。器種分類D_1、D_2は、唐草文系土器の中で前時期が最盛期の土器で所謂「梨久保Ｂ式」の一要素の土器であり、その系統を受け継いだ土器である。頸部文様帯は前時代の場合、粘土紐を格子目状に貼付するか、斜行沈線を施文していたが、本期になると、斜行する結節沈線か、縦位の結節沈線か、斜行沈線、縦位沈線となり、胴部文様帯は条線の組み合わせであったものが、一部条線の組み合わせを残すが、斜行沈線（綾杉状沈線)と変化している。雨A17住４はおそらく前時期の雨A14住17の系譜をひいた土器と考えられる。雨Ａ３住２の器種の土器は本時期から新しく出現する土器である。雨Ａ３住３、４は下伊那地方に分布する土器で搬入品であろう。雨A13住12は曽利式系の土器で、後はすべて唐草文(上伊那、松本平に分布する)系の土器である。本期は古式と新式に２分できると考えられ、D_1、D_2のような、前段階の器形を残している段階と所謂「唐草文」と呼ばれる文様の先駆的文様をもつ段階の２段に分けられると思われる。雨Ａ３住、雨A13住、雨A17住は古式段階、雨A15号住、牛Ｂ３住は新段階に当たると考えられる。

本期の炉は、中信の中でも多く見られ例をあげないが、古式段階が雨A17住の様な長方形石囲炉や方形の大型石囲炉、牛Ｂ３住、雨Ａ３住のような大形の地床炉であったと考えられる。

(大形の地床炉は、大形石囲炉の石が引き抜かれたものとも考えられる。)

新式段階は方形の大型石囲炉、大形の地床炉とが存在したと考えられる。

7） 縄文時代中期、松本平XI期（曽利III式併行）

牛の川Ｂ４住上層、Ｂ５住、Ｂ10住、雨堀Ａ２住、Ａ10住、Ａ12住、Ａ16住の資料がある。

器種別に分類してみると、

深鉢Ａ――底部から直線的に開くもの。（雨Ａ10住５、牛Ｂ10住９）

Ｂ――底部から頸部に向って開き、頸部でやや内彎ぎみにわずかに開くもの。（雨Ａ10住4、雨Ａ２住４）

C_1――胴部にゆるやかな脹らみをもち頸部でゆるやかに外反する。ｘ字状の退化した把手が付く。（雨Ａ２住３）

C_2――C_1的器形であるが頸部で外反し口縁部が直線的に開くもの。（雨Ａ10住５、６、９）

C_3――C_2的器形であるが、頸部で外反し、口縁部が内彎するもの。（中には台付きも見られる。（雨Ａ16住１、牛Ｂ10住12、13、14）

Ｄ――底部から胴上半部に向って開き胴上半部で内彎し口縁部に至るもの。（牛Ｂ４住上層26、25、牛Ｂ５住１、２、牛Ｂ10住１、２、３、４、５、６、雨Ａ２住２、雨Ａ12住11）

他に両耳付鉢がある。

文様帯は、ほとんど口縁部文様帯、胴部文様帯に区別されるが、Ｄは１文様帯のみである。文様は、地文が縄文のものの数量が増し、綾杉文のものが主流となる。器形ではII期より出現した深鉢Ｄ（Ｘ期では、深鉢Ｅに類似）が数量的に最高の量に達し文様も、地文が綾杉文でその上に渦巻文及び曲線、剣先文などを組み合わせた、所謂唐草文が施文されている。中には地文が縦位の櫛歯状工具による波状文も見られる。雨Ａ16住１は伊那地方に多く見られる土器であるが文様は曽利式系の施文に近い。牛Ｂ12住12は曽利式系、13、14雨Ａ２住２、４は加曽利Ｅ式系の土器である。雨Ａ２住３の把手付の深鉢の文様は大木式系の影響を受けたものと考えられる。雨Ａ10住５、６、９は、前時期の牛Ｂ３住１、２、３の系統を残した土器である。

本期の炉は牛の川Ｂ５号住に代表されるような大形の深い方形石囲炉が主流となる。

松本平縄文時代中期、松本平XII期（曽利IV式併行）は雨堀Ａ４住が比定されるが資料的に少ないので省略する。

8） 縄文時代中期、松本平XIII期（曽利Ｖ式期）

雨堀Ａ１号住居址の資料が数量は少ないが見られる。器種は底部から口縁部に向って開く深鉢と底部から胴部上半に向って開き胴上半部で内彎して口縁部に至る鉢の２器種がある。文様は沈線で４単位及び８単位に区画され、ハの字状の沈線、弱い短かい沈線を施文している。１の土器は１区画の一部に縄文も見られる。２の器形はXI期の深鉢Ｄが変化したものと考えられる。この資料は中信地区では数少ない資料である。炉は大形の４箇の長い石を使用した炉であるが中信地区では数少なく全体を通しては不明である。

末文ながら乱雑な所がある事をおわびしたい。諸先輩方々の御批評があれば幸いである。

（島田哲男）

参考文献

岡谷市教委 『郷土の文化財－梨久保遺跡』 1976

鵜飼幸雄 「平出第三類Ａ土器の編年的位置付けとその社会的背景」『信濃』29－4 1977

林 茂樹 「縄文中期土器平出三Ａの系譜－月見松遺跡と山溝遺跡」『長野県考古学会誌』27 1976

小島俊彰 「北陸の縄文時代中期土器の編年」『大境』5 1974

富士見町教委 『曽利』 1978

山口 明 「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」『駿台史学』43 1978

藤森栄一編 『井戸尻』 中央公論美術出版 1965

宇ノ気町教委・石川考古学研究会 『上山田貝塚』 1979

七尾市教委 『赤浦遺跡』 1977

塩尻市教委 『小段遺跡』 1979

塩尻市教委 『中島遺跡』 1980

波田町教委 『長野県東筑摩郡波田町葦原遺跡緊急発掘調査報告書』 1980

長野県教委 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その１、富士見町その2』 1981

長野県教委 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その３、茅野市その４・富士見町その３』 1981

長野県教委 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－岡谷市その４』 1980

長野県教委 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その４』 1981

松本市教委・長野県企業局 『松本市大村遺跡群柳田遺跡緊急確認調査報告書』 1979

平出遺跡調査会編 『平出』 朝日新聞社 1955

松本市教委・中信土地改良事務所 『松本市笹賀牛の川遺跡』 1980

折井 敦 「八ヶ岳南麓における縄文中期の炉形態の変遷に関する一考察」『長野県考古学会誌』 28 1977

佐藤達夫 「土器型式の実態――五領ヶ台式と勝坂式の間――縄文式土器」『日本考古学の現状と課題』 1974

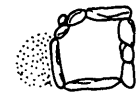
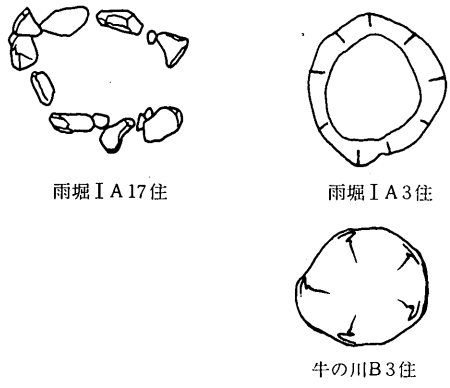
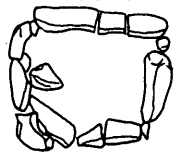
西村正衛 「阿玉台式土器編年的研究の概要――利根川下流域を中心にして――」『早稲田大学研究科紀要』 18 1972

武藤雄六 「中期縄文土器の蒸器」『信濃』 17巻７号 1965

中部高地縄文土器集成グループ 『中部高地縄文土器集成１』 1979

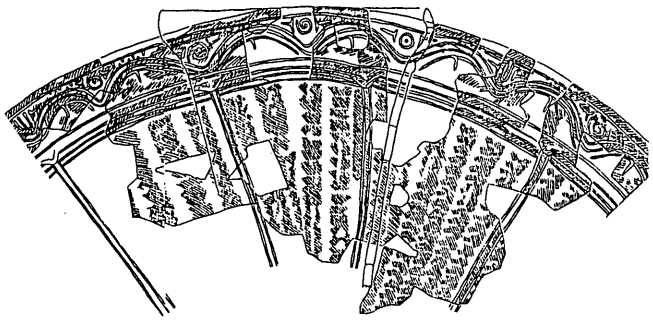
神奈川考古同人会 「縄文時代・中期後半の諸問題」『神奈川考古』 10 1980

米田明訓 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」『甲斐考古』 17－1 1980

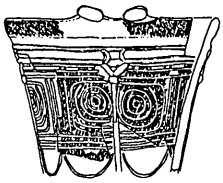
	牛の川・雨堀の炉址	その他の遺跡の炉址
Ⅱ	（地床炉と埋甕炉？）	
Ⅳ	牛の川B6住　牛の川B8住　雨堀ⅠB2住	中島2住　平出ワ号住　平出ヘ号住
Ⅴ	牛の川B9住	 萩原3住(1980)
Ⅵ	雨堀ⅠA8住	平出レ号住　平出ホ号住
Ⅸ	雨堀ⅠA14住②　雨堀ⅠA14住①	柳田2住
Ⅹ	 雨堀ⅠA17住　雨堀ⅠA3住　牛の川B3住	
Ⅺ	 牛の川B5住	
Ⅻ	（大形の方形石囲い炉）	

第47図　松本平における縄文中期住居址の炉址の変遷（約1：60）

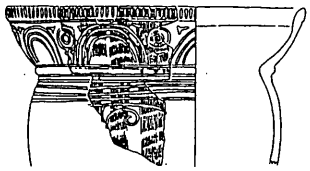
雨II3



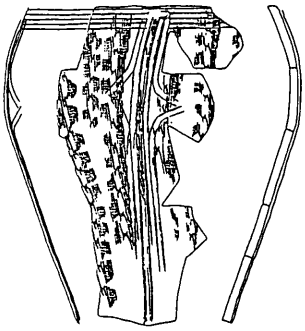
雨II1



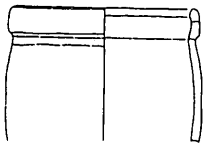
雨II6



雨II2

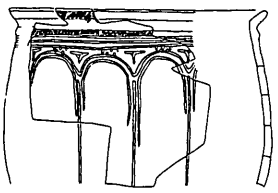


雨II5

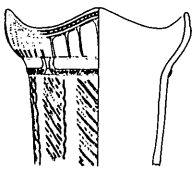


雨II15

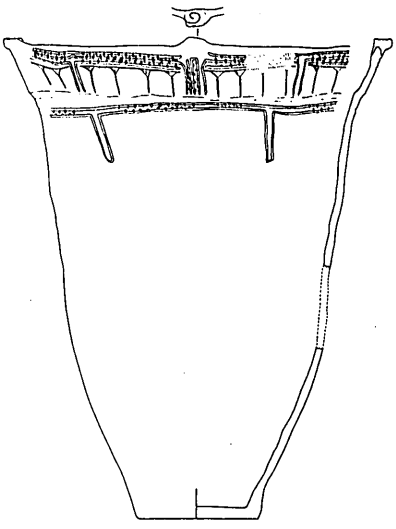
雨II17



雨II9

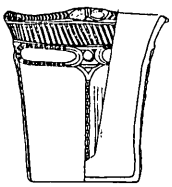


雨IB1住1

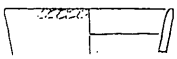


雨IB1住3

雨II11

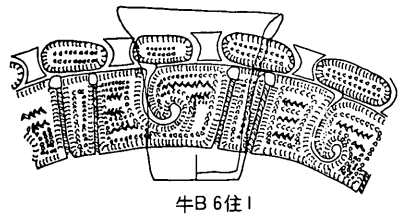


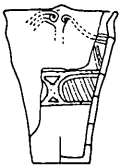
雨IB1住2



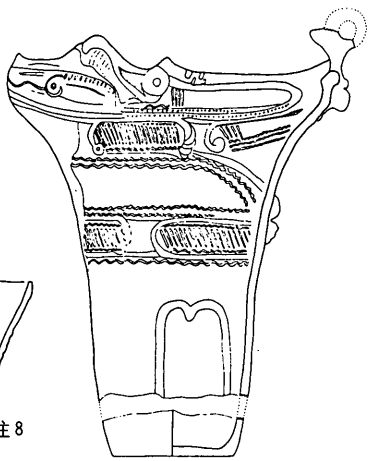
雨II20

第48図　松本平II期

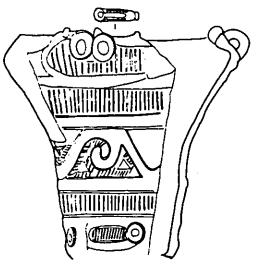

牛B 6住1


牛B 6住3

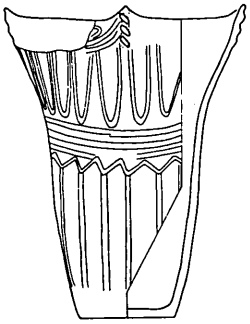
牛B 6住5

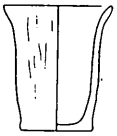

牛B 6住7

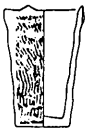
牛B 6住4


牛B 6住6

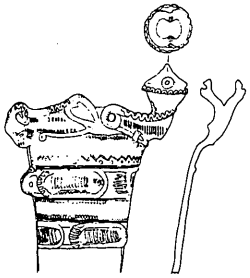
牛B 6住8


牛B 6住11


牛B 6住9


牛B 6住18

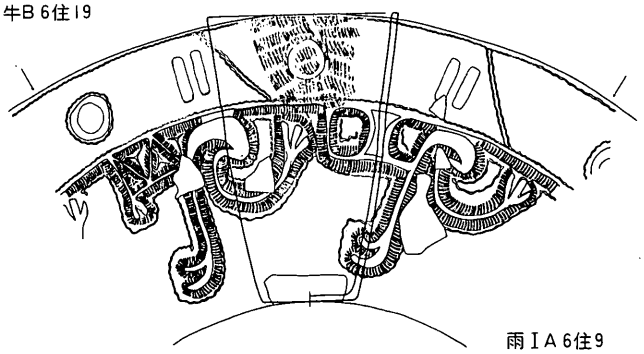
牛B 6住19

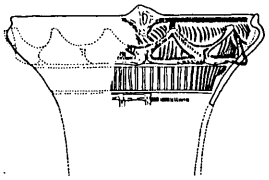

雨IB 2住1

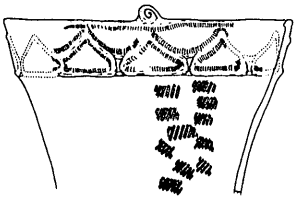
雨IB 2住1

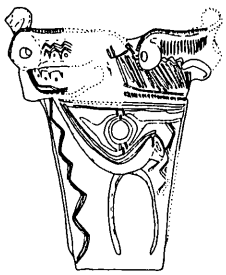
雨IA 6住2

雨IA 6住3

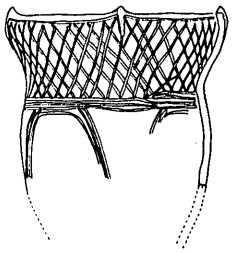

雨IA 6住9


雨IA 6住5

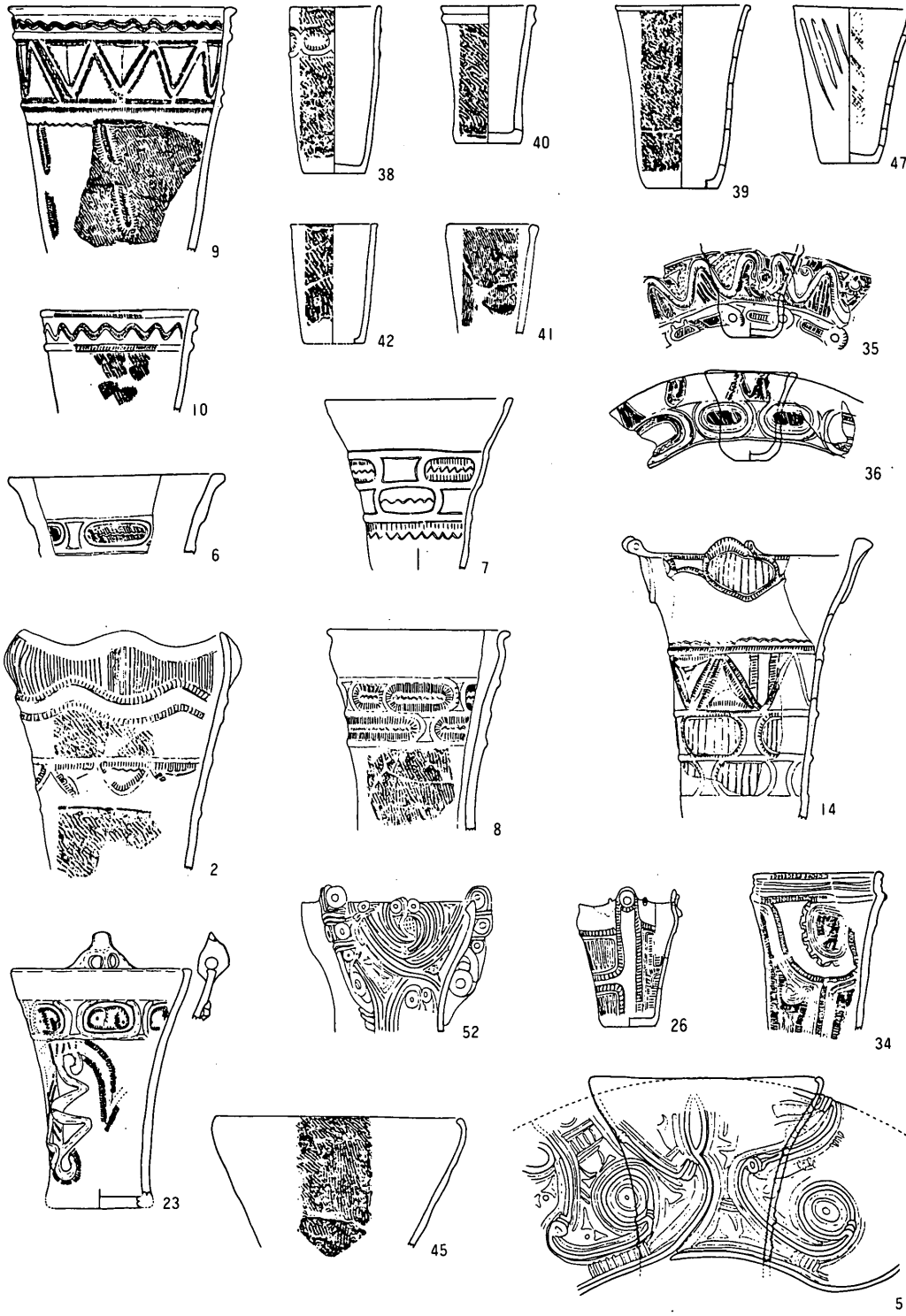

雨IA 6住4


雨IA 6住8

雨IA 6住6

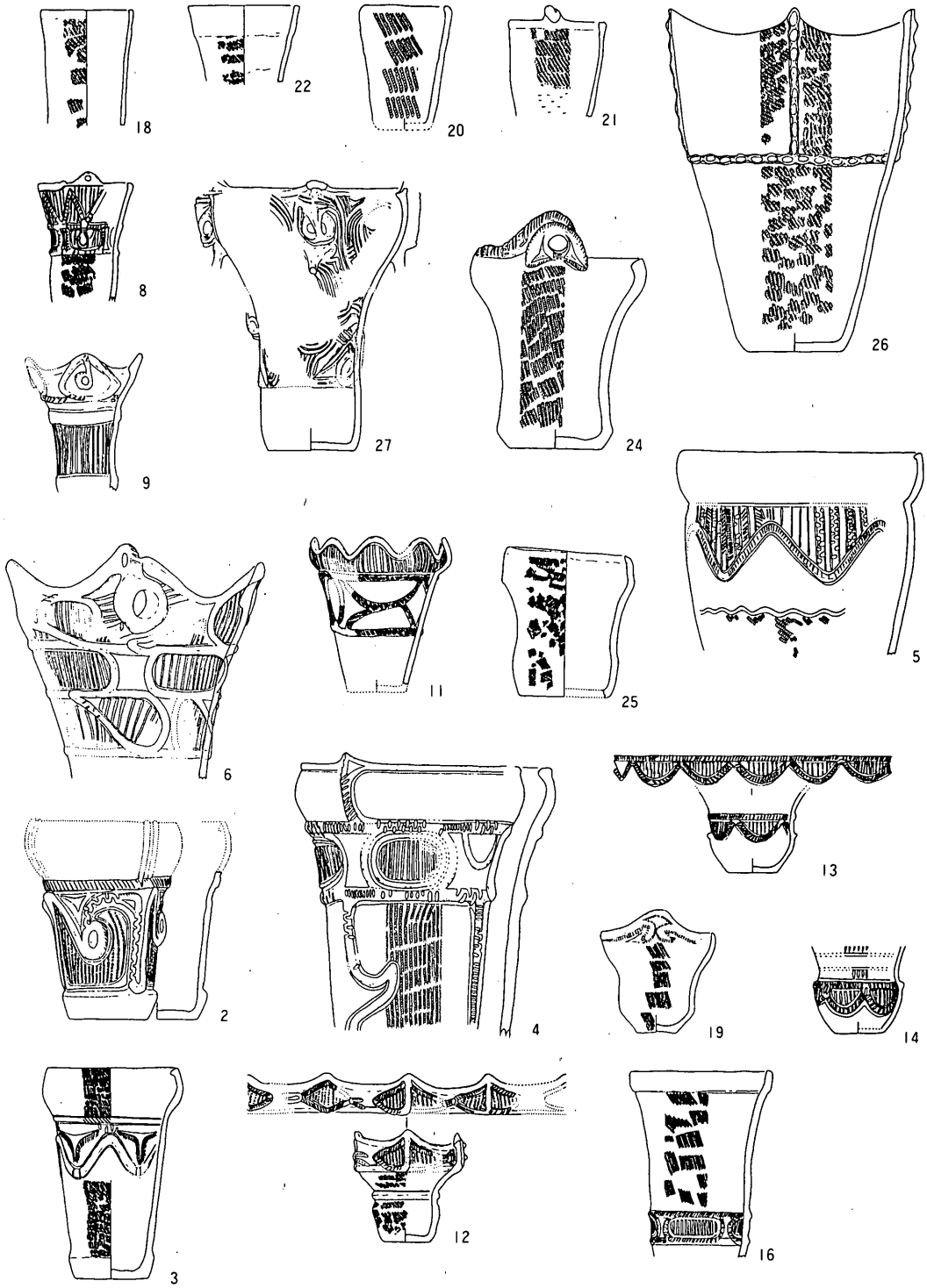

雨IA 6住7

第49図　松本平Ⅳ期

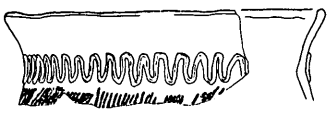


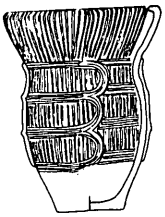
第50図　松本平Ⅴ期その１（牛の川B９号住居址出土品）

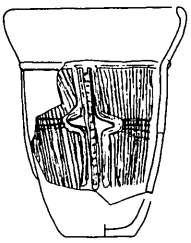
第51図　松本平Ⅴ期その２（牛の川Ｂ９号住居址出土品）

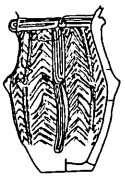


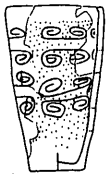
第52図　松本平Ⅵ期（雨堀ＩＡ８号住居址出土品）

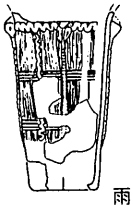

雨ＩＡ14住16

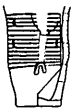

雨ＩＡ14住17

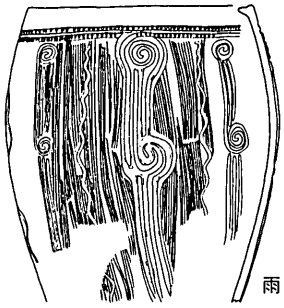

雨ＩＡ14住18


雨ＩＡ14住19

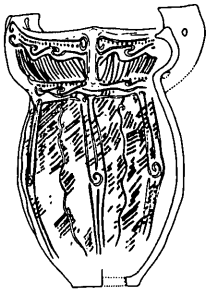

雨ＩＡ14住20

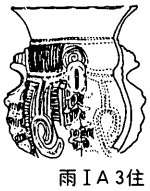

雨ＩＡ14住21

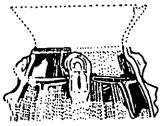

雨ＩＡ14住23

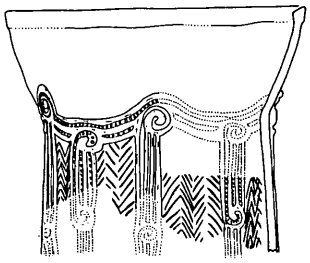

雨ＩＡ3住2

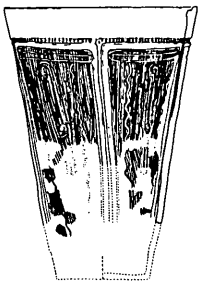
雨ＩＡ3住3

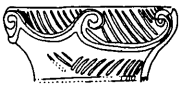

雨ＩＡ3住4

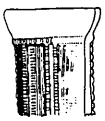

雨ＩＡ3住10


雨ＩＡ3住11

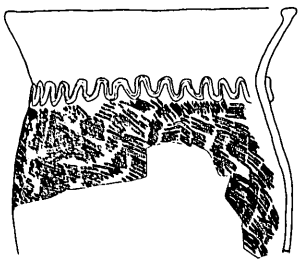

雨ＩＡ3住5

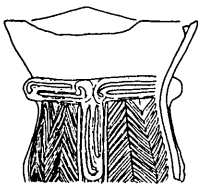

雨ＩＡ3住8

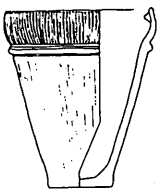

雨ＩＡ17住2


雨ＩＡ17住3

雨ＩＡ17住4

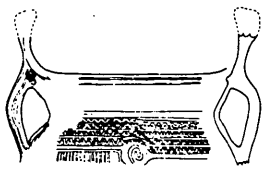

雨ＩＡ13住12

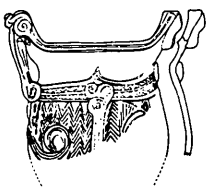

雨ＩＡ13住15


雨ＩＡ15住26

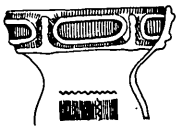
牛Ｂ3住5

牛Ｂ3住6

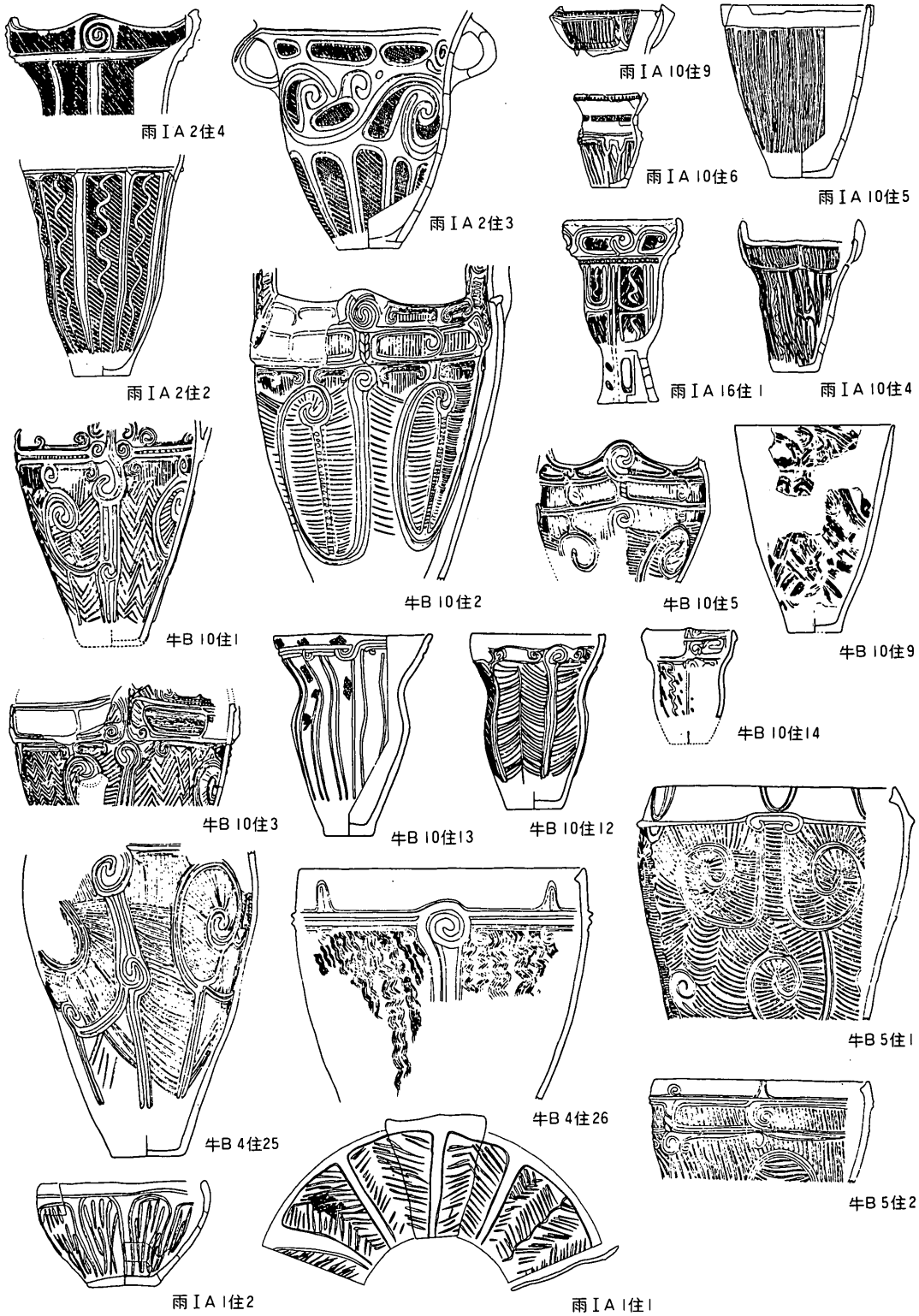

牛Ｂ3住1


牛Ｂ3住2

牛Ｂ3住3


牛Ｂ3住7

第53図　松本平Ⅸ・Ⅹ期



第54図　松本平Ⅺ・ⅩⅢ期

第5章　結　　語

松本市内田地籍では、現集落立地箇所の東側山腹地帯の田畑が、県営構造改善事業の対象となり、去る昭和55年度よりその着工がなされる。この年、着工に先だち2ヶ月間、雨堀遺跡の緊急発掘調査がなされ、多数の縄文中期住居址等遺構と、それに伴う豊富な遺物が発見された。

翌昭和56年、前回の発掘地点を異にした同地籍内で、第2回目の発掘調査が行われる。前回の発掘地の西側山腹下方約200 m程の地点で、南北方向に丘陵を横断するかたちで発掘地が選定され、南より北へC～E地区と、E地区より東へ鍵形におれて、F・G地区が設けられた。調査は7月より9月まで、炎天下を2ヶ月間にわたり行われ、予定より倍近い面積の、約2,100平方メートルが発掘される。その結果主なる遺構として、縄文期所属とみられる小竪穴群が、C地区に26箇所、D地区に24箇所確認される。又、E地区に住居址らしい竪穴状の落ち込みを認め、精査を行ったが、結果的には多量な遺物出土にもかかわらず、住居址としての明確な輪郭や、柱穴、炉址、床面等々の施設も確認できず、自然地形の凹地であることが判明する。更にE地区には、こぶし大の礫を集めた、比較的整った形の帯状の集石を認めたが、この遺構は、大正より昭和の現代におけるものとの判断がなされた。

小竪穴は、C、D両地区に限られて分布を示したが、両地区共、地が粘質度強く、小～中礫が多量に混在して検出には苦労する。その形状も、ほぼ円形を呈するものが主体をしめたが、不整円形や稀に方形状を示すものもあった。規模もその径が1～2 m代のものが殆んどであり、3 mをこえるものはなかった。竪穴も深浅の差がみられたが、総体的には検出面から20～30cmを記録するものが殆んどである。底部も平坦なもの、凹凸のあるもの等あり、その殆んどに地山の礫がのぞいていた。小竪穴内は、何等かの遺物が含むものと、含まないものとに大別でき、含むものとしては、縄文中期土器片が微量ずつ内包するものが多く、あるいは木炭粉末を残すものもあった。又、C地区の小竪穴で、検出面から中世末とみられる土師質土器片（小竪穴1）や、糸切りの土師皿片（小竪穴18）、灰釉陶器片（小竪穴13）を検出できたものもあったが、周辺地域に同期の遺物出土は皆無の状態であり、縄文中期土器片の散在をみたのみであった。又、C地区の小竪穴の中、6～10と11～15までは、東北～南北方向にそれぞれ直線状に並列していたが、そのいずれもの竪穴を埋める黒色土が、異状な程固かった。然も小礫まじりで、他のいわゆる竪穴とは趣を異にした。これは建造物の柱にあたる部分の土台固めに、つき固めが行われて固くなった様な感じであり、その程度は地山の礫まじりのローム より堅固であった。建物跡とは即断できないが、注意される埋覆土であった。いずれにしてもこれらの小竪穴群は、大小深浅の差あり多様を極めるが、その存在は、近くに縄文期の集落を推測させるし、貯蔵穴、あるいは墓壙その他で、機能的な結びつきを感じさせるものである。

E地区はF地区と共に、いわゆる雨堀の地名ともなった、U字溝内に設定された地名で、全般に石英閃緑岩の粉末砂で堆積しており、非常に固い層をなしていて、炎天下の発掘に苦労する。この地区には、前述の大正～昭和期構築とみられる、集石遺構が発見された。集石はこぶし大の礫を用いており、規模は幅約47cm、長さ約200cmの整然とした長方形の一方の端に、更に長軸約180cm、短軸約160cmのほぼ円形状に分布する集石が連続していた。集石内には縄文中期前半土器片と、打製石斧7個が混在していた。この集石の所属時期に興味がもたれたが、精査の結果、集石の西端の礫の下へもぐり込む様な形で、缶詰の空缶の腐蝕した物が出土する。集石の礫間には間隙の空洞部が顕著にみられた。更に集石の下部調査の結果では、大正年代使用と思われる陶器が出土する。この雨堀の溝の両縁地帯に畑をもつ地元衆の話では、集石遺構が発見された地点の上方あるいは下方あたりで、この30年程前まで湧水の場があり、周辺の人達もよく水を飲みにきたとのことである。然し、遺跡地の南を東より西へ流下する、塩沢川の改修工事後は、雨堀の湧水も途絶えたとのことである。前記、集石遺構の存在を考える上で、聞き逃し難い話である。F、G両地区には、遺構の検出はなかった。

遺物は、縄文中期初頭土器片を中心として、各種石器、土製品等豊富で、多彩な資料が得られた。主としてE、F地区の雨堀の溝内に集中的に発見される。その出土状況は、溝内の自然形成の凹地に、他からの人為的な廃棄が感ぜられるが、光沢を帯びる黒色土内にいずれも包含されていた。主なる遺物をあげると、縄文中期初頭土器片、土製円板、土偶、石器として打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錐、石皿、磨石、凹石等があげられ、それに古代に降って、極めて微量の土師器、灰釉陶器等の破片が、C地区の一部より発見される。縄文中期初頭土器片は、施文面で中信地方に類例を知らないものが多く、豊富、多彩で、今後へのよき資料提供となり得るものと思われる。又、土偶も胸部、脚部などの欠損品の他、小鼓状を呈する完形の土偶1点も検出される。この土偶は、E地区の縄文中期初頭土器片等遺物を多量に含む、凹地内の黒色覆土を掘削中に発見されたものである。色調は暗灰色を呈し、大きさは長さ2.6cm、両端の平坦な円形面の直径が1.5cm、筒形の中央胴部のくびれ部分の径が約1.1cmを記録する。この小鼓状の体部に、陰刻による眼、鼻、口が記され、更に腹部、脚部が簡明に表現されているものである。この様な土偶は、松本を中心とする中信地方はもとより、県内でも出土事例を知らない。伴出土器がいずれも縄文中期初頭土器片のみであるので、該期所属とみて大過ないものと考える。石器では打製石斧、石鏃等が多出したが、打製石斧が比較的小形であるのが特徴的であった。

炎天下長期にわたり、調査に参加された事務局、調査員、作業員等の皆様方に、深甚なる感謝の意を表します。

（大久保知巳）

第4表　小竪穴一覧表

小竪穴番号	図番号	図版番号	形態		大きさ (cm)			状態	出土遺物	遺物番号	備考
			平面	断面	長軸	短軸	深さ				
1	20		不整形	二段底	197	60	20	東側が深くなる。			
2	20		不整形	たらい状	200	120	38	底面に平石。	石鏃（第33図）	2	東側は調査区域外。
3	17		円形	摺鉢状	70	60	23	上面に炭化物多し。			
4	17		円形	摺鉢状	70	60	23	上面に炭化物多し、小ピット上面に自然石。			
5	20	8	不整円形	摺鉢状	160	157	38	大小の礫を含み底面に自然石。	縄文中期土器片（第32図）	159、160	
6	17	8	円形	たらい状	58	54	27	底面は平坦。			
7	17	8	円形	たらい状	87	82	26	底面は平坦。			
8	19		三角形		100	60	10	北側にピット状の落ち込み有り。			
9	19	8	不整円形	二段底	100	—	35	底面に平石。	磨製石斧（第41図）	189	東側は調査区域外。
10	18	8	方形		86	85	9				
11	17		円形		78	68	26	東側が深い、底面に石はない。			
12	19	8	不整円形	たらい状	100	85	9	底面は平坦。	縄文中期土器片（第32図）	154	
13	18	8	方形	摺鉢状	100	53	19	壁際に礫有り。	灰釉陶器（第32図）	162	
14	17	8	円形	たらい状	70	62	14	底面に自然石。			
15	19	9	不整円形		94	84	20	東側が深い、底面に自然石。			
16	18	9	方形	たらい状	136	125	20	底面は平坦。			
17	19	9	不整円形		87	75	12	西側へ傾斜、底面自然石多し。			
18	18	9	楕円		182	83	15	大小の礫多し、部分的に凹凸あり。	土師質土器片		
19	20		不整形		230	79	13	西側へ傾斜、東と西側に凹部あり。			
20	17	9	円形	たらい状	116	106	20	底面は平坦。			
21	19	9	不整円形	二段底	123	99	20	底面に自然石多し。	縄文中期土器片（第31図）	139、140、141	
22	17		円形	たらい状	68	60	16	底面は平坦、わずかに西側へ傾斜。			
23	17		円形	摺鉢状	55	50	11	上面付近に自然石多し。			
24	17	9	円形	二段底	63	58	10	上面に自然石。			
25	17	9	円形		97	93	11	北壁際にピット、上面付近に自然石。			
26	17		円形		90	74	15	上面や底面に自然石、底面は堅くつきかためてある。	縄文中期土器片		
27	17	10	円形	たらい状	60	58	12	底面に平石、西側へ傾斜。			
28	18	10	楕円	二段底	90	64	60	南壁際にピット。			
29	18	10	方形	たらい状	86	80	12	北壁際に自然石。			
30	18		楕円	たらい状	60	42	10	北壁際に自然石、底面は平坦。			
31	17	10	円形	たらい状	58	54	10	底面は平坦。			
32	19		不整円形		74	50	6	底面に自然石、東側が深い。			

小竪穴番号	図番号	図版番号	形態		大きさ (cm)			状態	出土遺物	遺物番号	備考
			平面	断面	長軸	短軸	深さ				
33	19		不整円形	摺鉢状	87	83	10	底面に自然石。			
34	19	10	不整円形	たらい状	56	42	13	北側が深い、底面に自然石、西側へわずか傾斜。			
35	18		楕円	半円状	57	28	12	北側が深い。			
36	19		不整円形	不整形な摺鉢状	95	77	63	底面付近に土器片。	縄文中期土器片（第32図）	152、153、158	D地区の西壁にほとんど接している。
37	18		楕円	たらい状	65	49	14	底面は平坦。			
38	18		楕円		93	70	13	東側が深い。壁、底面に自然石。			
39	18		楕円	摺鉢状	63	51	15	西側にゆるく傾斜、東側やや深い。			
40	20	10	不整形	たらい状	150	70	10	西側に傾斜、部分的に凹凸あり。	縄文中期土器片（第32図）	151、155	
41	19	10	不整円形		107	75	20	南西側が深い。	縄文中期土器片（第32図）	150、157	D地区の東壁に接し一部は調査区域外。
42	17		円形	有ピット	98	90	18	北西側に小ピット。			
43	18		方形		60	60	14	南東部が深い。			
44	18		方形	たらい状	74	66	13	自然石多い。			
45	19		不整円形		63	60	16	北西壁がゆるい傾斜、南側が深い。			
46	20		不整形		140	76	16	北西側へ傾斜。	縄文中期土器片（第32図）	149、161	北西側は調査区域外。
47	19		不整円形		70	72	12	底面に自然石、東南側が深い。			
48	20		不整形	たらい状	235	75	33	部分的に凹凸あり、西側へ傾斜。			
49	17		円形	摺鉢状	40	38	14	底面に自然石。	縄文中期土器片（第32図）	156	
50	19	10	不整円形	たらい状	130	120	10	南東壁際にピット、東壁がゆるい傾斜。			

第5表　実測土器一覧表

土器番号	出土箇所	器形	口径	色調	文様（①文様帯、②文様、③地文）備考
1	E地区 土器集中箇所	深鉢形	32.7	暗黄褐色～暗褐色	①横位2段　②1段目：弧線と玉抱き三叉文、沈線で8単位、2段目：縦隆線で4分割　③LR縄文
2	E地区 土器集中箇所	深鉢形	36.5	茶褐色～暗褐色	①横位2段　②1段目：口縁に縦沈線、弧線と玉抱き三叉文、沈線で8単位、2段目：上端に横沈線、渦巻沈線　③撚糸文
3	E地区 土器集中箇所	深鉢形	18.4	内)明赤褐色 外)暗灰茶褐色～明赤褐色	①横位2段　②1段目：弧線とその内部の円、交互刺突、沈線で4単位、2段目：縦隆線で4分割　③LR縄文
4	E地区 土器集中箇所	深鉢形	底径 15.6	内)暗黄褐色～淡褐色 外)明赤褐色～暗黄褐色	①横位2段以上　②最下段：縦隆線で4分割　③RL縄文
5	E地区 土器集中箇所	深鉢形		明赤褐色～暗赤褐色	①横位2段以上　②最下段：半截竹管平行沈線を伴った縦隆線で4分割　③撚糸文
6	E地区 土器集中箇所	深鉢形	26.1	暗紫褐色	①横位2段以上　②1段目：RL縄文横位、2段目：縦隆線で4分割、上半縦横沈線で方形区画した中に同心円状沈線が2箇づつ4単位、下半弧沈線8単位　③RL縄文
7	E地区 土器集中箇所	深鉢形	28.9	黄褐色～暗灰褐色	①横位3段　②1段目：上半RL縄文横位、下半無文、2段目：隆線の弧線により、半円形と三角形を交互に4単位、半円内には変種の玉抱き三叉文、3段目：縦隆線で4分割、更に上端が弧状に連なる縦沈線で4分割　③RL縄文
8	E地区 土器集中箇所	深鉢形	19.3	内）暗黒褐色 外）暗紫褐	①横位2段以上　②1段目：口縁の突起に対応させて、玉抱き三叉文を4単位、2段目：無文？
9	E地区 土器集中箇所	深鉢形	31.5	内)明茶褐色 外)明茶褐色～暗褐色	①横位2段　②1段目：LR縄文横位、2段目、弧状沈線とその凹部に楔形の沈線、凸部に交互刺突、弧の接合部より縦沈線垂下
10	E地区 土器集中箇所	深鉢形	32.7	暗茶褐色～黒褐色	①横位2段　②1段目：全面RL縄文横位、2段目：上端鍵状になる縦隆線により4分割、結節をもったRL縄文縦位　③RL縄文
11	E地区 土器集中箇所	浅鉢形	34.4	内)暗赤褐色～茶褐色 外)暗茶褐色	①口縁内面に横位1段　②横位に3本並列させて連続爪形文、所々に交互刺突
12	E地区 土器集中箇所	深鉢形		暗黄褐色～明茶褐色	①横位2段以上　②上段：縦隆線で4分割、内部に隆線で同心円、下段：LR縄文　③LR縄文
13	E地区 土器集中箇所	深鉢形	15.7	淡橙褐色	①横位2段以上　②1段目：隆線、半隆起線を横位並列、隆線は爪形が刻まれ、1箇所で弧、渦をつくる
14	E地区 土器集中箇所	深鉢形	底径 12.9	内)赤褐色～褐色 外)赤褐色～暗赤褐色	①不明(横位2段以上と推定)　②最下段：半截竹管平行沈線を伴う縦隆線で4分割、結節をもつLR縄文縦位　③LR縄文
15	E地区 土器集中箇所	深鉢形	22.3	暗赤褐色～灰褐色	無文
16	E地区 土器集中箇所	深鉢形		暗褐色	①横位2段以上　②図示部分：半截竹管平行沈線により、方形の3辺を区画連続、内部に同様沈線横位に充填　③不明

土器番号	出土箇所	器形	口径	色調	文様（①文様帯、②文様、③地文）備考
17	E地区 土器集中箇所	深鉢形	37.7	茶褐色～暗褐色	①横位2段以上　②1段目：沈線により弧線、玉抱き三叉文とその変種を8単位　③RL縄文
18	E地区 土器集中箇所	深鉢形		明黄褐色～暗灰褐色	①不明(横位2段以上)　②図示部分(最下段と推定)：結節をもったLR縄文
19	E地区 土器集中箇所	深鉢形	底径 (11.5)	明赤褐色～暗赤褐色	①不明(横位2段以上)　②図示部分(最下段と推定)：結節をもったLR縄文
20	E地区 土器集中箇所	深鉢形	20.5	明赤褐色～暗茶褐色	無文、口縁に指頭圧痕
21	E地区 土器集中箇所	深鉢形	13.1	淡黄褐色	①横位2段以上　②1段目：無節縄文横位、2段目：細い半截竹管状施文具による平行沈線
22	E地区 土器集中箇所	深鉢形	12.5	明赤褐色～灰褐色	①不明(文様帯なしと推定)　②口縁下1～3cmに沈線3本並列　③RL縄文
149	D地区 小竪穴46	深鉢形	24.5	明黄褐色～暗黄褐色	①横位3段以上　②1段目：口縁に横位沈線2本、4単位で縦沈線、他は無文、2段目：半截竹管平行沈線で逆「U」字を描く
150	D地区 小竪穴41	深鉢形		暗黄褐色	①横位3段以上　②最上段：僅かに斜位沈線の存在が推定、次段：隆線で楕円を4単位、下段：縦隆線で4分割、内部に楔形の縦沈線とその上か下に弧状沈線　③RL縄文
151	D地区 小竪穴40	深鉢形	12.3	内)明茶褐色 外)茶褐色～暗茶褐色	①不明(2段以上と推定)　②沈線及び縄文磨消凹帯を横位に、他はRL縄文　③RL縄文
152	D地区 小竪穴36	深鉢形	20.1	淡褐色～暗黄褐色	①横位2段　②1段目：結節沈線による弧線(単位不明)の上下に横位沈線2本並列、2段目：2本1組の縦隆線により4分割、内部に大きくジグザグの隆線と結節沈線　③LR縄文
162	C地区 小竪穴13	灰釉陶器 埦	底径 7.6	明灰白色 釉)黄白色	重ね焼痕

第6表　拓影土器一覧表

土器番号	出土箇所	器形・部位	色調 外面	色調 内面	①文様　②地文　③その他
23	E	深鉢形　胴上	茶色～暗褐色	明赤褐色	①交互刺突、沈線により区画　②斜縄文縦位
24	E	深鉢形　口縁	黄褐色	灰黄褐色	①玉抱き三叉文、横位沈線　②斜縄文
25	E	深鉢形　口縁	赤褐色	暗～黒褐色	①連続爪形文、横位沈線　②斜縄文
26	E	深鉢形　口縁	暗灰色～黄色	灰褐色～黄色	①並列する短沈線
27	E	深鉢形　胴上	暗褐色～褐色	暗褐色	①横位・菱形・渦巻等の沈線、三叉文
28	E	深鉢形　胴上	灰褐色	明褐色	①横位・斜位の細沈線
29	E	深鉢形　胴上	黄褐色～茶褐色	黒褐色～黄褐色	①横位・弧状の沈線、縦隆線　②縄文縦位
30	E	深鉢形　胴上	暗褐色	暗灰茶褐色～暗黄茶褐色	①横位・Y字状の沈線　②縄文縦位
31	E	深鉢形　胴	暗赤褐色	暗褐色	①平行沈線による区画、波状　②縄文縦位
32	E	深鉢形　胴	薄赤褐色	黒褐色～灰褐色	①平行沈線による波状線　②不明
33	E	深鉢形　胴	茶褐色	灰褐色～白茶褐色	①平行沈線による長方形区画　②結節をもつ縄文縦位
34	E	深鉢形　胴	黄褐色～暗黄褐色	灰黄色	①横位沈線、半隆起線と沈線により縦の長楕円区画　②縄文縦位
35	E	深鉢形　胴上	黄褐色～暗褐色	灰赤褐色	①横位沈線に刻み連続刺突　②縄文横位
36	E	深鉢形　胴	黄褐色～赤褐色	黄褐色	①三角形の沈線、棒状工具での刺突　②縄文縦位
37	E	深鉢形　胴	黄褐色～暗黄灰褐色	灰黄褐色	①8の字形の文様　②充填縄文　③縄文後期
38	E	深鉢形　口縁	暗黄褐色	黄褐色	①横位の沈線・隆線
39	E	深鉢形　口縁	黄褐色	黄褐色	①刻み、横位沈線、縦の短沈線
40	E	深鉢形　胴	黄褐色～褐色	黄褐色～褐色	①平行沈線を伴った縦隆帯　②結節をもつ縄文縦位
41	E	深鉢形　胴	赤褐色	灰褐色	①細い楕円の隆帯、平行沈線の自由な曲線　②縄文縦位
42	E	深鉢形　口縁	明灰褐色～暗灰褐色	暗灰褐色	①連続爪形、横位及び格子状沈線
43	E	深鉢形　口縁	黒灰褐色～灰褐色	灰黄褐色～明褐色	①横位及び斜格子状沈線　②縄文横位
44	E	深鉢形　口縁	暗灰赤褐色	灰褐色	①三角形陰刻　②内外面に縄文
45	E	深鉢形　胴上	暗灰褐色	褐色	①横位及び縦の沈線
46	E	深鉢形　胴	暗灰黄褐色～黒褐色	暗黒褐色	①並列する横位沈線、連続刺突　②縄文横位
47	E	深鉢形　胴	明赤褐色～明黄褐色	明赤褐色	①縦隆線と幅の狭い爪形文
48	E	深鉢形　口縁	暗褐色～黒褐色	灰褐色～黒褐色	①隆線の渦巻、横位沈線、交互刺突
49	E	深鉢形　口縁	明褐色～灰褐色	灰褐色	①横位の隆線・沈線、縦沈線
50	E	深鉢形　胴	黄褐色	黄褐色	縄文前期繊維含有土器
51	E	深鉢形　胴上	赤褐色	灰赤褐色	①半隆起線で逆「U」字を描く
52	E	深鉢形　口縁	明褐色～暗灰褐色	明褐色	①横位・楕円の沈線　②縄文横位
53	E	深鉢形　胴	暗赤褐色	灰褐色～暗灰褐色	①半截竹管による横位及び縦の短沈線
54	E	深鉢形　口縁	黄褐色	灰黄褐色	①横位・渦巻等の沈線、交互陰刻、三叉文　②縄文横位
55	E	深鉢形　口縁	濃暗褐色	灰黄褐色～黒褐色	①横位沈線　②縄文横位　③内面口縁ぎわにも縄文

土器番号	出土箇所	器形・部位	色調		①文様 ②地文 ③その他
			外面	内面	
56	E	深鉢形 口縁	茶褐色	黄褐色～暗黄褐色	①短い縦沈線を並列
57	E	深鉢形 胴	黄褐色～暗黄褐色	明茶褐色	①横・縦・方形区画の平行沈線 ②縄文縦位
58	E	深鉢形 胴	暗褐色～黒褐色	灰褐色	①縦・コの字形区画の平行沈線 ②格子目状沈線
59	E	深鉢形 胴上	明茶褐色	明灰褐色	①横位・弧状隆線・沈線、三叉文
60	E	深鉢形 口縁	黄褐色～暗褐色	淡赤褐色	①横位・弧状沈線、連続三角形陰刻
61	E	深鉢形 胴	明褐色	明褐色	①弧状・菱形沈線、棒状具による刺突 ②縄文縦位
62	E	深鉢形 胴	灰褐色	明灰褐色	①縦位・渦巻、沈線 ②結節をもった縄文縦位
63	E	深鉢形 胴	暗灰褐色	灰白色	①沈線による区画
64	E	深鉢形 胴	灰茶褐色	暗灰色	①半截竹管による縦位の押し引き ②結節をもった縄文縦位
65	E	深鉢形 口縁	明褐色	灰褐色	①横位及び方形区画らしい平行沈線 ②口縁に縄文横位
66	E	深鉢形 胴	黒褐色	黒褐色	①半截竹管による縦・方形区画の平行沈線、交互陰刻 ②縄文
67	E	深鉢形 胴上	暗茶褐色	茶褐色	①横位・弧状・楔形沈線 ②縄文縦位
68	E	深鉢形 口縁	茶褐色	暗褐色	①横位・斜沈線
69	E	深鉢形 口縁	黒褐色	黒褐色	①弧状・円形沈線、円形隆帯 ②縄文横位
70	E	深鉢形 口縁	褐色	茶褐色	①玉抱き三叉文、弧状沈線 ②縄文横位
71	E	深鉢形 胴下	赤褐色	暗黒褐色	①縦沈線、波状懸垂沈線 ②結節をもった縄文縦位
72	E	深鉢形 胴上	灰褐色	黒褐色	①横位・Y字状隆線、横位平行沈線 ②縄文
73	E	深鉢形 口縁	灰褐色	黄褐色	①円形隆線、縦横の平行沈線 ②縄文横位
74	E	深鉢形 口縁	灰黒色	赤褐色	①横位・変形方形の沈線 ②縄文
75	E	深鉢形 胴	暗褐色	黒褐色	①弧状・縦沈線 ②結節をもつ縄文縦位
76	E	深鉢形 口縁	褐色	灰褐色	①隆線上に連続爪形
77	E	深鉢形 胴上	褐色	暗褐色	①横位・楔状沈線 ②縄文横位(隆起部のみ)
78	E	深鉢形 胴	黒褐色	褐色	①横位沈線、交互刺突 ②縦・横位の縄文
79	E	深鉢形 胴上	灰褐色	黄褐色	①横位・格子目状斜行沈線
80	E	深鉢形 口縁	褐色	明褐色	①弧状・横位沈線、連続刺突 ②縄文横位
81	E	深鉢形 口縁	茶褐色	褐色	①横・縦位の平行沈線、交互陰刻 ②縄文
82	E	深鉢形 口縁	黒褐色	黒色	①横位沈線、部分的な格子目状斜行沈線
83	E	深鉢形 胴	褐色	黄褐色	①縦位の平行沈線 ②縄文縦位
84	E	深鉢形 口縁	褐色	黒色	①横位沈線、棒状具での連続刺突
85	E	深鉢形 口縁	明褐色	明褐色	①横位沈線、交互陰刻
86	E	深鉢形 胴	茶褐色	褐色	①横位並列・方形半区画の平行沈線
87	E	深鉢形 胴	黒褐色	黒褐色	①Y字形の縦位隆線、弧状の沈線 ②縄文
88	E	深鉢形 胴上	茶褐色	茶褐色	①横位沈線、斜行短沈線 ②縄文
89	E	深鉢形 胴	茶褐色	暗褐色	②撚糸文

図番号 土器番号	出土箇所	器形・部位	色調 外面	色調 内面	①文様 ②地文 ③その他
90	E	深鉢形 胴	褐色	黒色	②撚糸文
91	E	深鉢形 胴	暗茶褐色	灰褐色	①円形・縦位の沈線 ②結節をもつ縄文縦位
92	E	深鉢形 口縁	暗褐色	明褐色	①弧状隆線、三角形状の沈線 ②縄文
93	E	深鉢形 胴	明褐色	明褐色	①縦隆線、平行沈線の方形区画、交互刺突
94	E	深鉢形 胴	黒褐色	褐色	①横位・斜位沈線、交互刺突 ②縄文
95	E	深鉢形 口縁	褐色	明褐色	①横位沈線 ②撚糸文
96	E	深鉢形 胴	暗褐色	黒褐色	①横位・弧状の平行沈線 ②縄文
97	E	深鉢形 口縁	赤褐色	黒褐色	①渦巻状の隆帯、横位沈線
98	E	深鉢形 口縁	暗茶褐色	暗茶褐色	①Y字形の縦位隆線、横位沈線、交互刺突 ②縄文
99	E	深鉢形 口縁	暗灰褐色	暗灰褐色	①折り返し状段、縦の短沈線
100	E	深鉢形？ 口縁	暗褐色	暗褐色	①横位隆線 ②縄文 ③口縁内面にも縄文
101	E	深鉢形 口縁	暗褐色	暗褐色	①横位沈線、三叉文、連続爪形
102	E	深鉢形 胴上	茶褐色	茶褐色	①円形・弧状・区画沈線、三叉文 ②縄文
103	E	深鉢形 口縁	赤褐色～黄褐色	暗赤褐色	①弧状・円形沈線、三叉文 ②縄文
104	E 検出面	深鉢形 口縁	黄褐色～赤褐色	黄褐色～暗黄褐色	①Y字形の隆線、弧状沈線、三叉文 ②縄文
105	E 土器集中区	深鉢形 口縁	暗赤褐色	暗赤褐色	①横位・弧状・円形の沈線、交互陰刻 ②縄文
106	E	深鉢形 口縁	赤褐色～暗赤褐色	赤褐色～暗赤褐色	①弧状・渦巻きの隆線、弧状沈線 ②縄文
107	E	浅鉢形 口縁	暗褐色	黄褐色～暗黄褐色	①横位沈線、交互・連続陰刻
108	E	浅鉢形 口縁	黄褐色	茶褐色	①横位沈線、連続爪形、陰刻
109	E	浅鉢形 口縁	暗褐色	褐色	①内面：連続爪形、交互刺突
110	E	浅鉢形 口縁	黄褐色	茶褐色	①内面：並列・渦の連続爪形、三叉文
111	E	浅鉢形 口縁	灰赤褐色	暗黄褐色	①内面：口縁よりに縄文横位、外面：横位沈線
112	E	浅鉢形 口縁	黒褐色	暗赤褐色～黒褐色	①内面：連続爪形、交互刺突
113	E	浅鉢形 口縁	暗赤褐色～黒褐色	暗赤褐色	①内面：同心円・並列の連続爪形
114	E	浅鉢形 口縁	黄褐色～暗黄褐色	黄褐色	①内面：連続爪形
115	E	浅鉢形 口縁	暗褐色	灰茶褐色	①内面：連続爪形、交互刺突、縄文横位
116	E	浅鉢形 口縁	褐色	茶褐色～黒褐色	①内面：連続爪形
117	E	浅鉢形 口縁	茶褐色	黄褐色～茶褐色	①内面：連続爪形
118	E	浅鉢形 口縁	暗褐色～黒褐色	暗褐色	①内面：横位・渦の連続爪形、縄文横位
119	E	浅鉢形 口縁	茶褐色～黒褐色	茶褐色	①内面：同心円状の連続爪形
120	E	浅鉢形 口縁	黒褐色	茶褐色～黒褐色	①内面：連続爪形、三叉文
121	E	浅鉢形 口縁	茶褐色	茶褐色	①内面：連続爪形、三叉文
122	E	浅鉢形 口縁	茶色	暗褐色	①内面：押し引き状の連続爪形
123	E	浅鉢形 口縁	暗黄褐色～黒褐色	暗赤褐色	①外面：横位沈線、交互陰刻

土器番号	出土箇所	器形・部位	色調 外面	色調 内面	①文様 ②地文 ③その他
124	E	浅鉢形 口縁	褐色	黒褐色	①外面：押し引き状の連続爪形、縄文横位
125	E	浅鉢形 口縁	褐色	暗赤褐色	①外面：連続爪形、交互陰刻、縄文横位
126	E	浅鉢形 口縁	褐色	褐色	①外面：楕円区画隆帯、交互刺突、縄文横位
127	E	浅鉢形 口縁	褐色	褐色	①外面：爪形の交互陰刻、縄文
128	E	浅鉢形 口縁	白橙褐色	白橙褐色	①外面：縄文横位
129	E	浅鉢形 口縁	暗黄褐色～灰褐色	暗灰褐色	①内面：楕円区画・横位沈線
130	E	浅鉢形 口縁	灰茶褐色	灰褐色	①内面：連続爪形、爪形の刺突、縄文
131	E	浅鉢形 口縁	灰茶褐色	灰褐色	①内面：連続爪形
132	E	浅鉢形 口縁	灰褐色	灰褐色	①外面：連続爪形のつく弧状隆帯、連続刺突
133	E	浅鉢形 口縁	灰褐色	明灰褐	①内面：縦位短沈線、楕円区画沈線、交互刺突
134	E	浅鉢形 口縁	明褐色	暗褐色	①外面：縄文横位
135	E	浅鉢形 口縁	灰橙褐色	黒褐色	①外面：楕円区画隆帯上に連続爪形、内面：押し引き状の連続爪形区画
136	E	浅鉢形 口縁	灰褐色	黄灰褐色	①外面：連続爪形、縦横の平行沈線
137	E	有孔鍔付 口縁	暗灰褐色	暗灰褐色	
138	E	有孔鍔付 口縁	明茶褐色	明茶褐色	
139	C地区 小竪穴21	深鉢形 口縁	暗赤褐色	暗赤褐色	①縄文横位
140	C地区 小竪穴21	深鉢形 胴	暗黄褐色	暗灰褐色	①隆線上に連続爪形 ②縄文
141	C地区 小竪穴21	深鉢形 口縁	暗赤褐色	暗褐色	①横位・格子目状斜位沈線
142	E	深鉢形 底部	赤褐色	黒褐色	①縦沈線 ②縄文 ③底面は網代
143	E	深鉢形 底部	暗赤褐色	暗灰褐色	②縄文 ③底面は網代
144	E	深鉢形 底部	暗黄褐色	黒褐色	①縦隆線 ②縄文 ③底面は網代
145	E	深鉢形 底部	灰褐色	暗灰褐色	
146	E	深鉢形 底部	暗灰褐色	黒褐色	
147	E	深鉢形 底部	暗赤褐色	暗褐色	
148	C地区 敷石中	深鉢形 底部	茶褐色	暗灰褐色	②縄文 ③底面は網代
153	D地区 小竪穴36	深鉢形 口縁	暗黒褐色～暗茶褐色	暗赤褐色	①横位・楔形沈線 ②縄文横位
154	C地区 小竪穴12	深鉢形 口縁	赤褐色	暗褐色	①横位沈線・連続陰刻 ②縄文横位
155	D地区 小竪穴40	深鉢形 胴	暗褐色	暗黄褐色	①弧状の隆線
156	D地区 小竪穴49	深鉢形 胴	暗茶褐色～黒褐色	黄褐色～暗黄褐色	①縦沈線 ②縄文
157	D地区 小竪穴41	深鉢形 底部	明茶褐色～暗茶褐色	明灰茶褐色	②縄文 ③底面に網代痕らしきものあり
158	D地区 小竪穴36	浅鉢形 口縁	暗茶褐色～暗黒褐色	明茶褐色～暗茶褐色	①横位沈線、連続爪形
159	C地区 小竪穴 5	深鉢形 底部	淡黄褐色	淡黄褐色	③底面に網代圧痕
160	C地区 小竪穴 5	深鉢形 底部	明黄褐色～淡褐色	明黄褐色～淡褐色	③底面に網代圧痕
161	D地区 小竪穴46	深鉢形 底部	明赤褐色～暗黄褐色	淡灰黒褐色	③底面に網代圧痕

第7表　石器一覧表

石　鏃

No.	出土地区	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	欠損部	石質	型式	備考
1	C区	20.0	16.5	4.0	0.91		黒曜石	Bc	
2	〃	(13.0)	(11.0)	(2.5)	(0.22)	基部	〃	b	
3	E区	10.0	12.0	2.0	0.15		〃	Ac	
4	〃	23.5	13.0	3.0	0.59		〃	Ab	
5	〃	18.0	15.0	3.0	0.42		〃	Ac	
6	〃	16.5	11.0	3.0	0.39		〃	Ab	周囲磨滅
7	〃	14.0	11.0	3.0	0.26		〃	Ab	
8	〃	17.0	14.0	3.0	0.42		〃	Ab	
9	〃	17.0	11.5	4.0	0.49		〃	Ab	
10	〃	31.0	15.0	5.0	1.56		チャート	Ab	
11	〃	21.0	16.0	4.0	1.11		〃	Ac	
12	〃	16.0	15.5	5.0	0.67		黒曜石	Ab	
13	〃	19.0	14.0	4.5	1.11		〃	Ab	
14	〃	20.0	(15.5)	3.5	0.56	片脚端	〃	Aa	
15	〃	33.0	(19.5)	3.5	1.26	片脚	〃	Ac	
16	〃	20.0	(15.0)	3.0	0.57	〃	〃	Ac	
17	〃	18.5	(12.5)	3.0	0.39	〃	〃	Ac	
18	〃	18.5	(12.0)	3.0	0.41	〃	〃	Ab	
19	〃	(25.0)	(17.5)	4.0	1.35	両脚	〃	Ab	
20	〃	(16.0)	(14.0)	4.0	0.72	〃	松脂岩	Ac	
21	〃	(18.0)	(10.0)	3.0	0.42	〃	黒曜石	Ac	
22	〃	(13.0)	(10.0)	2.5	0.25	〃	〃	Ab	
23	〃	(14.0)	(11.0)	3.5	0.40	片脚	〃	Ac	先端再加工
24	〃	(21.0)	(25.0)	4.0	1.51	先端	〃	Ab	
25	〃	(18.0)	12.0	3.5	0.64	〃	〃	Ac	
26	〃	(21.0)	(13.0)	4.0	0.68	先端・片脚	〃	Ab	
27	〃	28.0	20.0	5.0	2.68		チャート	Bc	
28	〃	(12.5)	20.0	3.5	0.86	先端	黒曜石	B	
29	〃	26.0	15.5	5.0	1.53		〃	Cc	
30	〃	22.0	18.0	7.0	2.23		〃	Cc	
31	〃	22.5	19.0	6.0	2.24		〃	Cc	
32	C区	29.5	11.0	4.0	0.88		〃	Dc	
33	〃	23.5	9.5	2.0	0.31		〃		石鏃を再加工

石　錐

34	C区	43.0	12.5	8.5	3.45		黒曜石	Aa	
35	E区	29.5	9.5	6.5	1.51		〃	Ba	
36	〃	39.0	16.0	9.5	3.22		〃	Ab	
37	表採	20.5	10.0	8.0	0.98		〃	Ba	
38	〃	26.0	8.5	4.0	0.79		〃	Ba	先端磨滅
39	〃	29.5	16.0	6.0	1.80		〃	Ab	錐部2
40	〃	(8.5)	(14.0)	5.0	0.35	つまみ部	〃	Aa	

石　匙

41	E区	(28.0)	21.0	7.0	3.02	つまみ部	黒曜石		
42	〃	31.0	51.0	8.5	13.51		チャート		

スクレイパー

43	E区	49.2	22.0	6.0	6.15		チャート	Aa＋Cb	
44	〃	34.0	41.0	9.0	16.51		〃	Aa	
45	〃	17.0	22.5	4.5	1.33		黒曜石	Ab	
46	〃	17.0	29.0	6.0	2.09		〃	Bb	
47	〃	15.0	45.0	9.0	6.03		チャート	Ba	

No.	出土地区	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	欠損部	石質	型式	備考
48	表採	(10.0)	19.0	(3.0)	0.54	片身	黒曜石	Aa	
49	〃	(15.5)	(14.0)	(4.0)	0.74	〃	〃	Aa	

ピエス・エスキーユ

50	E区	39.0	16.0	6.0	2.66		黒曜石		
51	〃	31.5	10.5	7.0	1.44		〃		
52	〃	14.5	9.0	4.0	0.36		〃		

使用痕のある剥片

53	E区	14.5	30.0	4.0	1.82		黒曜石	Ab+2Bb	
54	〃	12.0	18.5	3.0	0.50		〃	Ab	
55	〃	28.5	18.5	6.0	1.93		〃	Aa+Cb	
56	表採	32.5	19.0	8.5	5.67		〃	Ab	
57	〃	13.5	27.0	6.0	1.54		〃	Cb	

打製石斧

58	C区	7.9(cm)	4.8(cm)	1.7(cm)	68.2		泥質頁岩	IA	
59	〃	(5.9)	4.2	1.5	40.0	頭部	〃	IB	
60	〃	(5.3)	5.9	1.3	46.9	頭～胴部	〃	B	
61	〃	11.6	5.4	2.0	113.7		〃	IC	
62	〃	8.8	4.7	1.7	83.1		〃	IC	頭部に使用痕
63	〃	9.9	6.9	2.6	216.5		頁岩	ID	
64	〃	(6.6)	3.4	1.5	41.2	頭部	泥質岩	IIIA	
65	D区	(5.0)	4.6	1.0	29.2	頭～胴部	〃	B	
66	〃	(8.0)	5.0	1.6	64.5	刃部	〃	I	
67	E区	11.7	6.4	2.9	186.6		〃	IA	
68	〃	11.0	4.7	2.2	159.5		頁岩	〃	
69	〃	10.2	5.2	1.6	96.5		泥岩	〃	
70	〃	9.0	4.5	2.6	70.6		〃	〃	
71	〃	6.9	4.4	1.4	43.1		砂質粘板岩	〃	
72	〃	6.7	3.7	2.1	48.6		〃	〃	
73	〃	(6.9)	4.7	1.2	48.0	頭部	〃	〃	
74	〃	7.0	4.7	1.6	116.9		〃	IB	
75	〃	11.3	4.8	2.0	108.4		硬砂岩	〃	側辺磨耗
76	〃	10.8	5.2	1.3	98.3		粘板岩	〃	
77	〃	10.6	4.4	1.3	89.3		〃	〃	
78	〃	10.7	4.4	2.0	88.5		〃	〃	横刃か？
79	〃	9.6	4.3	1.7	76.4		〃	〃	片側辺のみ磨耗
80	〃	(7.6)	3.9	1.1	53.9	頭部	〃	〃	
81	〃	9.3	5.9	1.7	104.6		砂質頁岩	〃	
82	〃	10.4	4.3	1.7	86.5		〃	〃	
83	〃	11.9	4.6	2.6	173.9		粘板岩	〃	
84	〃	(10.3)	4.9	1.8	108.9	頭端部	泥岩	〃	
85	〃	(7.7)	5.5	2.3	140.9	頭～胴部		IC	
86	〃	12.6	5.3	1.6	116.1		粘板岩	〃	
87	〃	10.2	6.1	2.3	109.7		泥岩	〃	
88	〃	10.3	4.7	1.6	106.4			〃	
89	〃	9.7	4.9	2.1	94.0			〃	
90	〃	11.4	4.9	2.2	117.8		泥質頁岩	〃	
91	〃	9.8	5.0	1.4	83.6		粘板岩	〃	
92	〃	7.9	5.0	1.4	59.9		頁岩	〃	
93	〃	8.1	5.1	1.3	62.9			〃	
94	〃	8.3	4.6	0.7	48.1		泥岩	ID	横刃か？
95	〃	8.4	4.2	1.5	64.8		粘板岩	〃	
96	〃	10.9	5.3	1.7	122.6		砂質頁岩	〃	

No.	出土地区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部	石質	型式	備考
97	E区	8.6	2.9	1.0	41.7			ID	
98	〃	6.8	3.8	1.8	43.6		粘板岩	〃	風化激しい
99	〃	10.6	4.1	2.2	97.1		緑色凝灰岩	〃	
100	〃	12.0	5.1	1.6	98.1		砂質粘板岩	〃	
101	〃	11.3	5.8	2.3	127.9		泥岩	〃	
102	〃	11.3	5.8	2.3	127.9		砂質頁岩	〃	
103	〃	(7.4)	4.8	1.2	47.0	頭部	粘板岩	〃	
104	〃	10.2	5.6	1.1	72.1		〃	IIA	風化激しい
105	〃	7.1	(4.1)	1.5	45.8	頭端部	泥岩	〃	
106	〃	(5.7)	5.1	0.9	35.3	頭～胴部	砂質粘板岩	〃	
107	〃	10.9	5.8	4.0	246.2		粘板岩	IIB	
108	〃	10.0	5.2	2.5	129.9	頭端部	砂質頁岩	IIC	
109	〃	10.7	5.2	1.4	118.5		泥岩	IID	
110	〃	7.3	5.3	2.3	97.2		緑色凝灰岩	〃	
111	〃	10.6	4.5	1.9	106.7		粘板岩	IIIA	風化激しい
112	〃	10.0	5.1	1.9	145.6		〃	〃	
113	〃	11.6	4.9	1.7	107.7		〃	〃	
114	〃	9.8	5.7	1.9	112.7		〃	〃	
115	〃	8.6	5.7	1.5	84.5			〃	
116	〃	8.4	4.6	1.8	86.1		泥岩	IIIB	
117	〃	9.9	4.0	2.1	95.5		粘板岩	〃	頸部両面にも使用痕
118	〃	10.1	4.3	1.6	84.8		粘板岩質頁岩	〃	
119	〃	9.3	4.0	1.7	76.4		粘板岩	〃	
120	〃	9.0	4.6	2.9	145.4		〃	〃	
121	〃	10.6	5.0	1.9	104.8		泥岩	〃	
122	〃	9.3	5.4	1.1	84.4			〃	
123	〃	9.7	3.9	1.7	93.5		砂質粘板岩	〃	頭部上面敲打痕
124	〃	7.8	4.1	1.0	40.1	頭端部	泥岩	〃	
125	〃	(7.0)	4.2	0.9	40.9	頭部	泥質頁岩	〃	
126	〃	(8.5)	4.7	1.5	92.2	〃	粘板岩	〃	
127	〃	13.2	5.2	2.6	218.5		泥岩	IIIC	縦、横位に線条痕
128	〃	11.5	5.1	1.3	117.4		〃	〃	
129	〃	11.0	(4.5)	1.4	81.0	頭端部	砂質頁岩	〃	
130	〃	10.3	5.3	2.5	153.0		石英閃緑岩	〃	
131	〃	7.7	3.7	1.9	84.2		泥質粘板岩	IIID	
132	〃	9.8	6.0	2.1	153.6			〃	
133	〃	7.8	4.5	1.6	66.8		砂質粘板岩	〃	
134	〃	(8.4)	5.0	2.1	116.5	頭部	粘板岩	〃	
135	〃	(9.6)	4.4	1.7	76.4	刃部		I	
136	〃	(10.1)	4.3	1.6	67.1	〃		〃	
137	〃	(7.2)	4.7	1.7	57.9	胴～刃部	粘板岩	〃	
138	〃	(6.4)	4.9	1.4	45.8	〃	泥岩	〃	
139	〃	(9.4)	5.4	2.2	126.1	〃		II	
140	〃	(5.8)	5.7	1.3	60.2	胴～頭・刃部	粘板岩	〃	
141	〃	(7.8)	4.0	1.7	56.7	刃部	泥質頁岩	III	
142	〃	(9.1)	5.2	1.9	85.6	頭部・刃部	粘板岩	〃	
143	〃	(8.6)	4.5	1.4	70.8	頭端部・刃部	〃	〃	
144	〃	(9.9)	3.8	1.6	69.3	頭部	〃	〃	
145	〃	(9.8)	6.0	2.1	153.6	頭部・刃部	砂質頁岩	〃	
146	〃	(7.3)	5.0	1.9	76.1	胴～刃部	粘板岩	III	
147	〃	(7.6)	5.2	1.5	66.6	刃部	砂質粘板岩	II	
148	〃	(7.1)	4.3	1.5	48.6	頭部	泥岩	A	
149	〃	(3.9)	4.3	0.8	15.9	頭～胴部	粘板岩	C	
150	〃	(4.4)	4.3	0.8	28.8	〃	〃	D	

No.	出土地区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部	石質	型式	備考
151	E区	(6.5)	4.2	1.3	43.7	頭部	頁岩	D	
152	F区	(8.8)	5.8	2.3	137.3	頭端部	泥質頁岩	III A	
153	〃	14.2	5.3	2.0	159.0		泥岩	III C	
154	C区	10.0	4.7	3.0	140.7		泥質頁岩	I B	

横刃型石器

155	E区	4.2	12.1	1.3	72.5		泥岩	A	
156	〃	3.6	12.3	0.9	57.0		〃	〃	
157	〃	3.9	10.0	1.7	63.7		粘板岩	〃	風化激しい
158	〃	5.7	(10.2)	0.8	54.8	側端部	粘板頁岩	〃	
159	〃	3.2	6.4	0.6	17.0		〃	〃	
160	〃	3.6	7.0	1.5	33.9		頁岩	〃	
161	〃	3.4	(6.7)	9.5	25.1	側端部	泥岩	〃	
162	〃	6.8	8.9	0.8	80.4		砂岩	〃	
163	〃	6.6	(5.8)	1.3	101.1	半身部	〃	〃	
164	〃	3.6	(5.3)	1.1	27.7	〃	砂質頁岩	〃	
165	〃	4.5	13.4	1.5	77.1		〃	B	
166	〃	5.2	9.0	1.2	49.4		粘板岩	〃	
167	〃	5.4	8.0	1.5	63.8		泥岩	〃	
168	〃	4.2	7.2	0.6	27.3		砂質粘板岩	〃	
169	〃	3.5	9.2	1.6	63.3			〃	
170	〃	5.5	(8.8)	1.4	69.8	背端・刃端部	緑色凝灰岩	〃	
171	〃	5.1	(4.2)	0.7	20.6	半身部	泥岩	〃	
172	〃	4.4	(5.3)	0.9	25.8	〃	砂質粘板岩	〃	
173	〃	5.3	11.3	1.2	159.0		チャート	〃	未製品か
174	〃	4.5	7.7	1.1	48.5		泥質頁岩	C	
175	〃	4.5	7.6	1.5	68.1			〃	
176	F区	4.3	8.6	0.9	31.2		泥岩	B	
177	G区	5.2	9.2	1.1	59.7		〃	B・C	

その他の打製石器

178	E区	10.4	8.4	1.9	203.2		粘板岩		
179	〃	8.2	8.9	2.9	181.1		砂質頁岩		
180	〃	6.6	6.5	1.5	45.7		泥質粘板岩		
181	〃	6.3	7.3	2.9	85.6		粘板岩		
182	〃	6.8	8.3	1.3	75.3		泥岩		
183	〃	6.5	5.0	1.1	35.9		泥質頁岩		
184	〃	2.4	8.3	0.9	20.3		泥岩		
185	〃	6.3	(5.2)	0.7	27.4	頭端部	粘板頁岩		
186	〃	10.1	6.5	3.5	277.2				
187	〃	4.7	9.6	2.1	164.1				

石錘

188	C区	5.9	2.9	1.4	42.2		緑泥岩		

磨製石斧

189	C区	5.0	2.8	1.0	26.3		蛇紋岩		
190	D区	10.4	6.1	2.8	304.9		砂岩		先端敲打
191	E区	12.5	6.7	2.1	355.0		蛇紋岩		
192	〃	(5.2)	(1.5)	(3.1)	60.8	大半			

敲打器・凹石・磨石

193	E区	8.5	5.5	2.7	199.8			A	
194	〃	11.8	6.6	4.4	418.0		石英閃緑岩	〃	
195	〃	11.8	7.3	3.4	362.0		〃	〃	
196	〃	11.7	7.6	5.5			砂岩	〃	

No.	出土地区	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	欠損部	石質	型式	備考
197	E区	9.9	5.7	4.4	342.0		砂岩	A	
198	〃	6.8	5.8	3.3	169.7		〃	B	
199	〃	6.5	9.3	5.7	578.0		石英閃緑岩	A＋B	
200	〃	8.2	5.9	3.2	232.9		〃	〃	
201	〃	13.7	10.9	5.6	1042.0		砂岩	〃	
202	〃	12.4	7.8	4.2	495.0		〃	〃	
203	〃	10.3	6.4	5.6	502.0		〃	〃	
204	〃	9.6	4.1	3.7	214.1		〃	〃	
205	〃	(8.5)	(5.8)	4.5	247.4	一部	レキ岩	〃	
206	〃	(10.1)	6.5	3.2	330.0	〃		〃	
207	〃	(6.5)	(7.3)	3.5	176.0		安山岩	A＋B＋C	
208	〃	8.5	10.5	6.2	668.0		〃	〃	
209	〃	8.7	8.6	5.1	432.0		レキ岩	〃	
210	〃	11.5	8.8	9.0	1238.0		石英閃緑岩	D	
211	〃	11.0	5.8	4.6	378.0		安山岩	C＋D	
212	〃	7.8	7.4	5.7	510.0		砂岩	〃	
213	〃	(5.4)	7.1	(4.2)	218.5	一部	〃	〃	
214	〃	6.6	6.0	4.8	240.2		安山岩	〃	
215	〃	5.9	5.9	5.3	289.7		〃	A＋C＋D	
216	〃	9.7	6.0	5.4	440.0		砂岩	A＋B＋D	
217	〃	7.1	5.0	5.3	282.8		〃	B＋C＋D	
218	〃	14.3	8.0	5.4	782.0		安山岩	A＋B＋C＋D	
219	F区	9.1	5.7	3.4	257.3		石英閃緑岩	B＋C	

石　皿

220	D区	(10.2)	(13.8)	3.6		半分	安山岩		
221	E区	(16.1)	(25.5)	(7.7)		大半	輝石安山岩		
222	〃	(18.8)	(9.6)	4.1		約$\frac{3}{4}$	安山岩		
223	〃	(15.9)	(10.7)	8.4		大半	輝石安山岩		

台　石

224	E区	27.4	7.8	5.8					

図　　版

図版一　C地区

北東より

北西より

図版二　D地区

北より

南東より

図版三　E地区

西より

図版四　E地区

東より

土器集中箇所附近

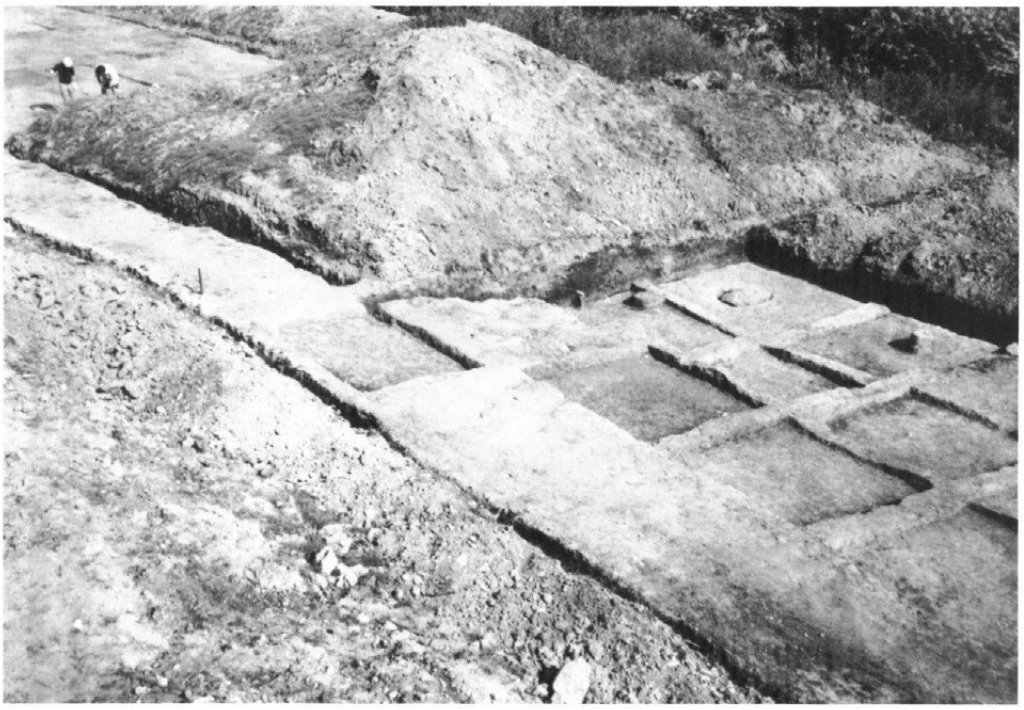
図版五　E・F地区全景

E地区北より

F地区

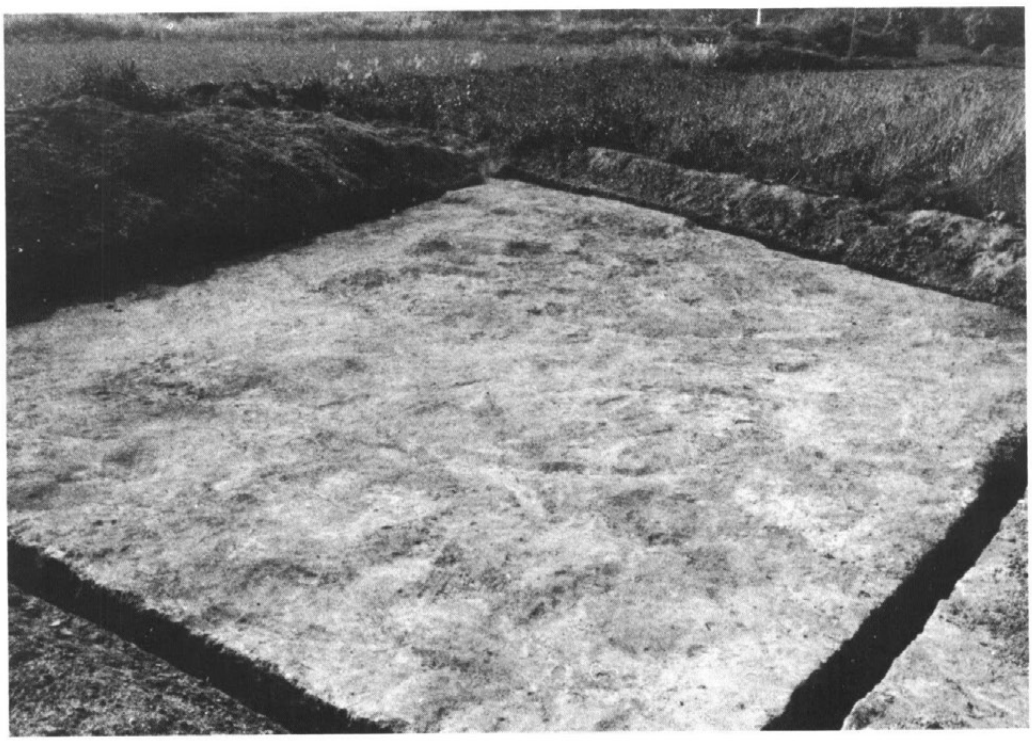
図版六　F地区

東より



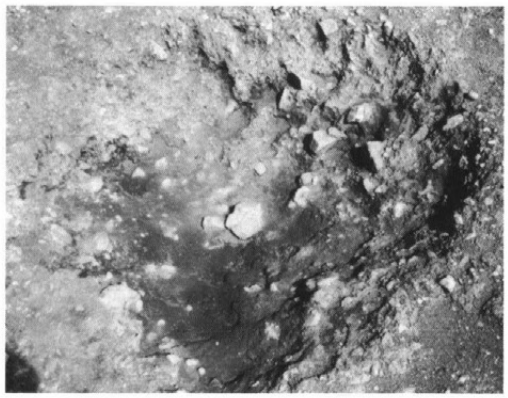
F 地区西端部

F 地区西より

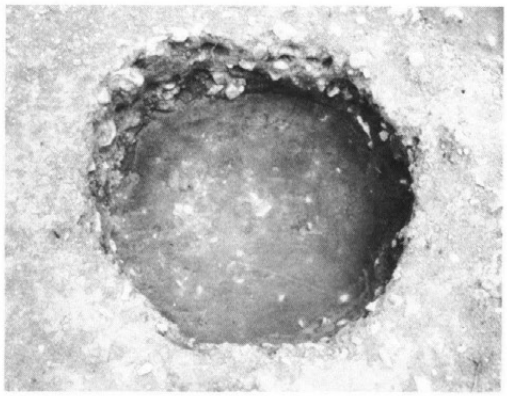


G 地区

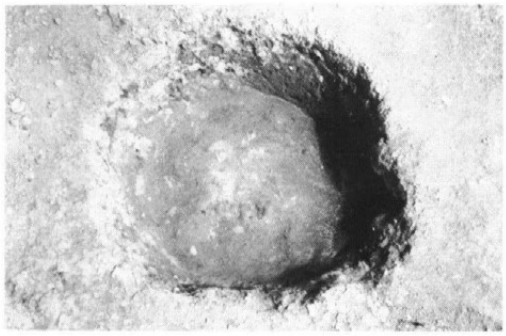
図版八　小竪穴(1)



5

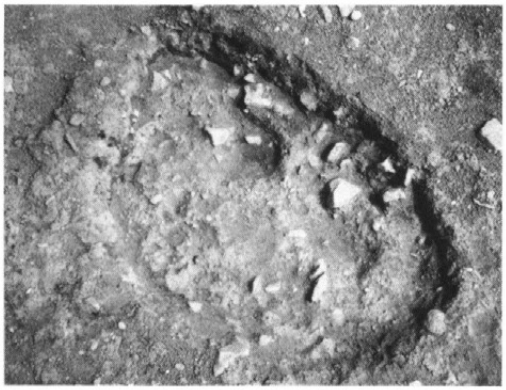


7

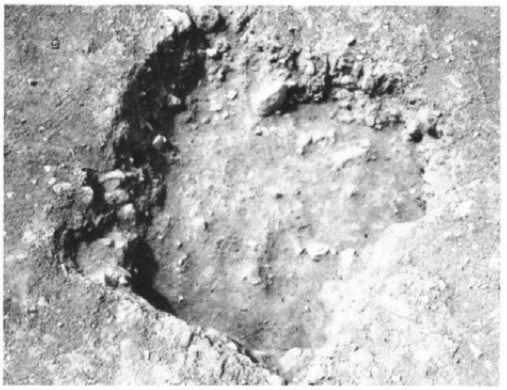


6

9



12

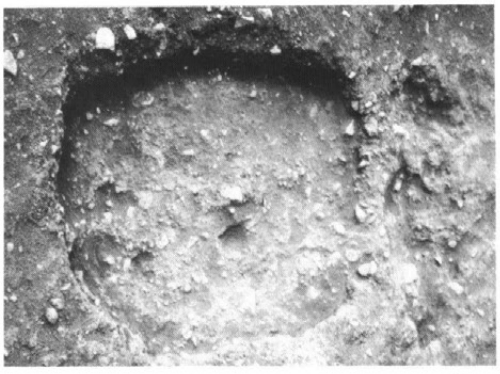


13

10

14

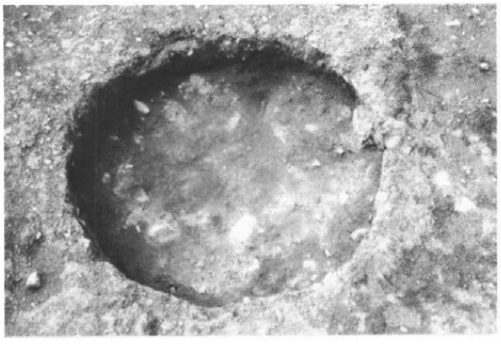
15



16

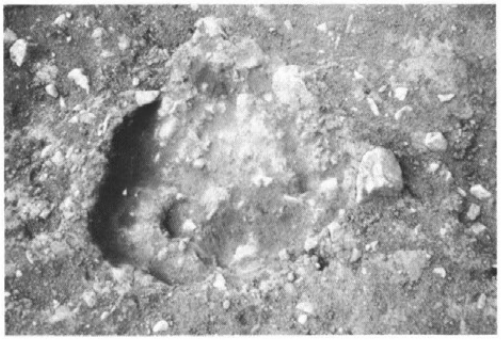
17

18

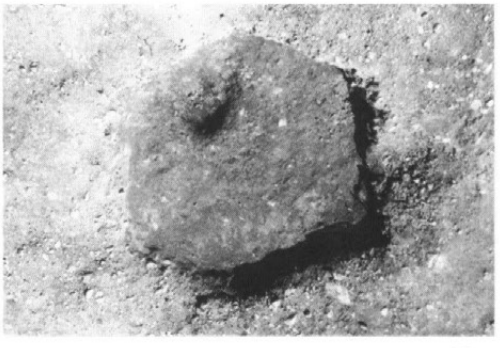


20

21



24



25

図版十　小竪穴(3)

27

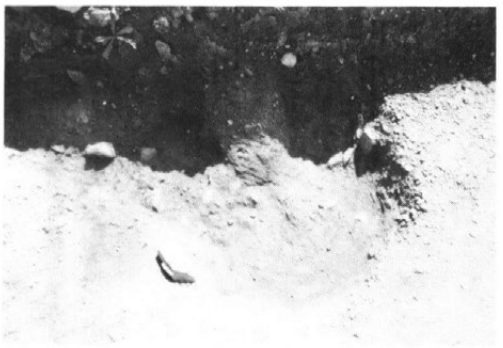
28

29

31

34

40



41

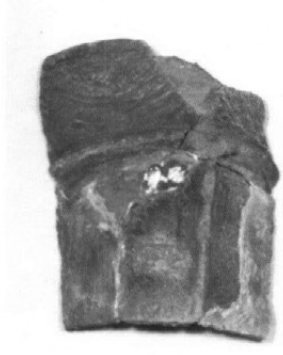
50

1

5

2

6



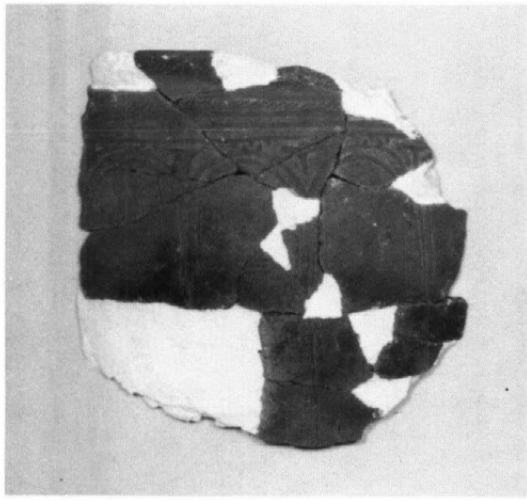
3

4

7

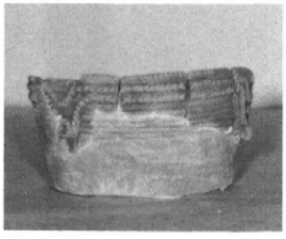
8

図版十二　土器(2)

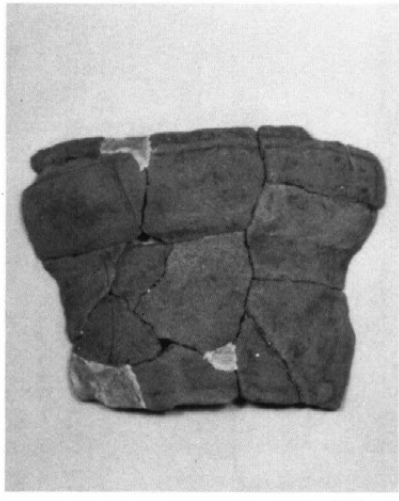


9

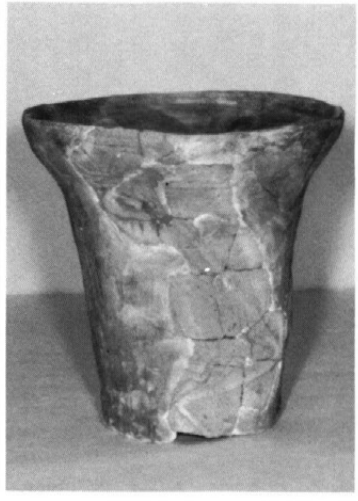
15



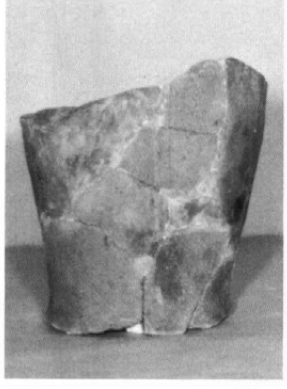
13



149

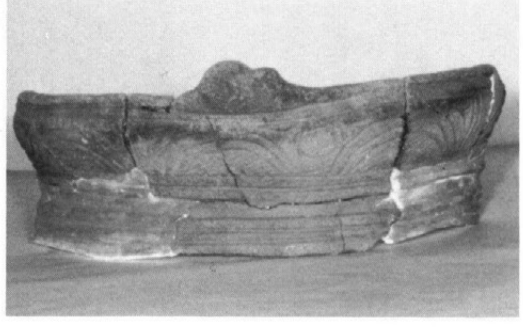


152

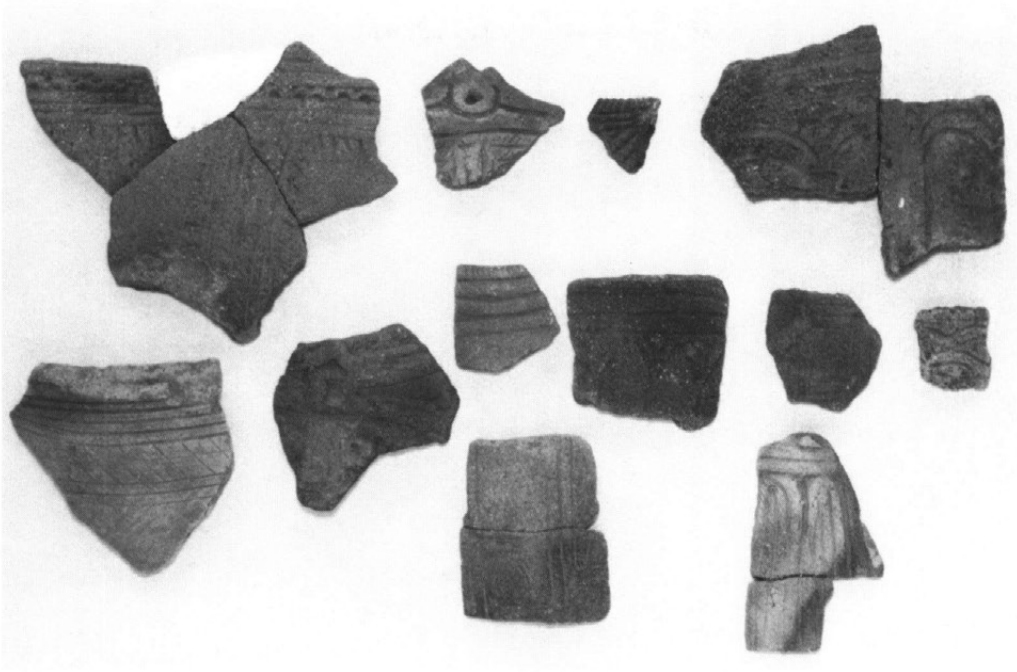


19

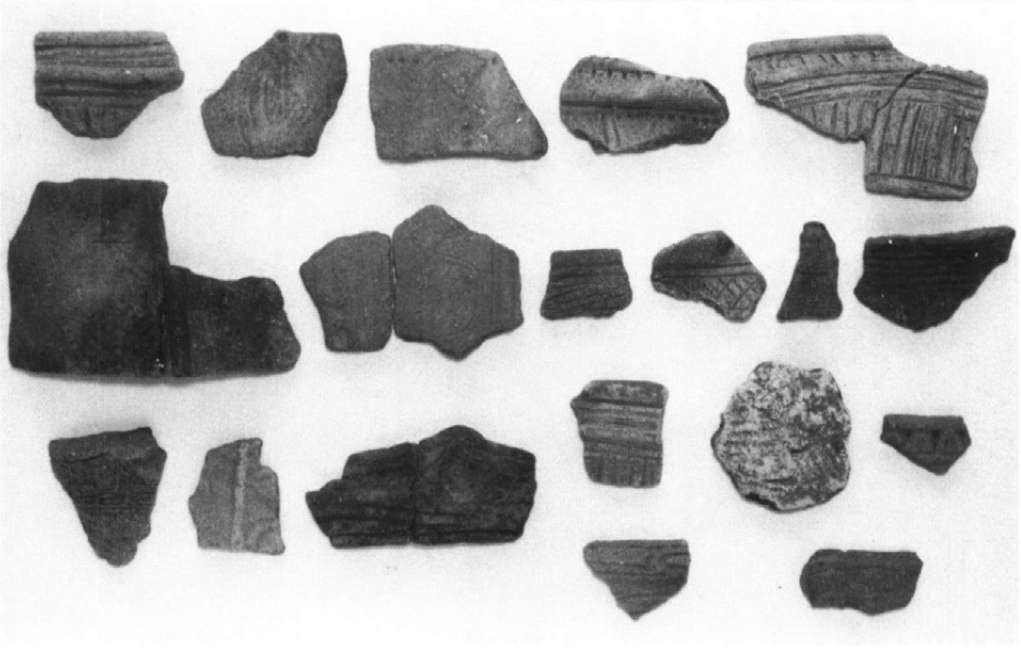
10



17

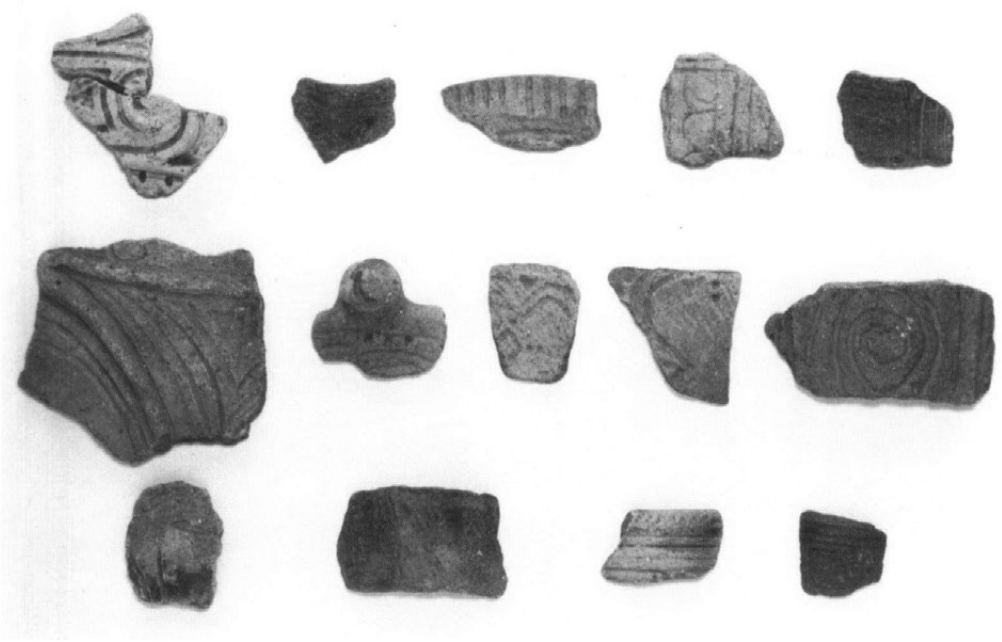


23～34



35～53

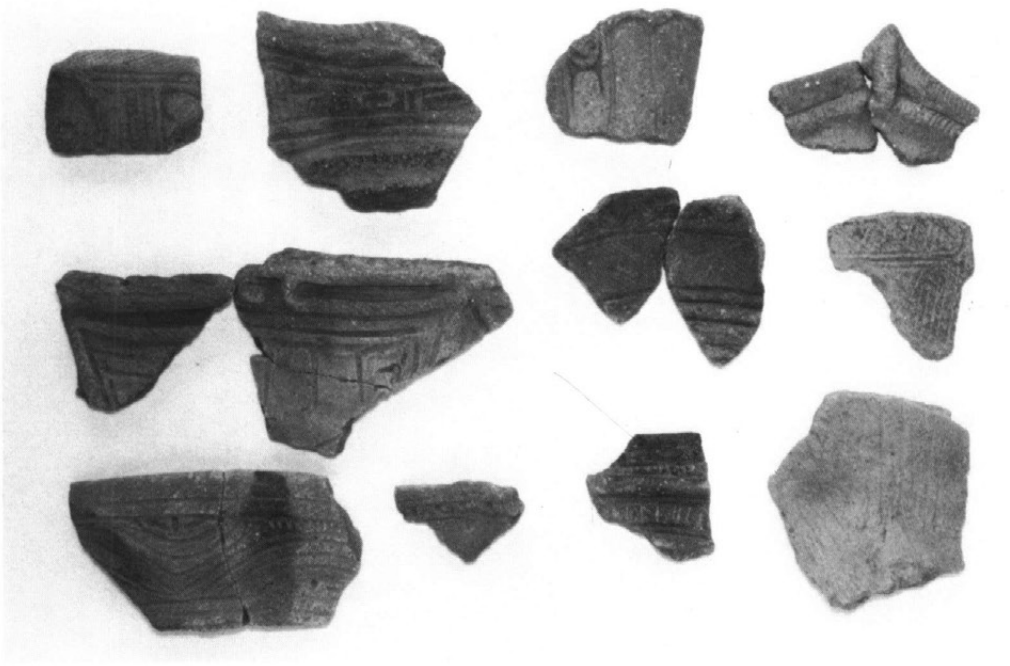
図版十四　土器(4)



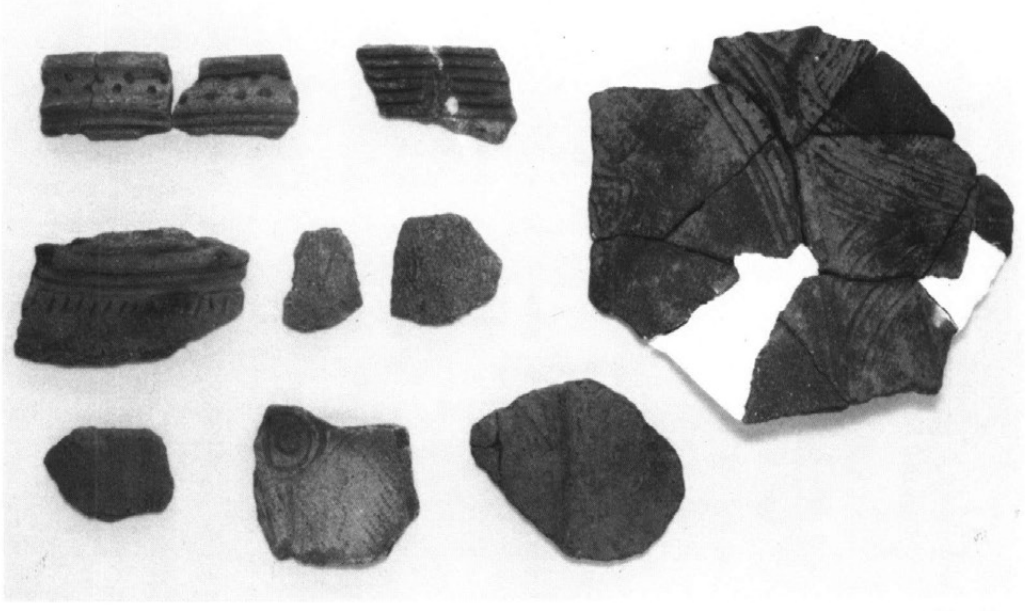
54～66

67～72

図版十五　土器(5)



73～83



84～91

図版十六　土器⑥

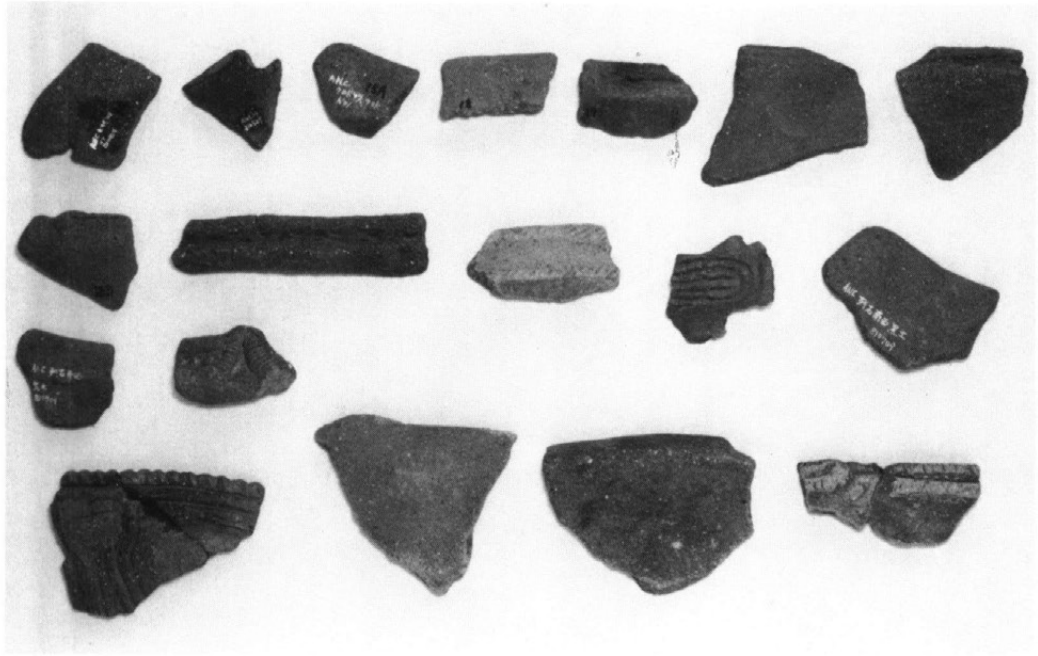
92～102

103～106

107～118外面

同内面

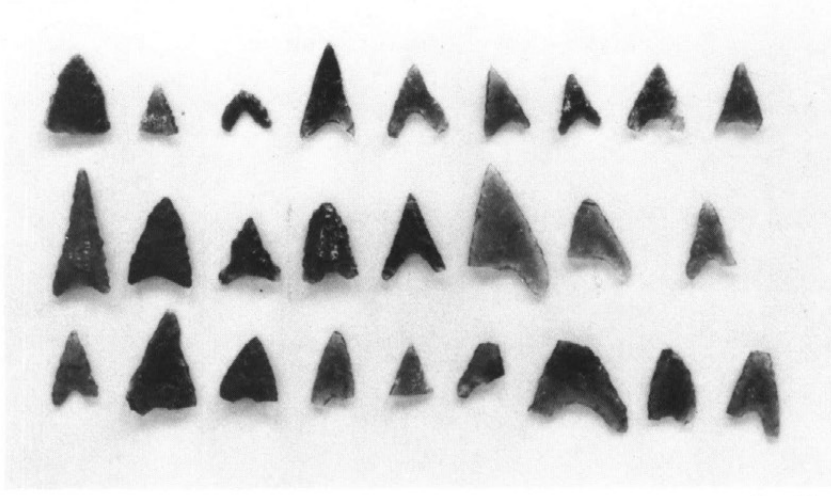
図版十八　土器(8)



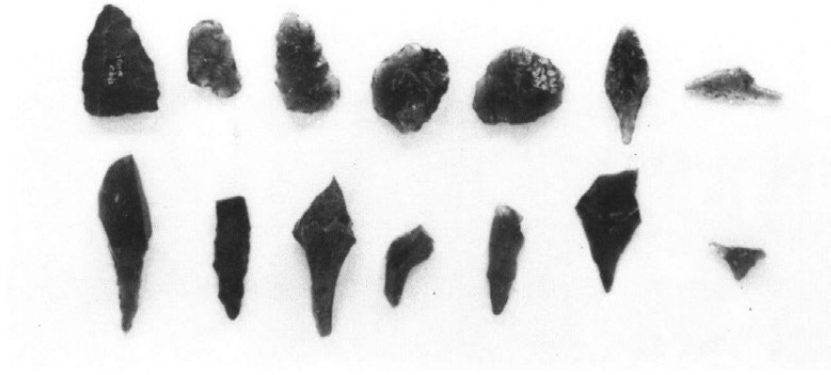
119～136外面

同内面

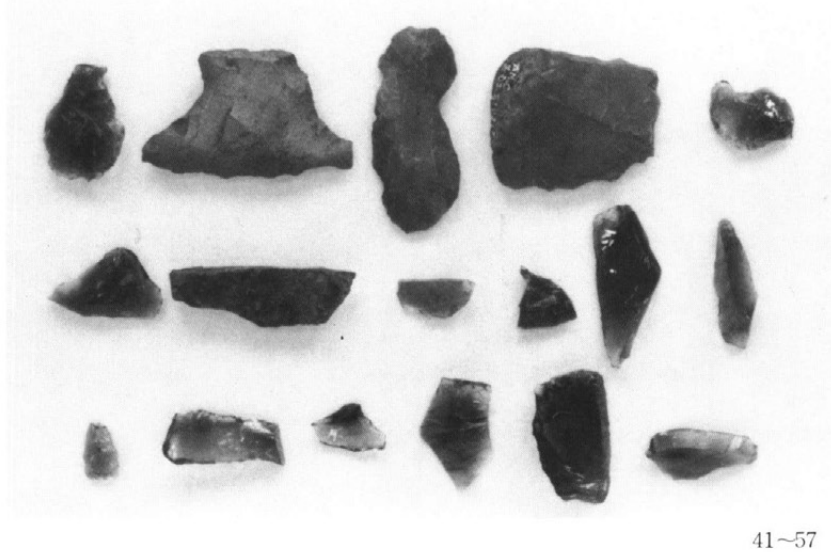
図版十九　石器(1)



1～26

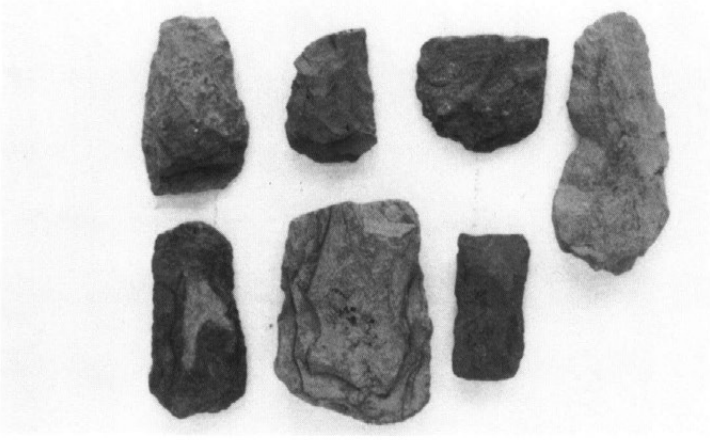


27～40



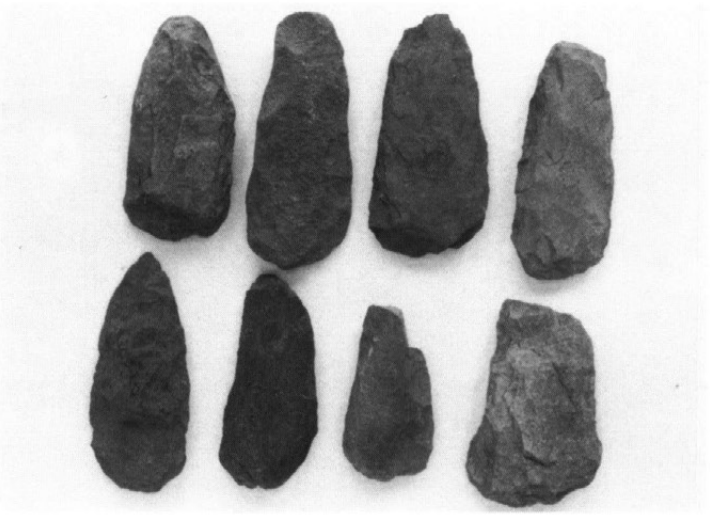
41～57

図版二十　石器(2)

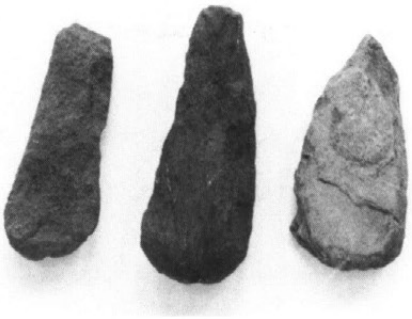


58～64

65～73

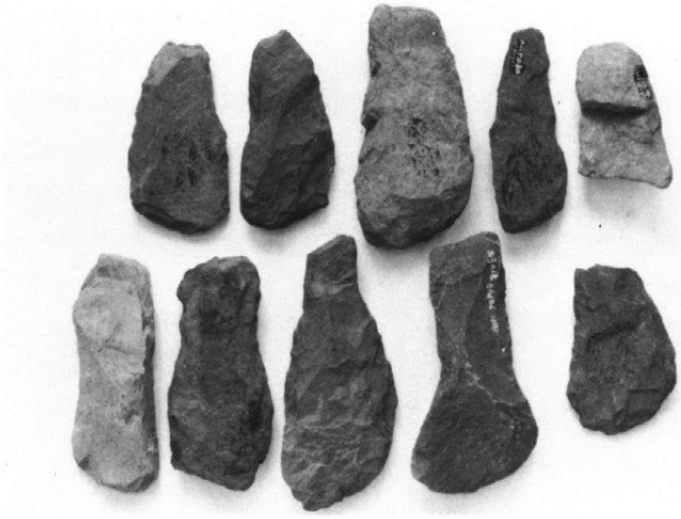


74～81



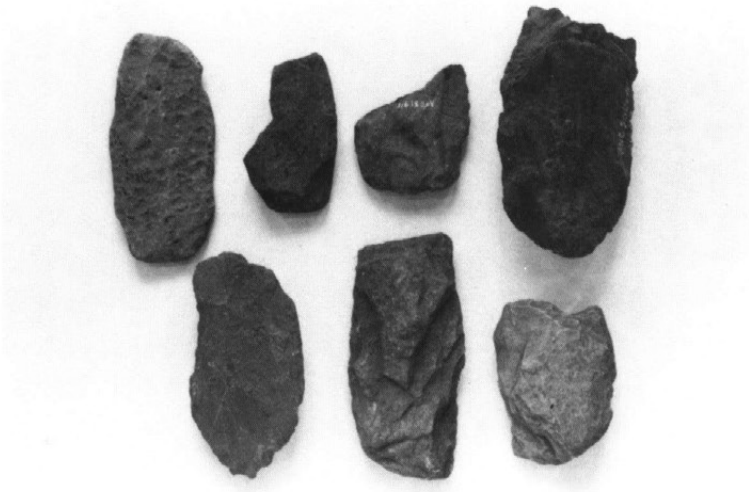
82～84

85～93

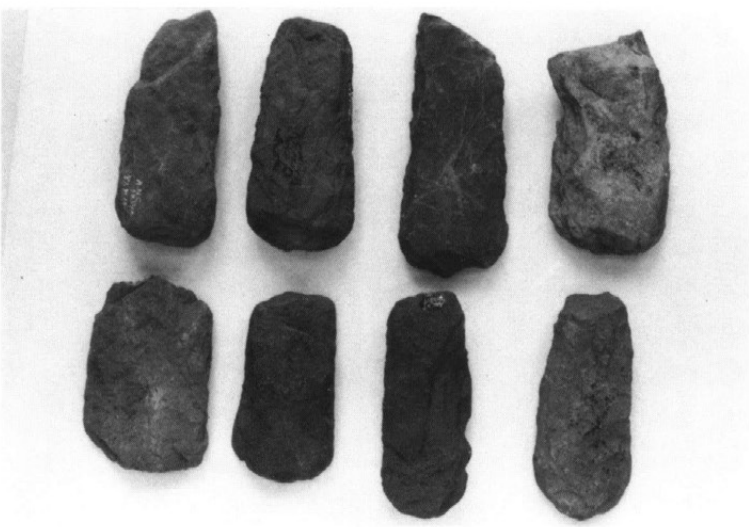


94～103

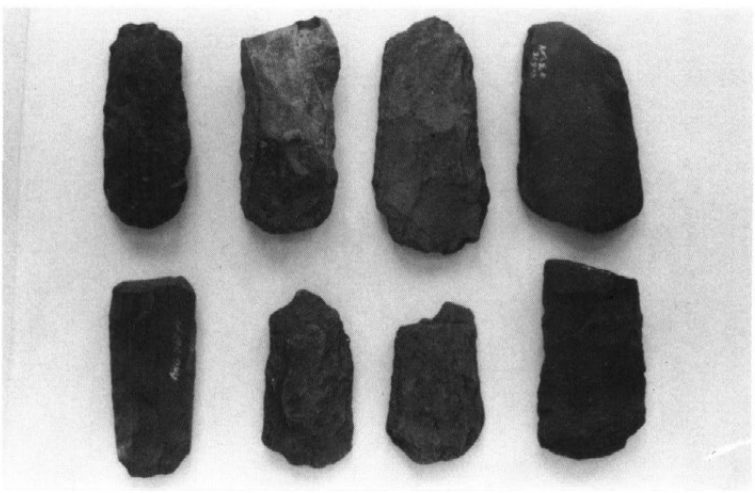
図版二十二　石器(4)



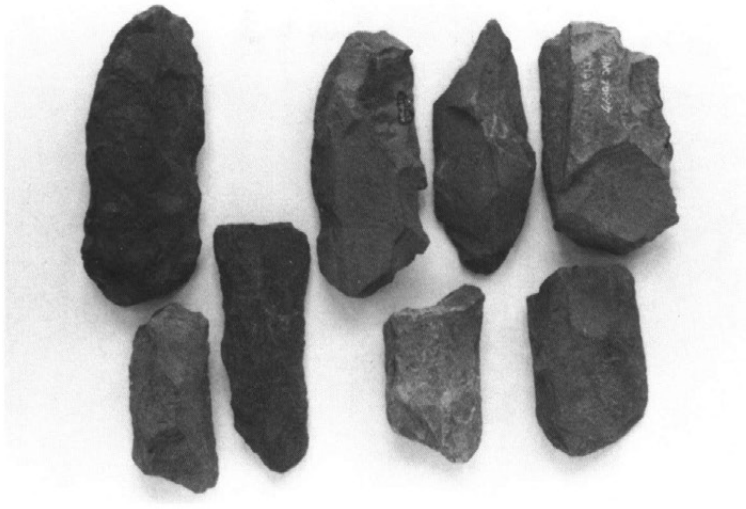
104～110



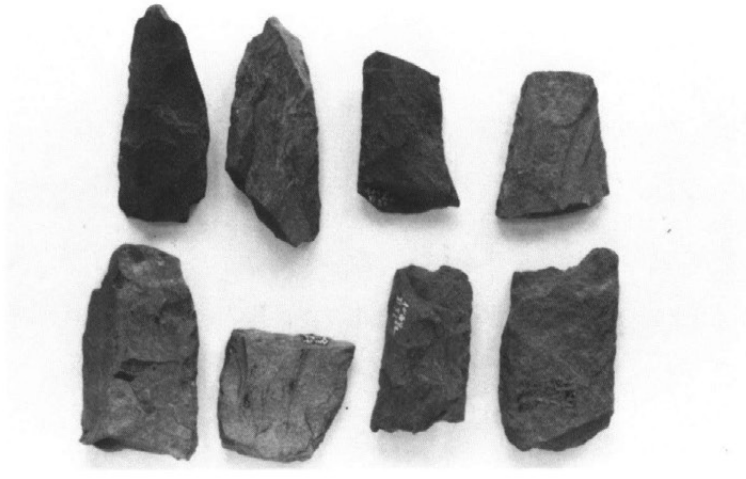
111～118



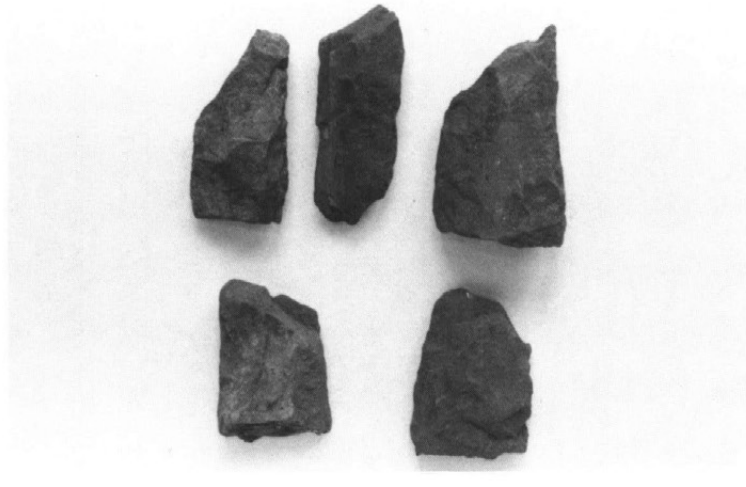
119～126



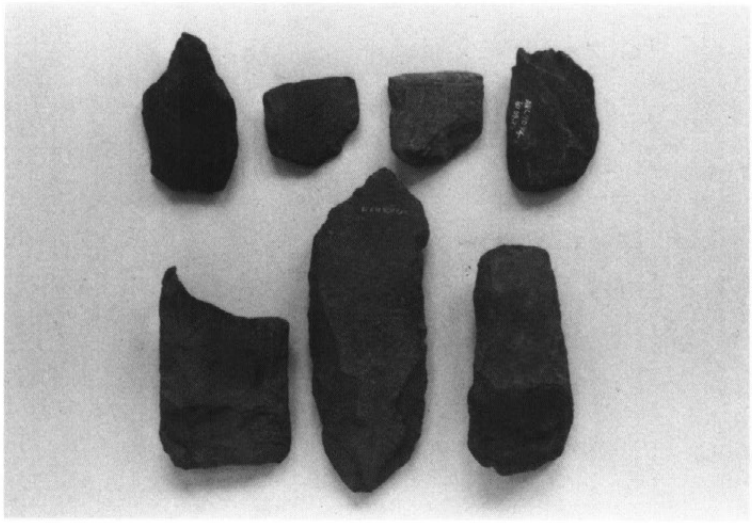
127～ 134



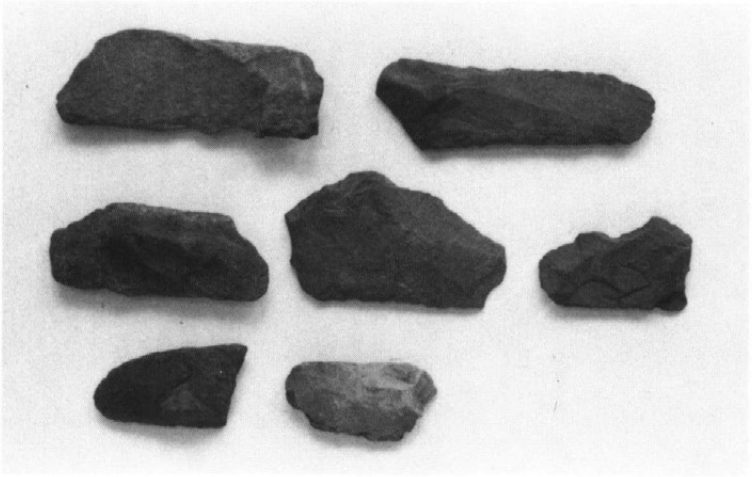
135～142



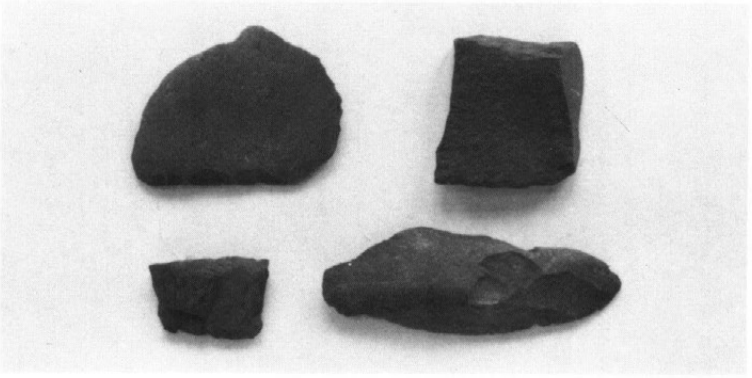
143～147



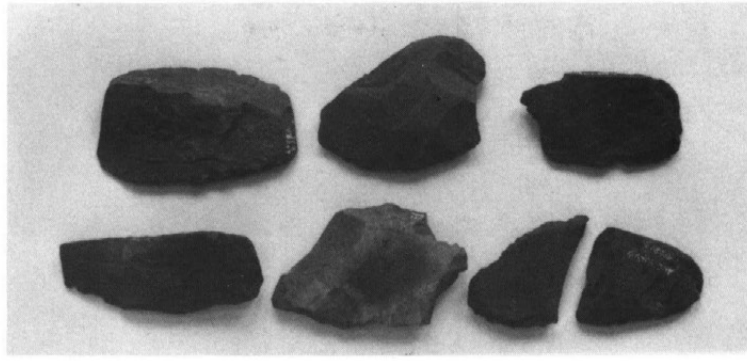
148～154



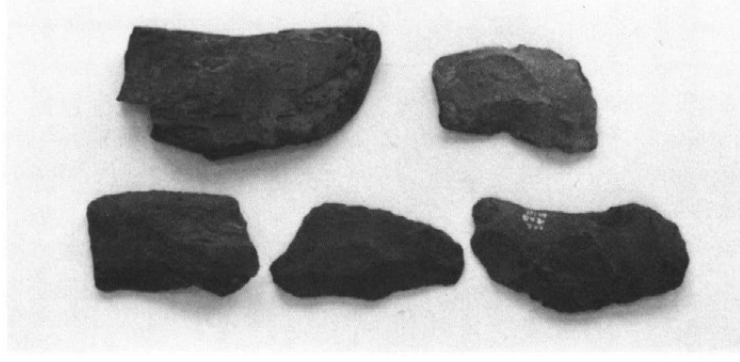
155～161



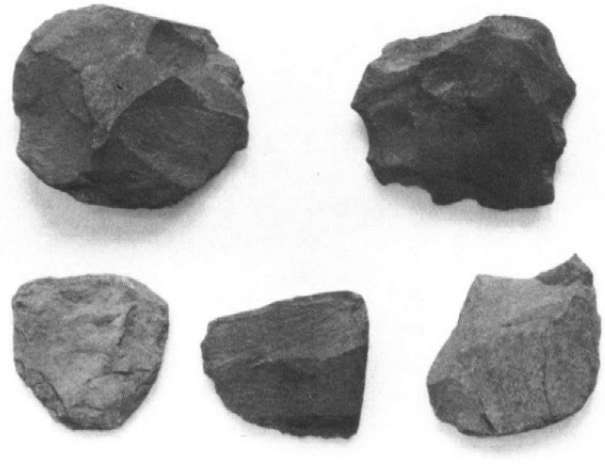
162～165



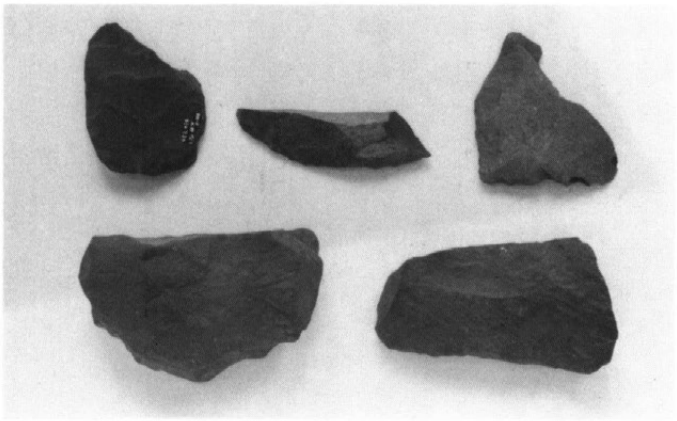
166～172



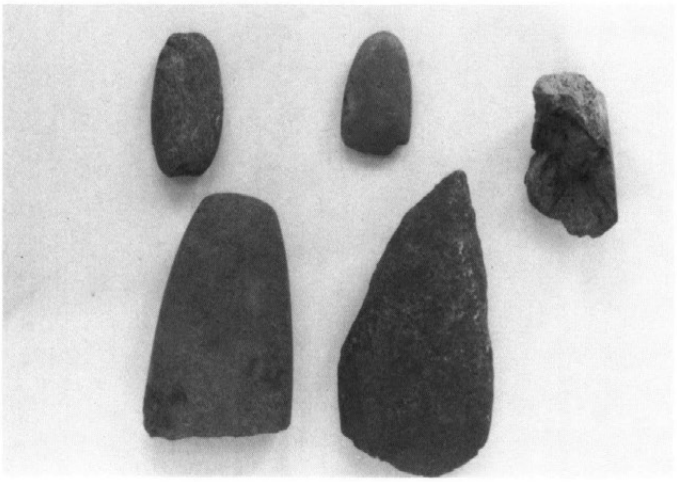
173～177



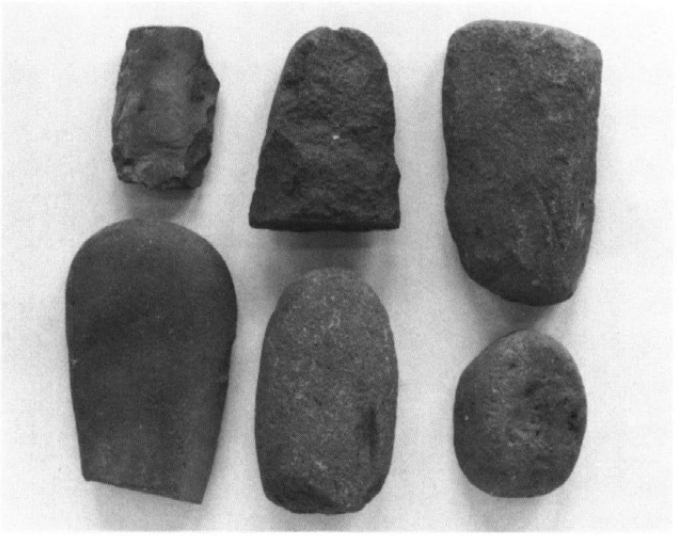
178～182



183～187

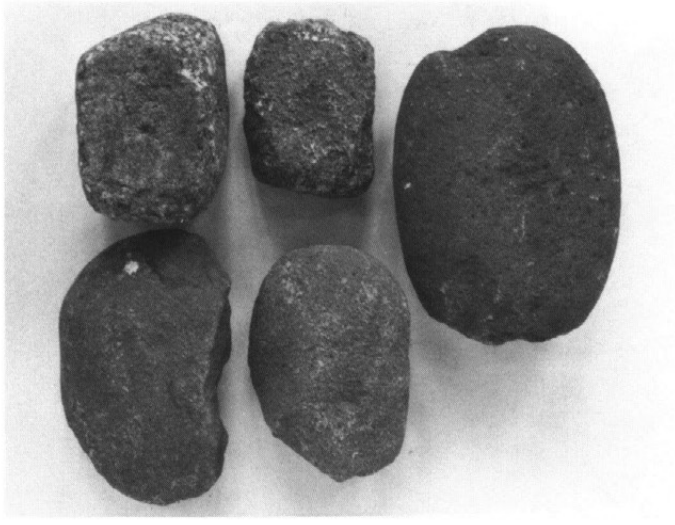


188～192

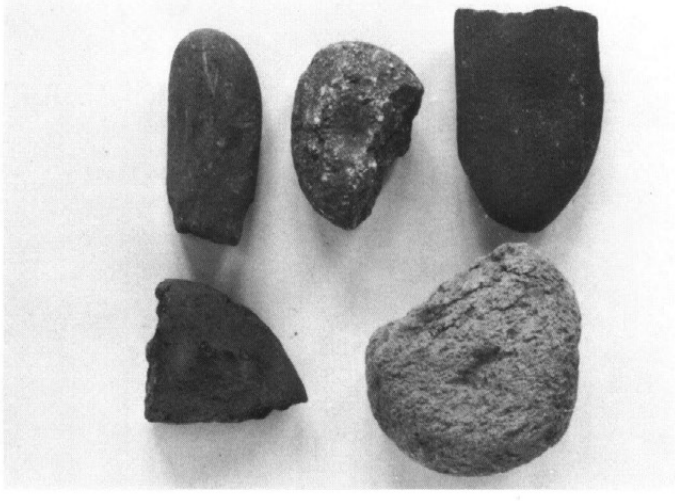


193～195、197、198

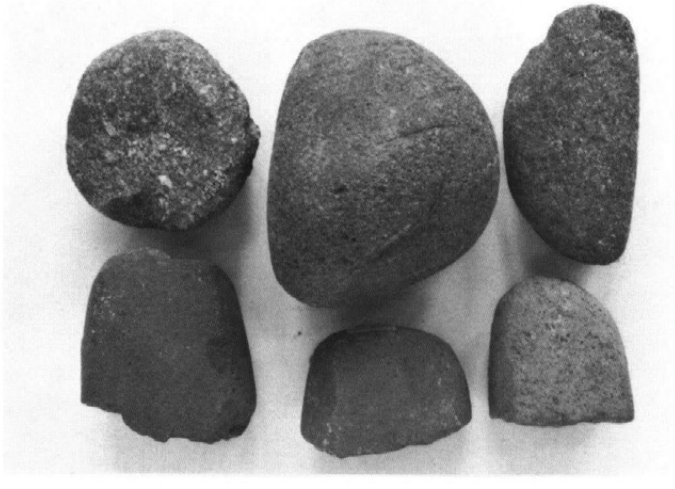
図版二十七　石器(9)



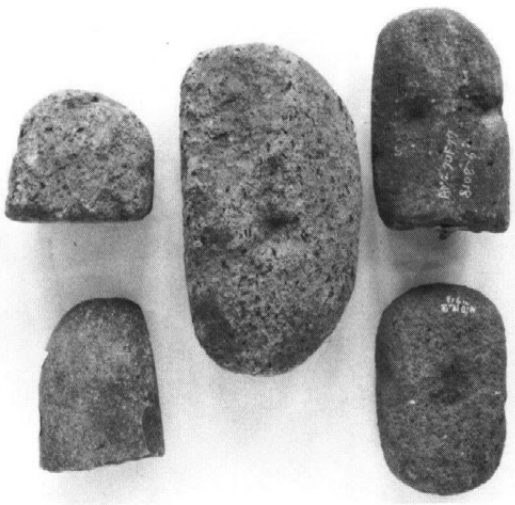
199～203



204～208

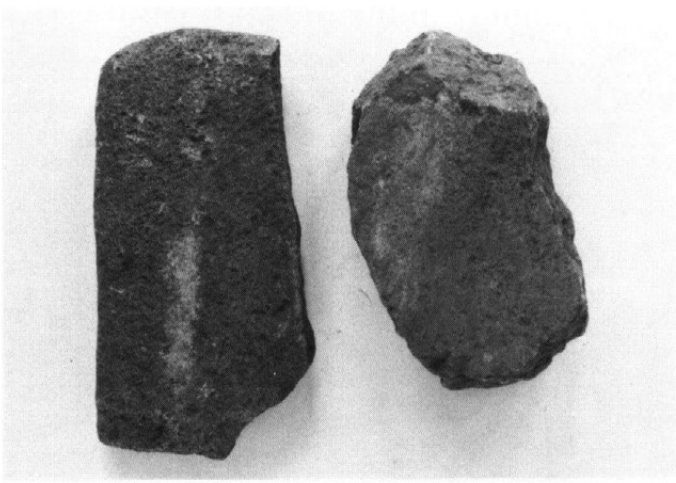


209～214

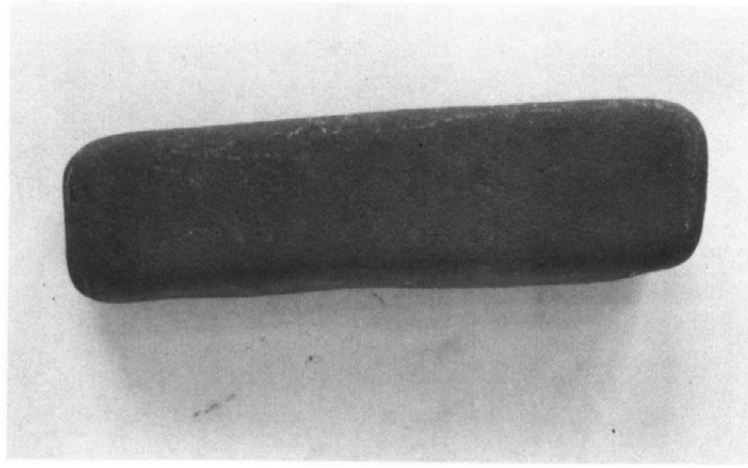


215～219

220、221

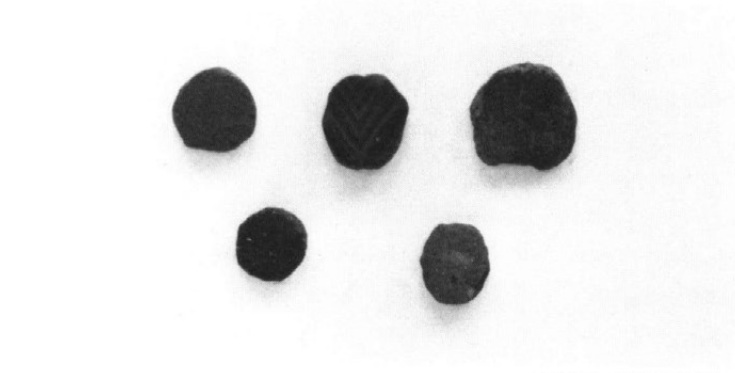


222、223



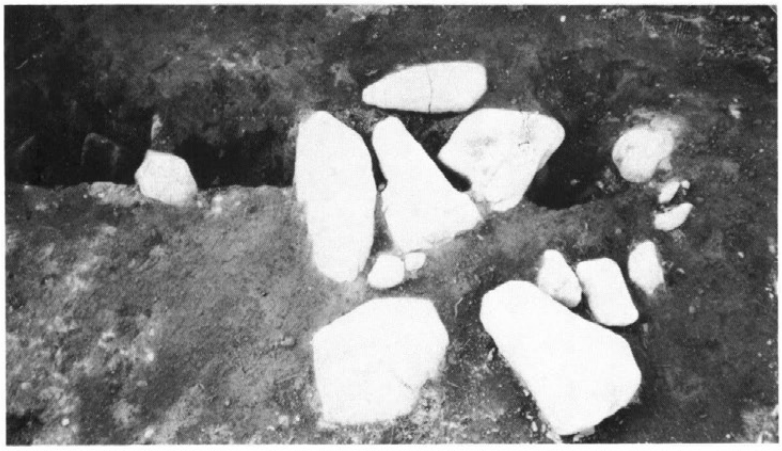
224

土製品（土偶）



土製品（土製円板）

図版三十　集石状遺構、調査スナップ



集石状遺構

E 地区（谷の傾斜面）の調査

同じE 地区の調査、遙かに松本市街を望む

松本市文化財調査報告No. 23

松本市内田雨堀遺跡

——第2次緊急発掘調査報告書——

昭和57年3月20日　印刷
昭和57年3月31日　発行

発行　松本市教育委員会
印刷　ほおずき書籍株式会社